長野市の埋蔵文化財第129集

芹田東沖遺跡

― 若里市民文化ホール地点 ―

― 都市計画道路栗田安茂里線地点 ―

２０１１・３

長野市教育委員会

序

遺跡や遺物などの埋蔵文化財は、「土地に刻まれた歴史」ともいわれるように、郷土の成り立ちと文化を理解するうえで欠くことのできない貴重な遺産です。肥沃な善光寺平の中央部に位置する長野市においては、その悠久の歴史を物語るように、現時点で700箇所を超える遺跡が周知されていますが、各種の開発事業に伴って現状での保存が困難となったものについては事前に発掘調査を実施し、記録保存という形で後世に伝えていく手段がとられています。

ここに長野市の埋蔵文化財第129集として刊行いたします本書は、若里市民文化ホール及び都市計画道路栗田安茂里線の建設に伴って実施した芹田東沖遺跡の２地点に関する発掘調査報告書であります。若里市民文化ホールは、冬季オリンピック会場に隣接した文化コンベンション施設として整備されたものであり、平成５年から３ヵ年にわたって発掘調査がすすめられました。また、都市計画道路栗田安茂里線も、同施設整備と歩を合わせて道路改良がすすめられたものですが、平成20年度から延長路線の建設が再開されたことに伴い発掘調査が追加実施されました。

若里市民文化ホール地点の発掘調査は、折しも平成10年冬季オリンピック開催に向けて市内各所での建設土木工事がピークに達しようとした当時の調査であり、新発見を含む貴重な遺構と遺物が多数確認されて注目を集めたことが思い出されます。以来十余年を経ての報告となり遅きに失した感もありますが、地域史解明の一助として、多くの皆様にこの調査成果をご活用いただければ幸いに思います。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜りました関係各位及び、発掘作業に際して多大なご尽力をいただきました地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成23年３月

長野市教育委員会
教育長　堀内征治

例　言

1　本書は、長野市が施行する文化コンベンション施設（現．若里市民文化ホール）等建設事業及び都市計画道路栗田安茂里線道路改良事業を起因とし、記録保存を目的として平成５年度から20年度にかけて実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、起因となった両事業を主管する長野市商工部商工課（現．産業振興部商工振興課）及び都市整備部都市計画課と、埋蔵文化財保護を主管する教育委員会埋蔵文化財センターとが協議調整し、発掘調査に関する直接の業務は埋蔵文化財センターが担当した。

3　発掘調査の所在地は、大字若里（現．若里３丁目）字東沖であり、字名を冠して周知の埋蔵文化財包蔵地「芹田東沖遺跡」と命名されたものである。なお、調査地の一部は大字稲葉字上千田沖にまたがるものであるが、一連の遺跡範囲内として取り扱っている。

4　発掘調査の位置と範囲を特定するため、遺跡名に付して地点名（起因事業名）を用いることとした。調査年度別の調査地点・区及び調査期間は次のとおりである。また、報告書作成へ向けての本格的な整理作業は平成19～22年度に実施した。

年度	地点名	略記号	区	調査期間
平成５	若里市民文化ホール	ＳＲＴＨ	Ａ・Ｂ・Ｃ	平成５年５月17日～10月21日
平成６	若里市民文化ホール	ＳＲＴＨ	Ｄ・Ｅ－１・２	平成６年５月９日～７年２月３日
平成７	若里市民文化ホール	ＳＲＴＨ	Ｅ－３・４	平成７年５月22日～６月16日
平成20	都市計画道路栗田安茂里線	ＫＡ－20		平成20年11月６日～12月５日

5　本書での資料提示の要領は次のとおりとした。

・調査概要について、地区毎に遺構・遺物の概要を記述し、全体図を掲載した。

・遺構について、個別に記述し、実測図、写真及び一覧表を掲載した。

・遺物について、個別に記述し、実測図、写真及び一覧表・観察表を掲載した。

6　本書の遺構測量図に示した座標は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値であるが、若里市民文化ホール地点は日本測地系（旧日本測地系）、都市計画道路栗田安茂里線地点は世界測地系（日本測地系2000）に基づく。

7　本書の執筆分担は、Ⅲ－３、Ⅳ－３を塚原由実、Ⅲ－４を㈱アルカ・角張淳一、その他を青木和明が担当した。

8　出土遺物及び調査に係る諸記録は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）で保管している。

目　次

例言・目次

Ⅰ　調査経過

1　調査の契機……1

2　調査の経過……3

3　調査の体制……4

Ⅱ　遺跡と環境……6

Ⅲ　若里市民文化ホール地点（SRTH）の調査

1　調査概要……10

2　遺構

(1)　竪穴住居……17

(2)　掘立柱建物……19

(3)　土坑・溝……20

［遺構一覧表］［遺構実測図］［遺構写真］

3　遺物

(1)　土器……60

(2)　土製品……65

(3)　石製品……66

(4)　金属製品……66

［遺物一覧表・観察表］［遺物実測図］［遺物写真］

4　作為的混入遺物（石器）について

(1)　原産地分析……96

(2)　器種と剥離面観察……96

Ⅳ　都市計画道路栗田安茂里線地点(KA-20)の調査

1　調査概要……104

2　遺構

(1)　竪穴住居……105

(2)　溝・他……105

［遺構一覧表］［遺構実測図］

3　遺物

(1)　土器……112

(2)　石製品……113

［遺物一覧表・観察表］［遺物実測図］［遺物写真］

抄録

挿図目次

図1　発掘調査の位置と字名……1

図2　発掘調査の範囲と調査区……2

図3　遺跡周辺の地形と遺跡群……7

図4　旧地形図から見た遺跡の立地……8

図5　SRTH地点、調査区全体図……32

図6～13　SRTH地点　遺構全体図……33～40

図14・15　SRTH地点　A-2区遺構実測図…41・42

図16～22　SRTH地点　B区遺構実測図…43～49

図23～26　SRTH地点　D区遺構実測図…50～53

図27　SRTH地点　E－1区遺構実測図……54

図28　SRTH地点　E－2区遺構実測図……55

図29～31　SRTH地点　E-3区遺構実測図…56～58

図32　SRTH地点　E－4区遺構実測図……59

図33～46　SRTH地点　遺物実測図……67～80

図47　KA-20地点　遺構全体図……108

図48～50　KA-20地点　遺構実測図……109～111

図51・52　KA-20地点　遺物実測図……114・115

表目次

表1　SRTH地点　遺構一覧表……29～31

表2　SRTH地点　遺物一覧表……81・82

表3　SRTH地点　土器観察表……83～89

表4　SRTH地点　その他遺物観察表……89

表5　KA-20地点　遺構一覧表……107

表6　KA-20地点　遺物一覧表……113

表7　KA-20地点　土器観察表……117

表8　KA-20地点　その他遺物観察表……117

Ⅰ　調査経過

1　調査の契機

【若里市民文化ホール地点】

平成10年の冬季オリンピック開催に向けて、市内大字若里所在の市場団地跡地約40,000㎡を敷地とし、オリンピック局施設課によるアイスホッケー競技会場（現．若里多目的スポーツアリーナ）の建設並びに、商工部商工課による文化コンベンション施設（現．若里市民文化ホール）等の建設が計画された。市教育委員会埋蔵文化財センターでは、両課の依頼に基づき、平成４年11月６日に両施設の建設予定地に関して埋蔵文化財試掘確認調査を実施した。試掘調査では、敷地の中央付近に存在する東西方向の小段丘崖を境として北側（文化コンベンション施設）において平安時代等の遺物包含層を検出し、同範囲に埋蔵文化財が包蔵される可能性が高いことを確認した。一方、段丘崖下の南側（アイスホッケー競技会場）に関しては、犀川の河道へと連なる浸食面であることから、埋蔵文化財包蔵の可能性は皆無と判断された。

この試掘調査結果を踏まえ、平成７年度の施設建設着工に先立って、５年度から約18,000㎡を対象として記録保存のための発掘調査を実施することを決定した。新発見となった遺跡の名称は、地区及び字名を合成して「芹田東沖遺跡」と命名し、平成５年５月17日付けで埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第57条の３第１項）及び埋蔵文化財発掘調査の通知（第98条の２第１項）を文化庁長官宛に提出し、現地作業開始の運びとなった。

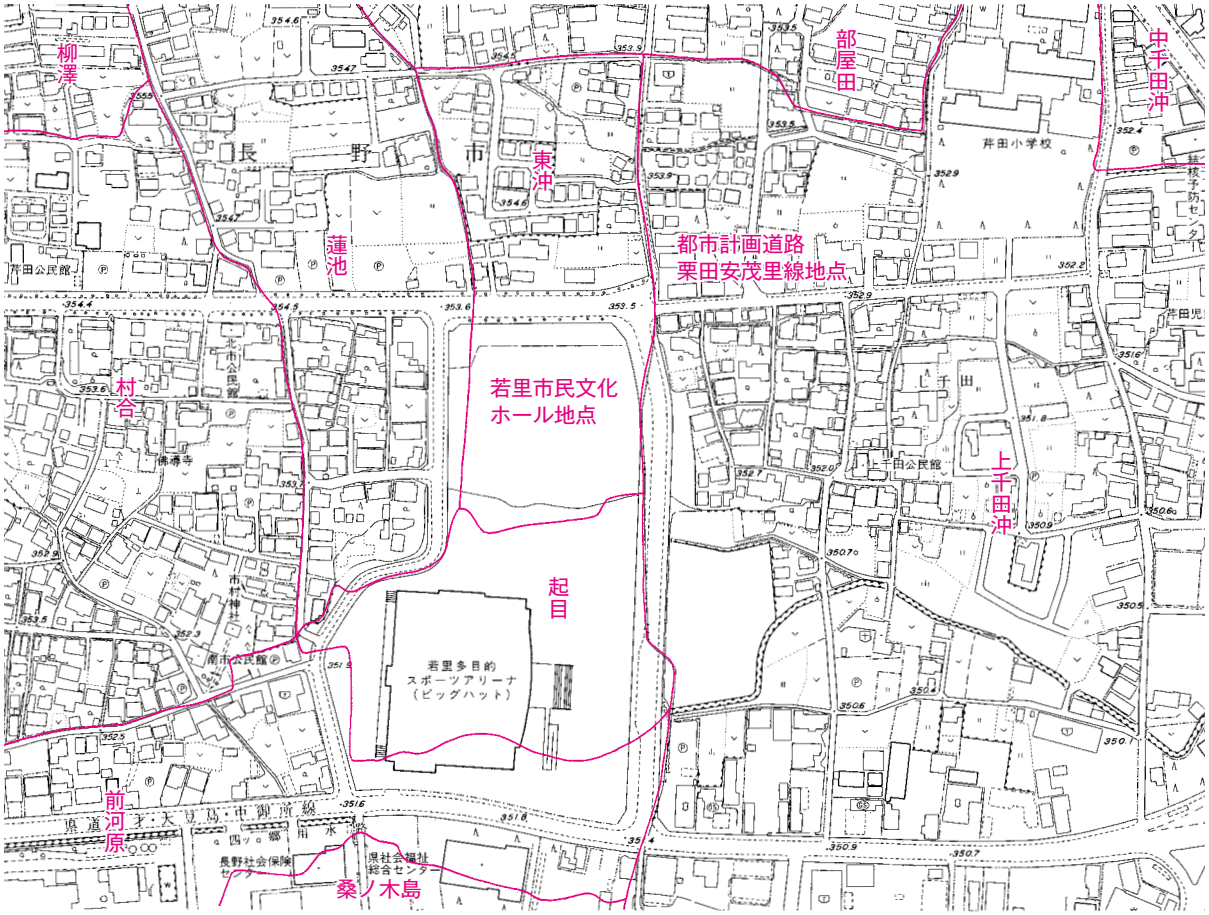


図１　発掘調査の位置と字名（１：5,000）

【都市計画道路栗田安茂里線地点】

アイスホッケー競技会場及び文化コンベンション施設等の建設整備と平行し、施設北側に位置する都市計画道路「栗田安茂里線」の拡幅改良が都市整備部都市計画課によって計画された。市教委埋蔵文化財センターでは施設建設予定地における試掘調査結果に照らし、当該路線においても埋蔵文化財が包蔵される可能性が高いと判断し、工事着工に際して平成５年１月25日から発掘調査に着手した。結果として、明確な遺構・遺物を検出確認するには至らず、２月５日をもって当該路線中の大字若里区間に関する調査は終了となった。

大字若里まで完成した当該路線は、東側に向けて大字稲葉から栗田にかけて新規路線が延伸する計画にあり、全線の開通を目指してその後も用地取得等がすすめられ、埋蔵文化財保護に係る協議も継続されることとなった。平成18年８月29・30日、新規路線となる大字稲葉・栗田区間に関する試掘確認調査を実施した結果、大字稲葉字上千田沖の一部において芹田東沖遺跡の連続範囲が確認されるに至り、平成20年度の工事再開に合わせ、記録保存のための発掘調査実施が決定された。平成20年10月17日付けで長野市長名による埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第94条第１項）が長野県教育委員会教育長宛に提出され、現地作業開始の運びとなった。

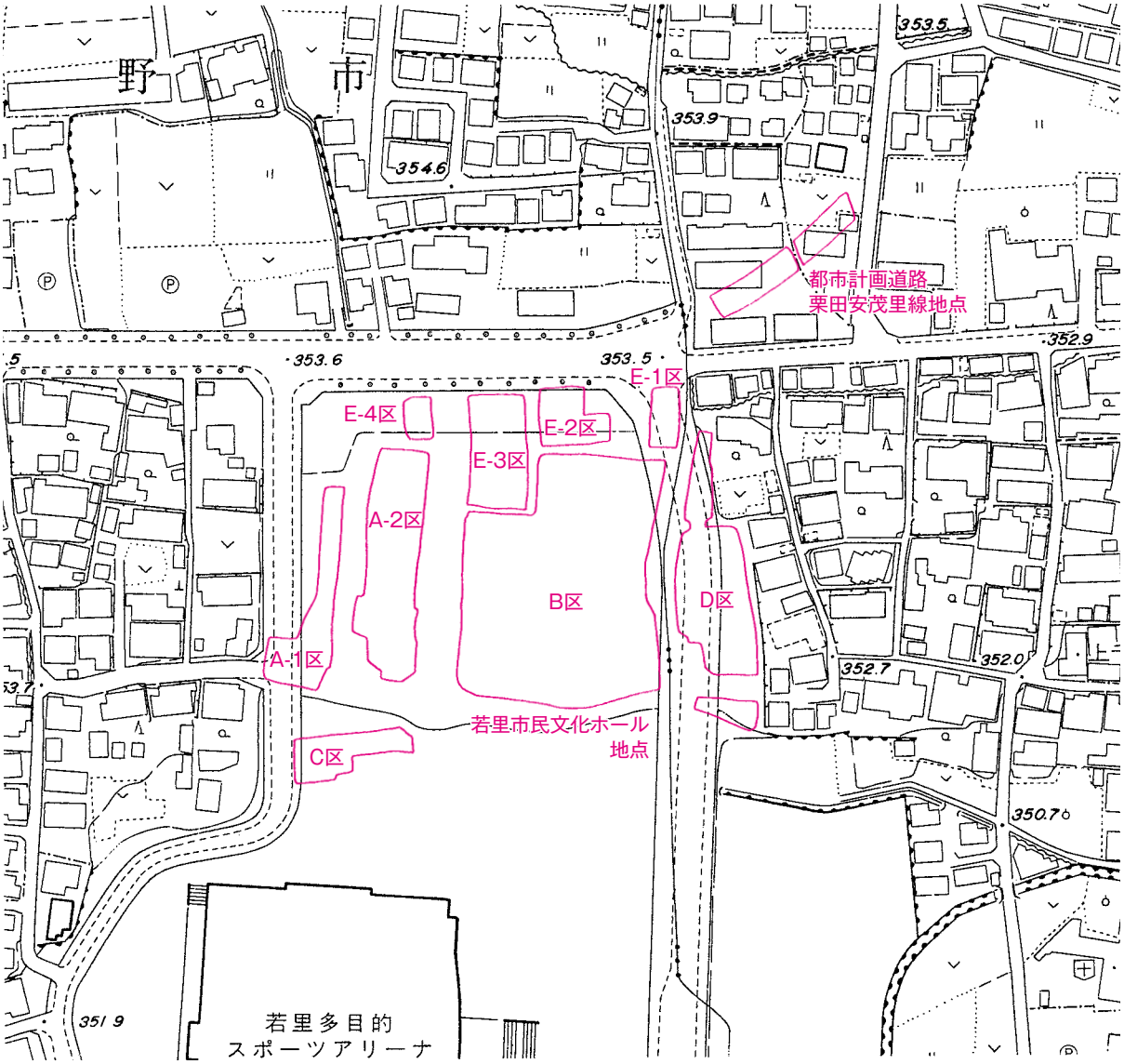


図２　発掘調査の範囲と調査区（１：2,500）

２　調査の経過

【平成５年度・若里市民文化ホール地点】

発掘調査期間：平成５年５月17日～10月21日（稼働日数92日間）

調査対象地区：Ａ区、Ｂ区、Ｃ区（構造物・舗装等が撤去された市場団地跡地約13,000㎡を対象）

Ａ区を手始めとし、５月17日に重機による表土除去作業に着手した。試掘調査結果から、地表下２ｍに至るまでの間に上下２層の遺物包含層の存在が想定されていたため、上層における奈良平安時代遺構検出の後、さらに下層に向けての掘削及び検出作業を継続した。６月21日にはＣ区の表土除去作業にも着手したが、下層においては明確な遺構存在の証左が得られないまま、７月30日までにＡ・Ｃ区に関しての遺構検出及び記録作業を終了した。この時点において、下層における遺物・遺構包蔵の可能性は皆無であると判断するに至り、７月23日から表土除去作業に着手したＢ区に関しては、調査対象を上層に限定する方針とした。粘性が強く色調の変化に乏しい土質から、遺構検出には困難が伴ったが、土器破片等の遺物出土状況を手掛かりとして包含層及び遺構掘込基盤層を確定しながら、その大まかな分布状況を把握した後に順次遺構の掘り下げを実施することとした。９月13日からは遺物包含層の堆積が厚く遺構重複が著しいＢ区中央付近に関しての第２次表土除去及び遺構検出作業に着手、10月15日には掘り下げを概ね終了、それ以降に竪穴住居床下の掘り方確認及び掘立柱建物柱穴の断割り確認などの補足調査を実施し、10月21日に機器材を撤収して年度内調査を完了した。

【平成６年度・若里市民文化ホール地点】

発掘調査期間：平成６年５月９日～６月30日　平成６年11月14日～平成７年２月３日（稼働日数57日間）

調査対象地区：Ｄ区、Ｅ－１・２区（旧市場団地東・北側の店舗・住宅部分約3,400㎡を対象）

建設予定地に含まれている市道沿線の店舗・住宅の移転解体スケジュールにあわせて、５月９日から予備調査としての試掘作業等に着手した。まずは、宮田堰以東のＤ区（大字稲葉）を対象とし、５月30日より表土除去作業を開始、調査区北側から順次遺構検出を実施、６月27日までに掘り下げと記録作業を終了、６月30日までに埋め戻しまで完了した。以降11月に至るまで作業中断となったが、北側市道沿線における家屋等の移転を待って、11月17日にＥ－１区を対象として作業を再開、12月２日までに遺構検出及び記録作業を終了した。再度の作業中断の後、１月18日に至ってＥ－２区を対象とした調査を再開、２月３日までに遺構検出及び記録作業を終了した。この時点で、年度内には家屋等の移転が進展しない見通しとなったため、年度内の調査を完了とした。

【平成７年度・若里市民文化ホール地点】

発掘調査期間：平成７年５月22日～６月16日（稼働日数19日間）

調査対象地区：Ｅ－３・４区（旧市場団地北側の店舗・住宅部分約1,200㎡を対象）

懸案の市道沿線の家屋等移転が完了したことを受けて、５月22日からＥ－３区の表土除去に着手した。５月26日にはＥ－４区の表土除去を実施、両地区において順次遺構検出及び掘り下げ作業を継続した。６月16日までに両区に関する記録作業を終了、平成５年度以来継続してきた発掘調査に係る全ての現場作業を完了とした。

【平成20年度・都市計画道路栗田安茂里線地点】

発掘調査期間：平成20年11月６日～12月５日（稼働日数15日間）

対象路線東側範囲についての重機による表土除去作業から着手し、11月10日から作業員による遺構検出及び掘り下げを実施した。11月17日までに東側範囲に関する遺構の掘り下げと測量を終了したが、駐車場等移転の都合から作業中断となった。11月26日に作業を再開し、西側範囲に関する表土除去、遺構検出及び掘り下げを継続した。12月４日までに測量等記録作業を終了し、発掘調査に係るすべての現場作業を完了とした。

３　調査の体制

【平成５～７年度】

調査主体者　　長野市教育委員会　　教育長　　滝澤忠男

調 査 機 関　　長野市埋蔵文化財センター　　所　長　　荒井和雄（～Ｈ６）　丸田修三（Ｈ７）

主　　幹（兼所長補佐）　鈴木貞男（Ｈ６）

所長補佐（兼庶務係長）　山中武徳（～Ｈ６）　小林重夫（Ｈ７）

所長補佐（兼調査係長）　矢口忠良

庶務係　事務員　　青木厚子

調査係　主　査　　青木和明

主　事　　千野　浩　飯島哲也

〃　　風間栄一（Ｈ６～）　小林和子（Ｈ６～）

専門主事　　羽場卓雄（Ｈ５）　太田重成（～Ｈ６）　清水武（Ｈ６～）

専門員　　中殿章子　横山かよ子（～Ｈ５）　笠井敦子（～Ｈ６）

〃　　山田美弥子　寺島孝典　西沢真弓

〃　　田中（小野）由美子（Ｈ６～）　田村直也（Ｈ６）

〃　　永井洋一（Ｈ７）　堀内健次（Ｈ７）　藤田隆之（Ｈ７）

発掘調査員　　勝田智紀（立正大学生）

調査作業員　　金子ゆき　川浦秀子　神頭幸雄　佐々木慶子　佐藤ひで子　成田孜子　新津三千子　西尾千枝
藤沢たつい　三九二富子　宮島静美　美谷島昇　宮原孝子　向山純子　山崎洋子　吉沢トシ子
脇坂智子　清水七男　待井春子　鈴木友江　小林紀代美　桜井修白　小林こま代　小林三郎
倉島紀代子　小松未喜子　小松安和　松沢ナオエ　徳永勝子　徳永一　酒井秀　宮坂義憲
中沢雄司　松浦サトミ　川村けさ江　征矢野篁子　倉石光将　峯村孝一　宮原千治　高橋薫
伊藤裕子　山室やすい　岩井仁美　高畠政子　勝田千亜紀　堀内健次

整理作業員　　池田見紀　岡沢治子　徳成奈於子

測量業務委託　株式会社写真測図研究所

平成５年度　若里市民文化ホール地点の調査

平成６年度　若里市民文化ホール地点の調査

【平成19～22年度】

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	立岩睦秀（～H21.12）　堀内征治（H21.12～）
調査機関	文化財課	課長	雨宮一雄（～H20）　金井隆子（H21～）
	埋蔵文化財センター	所長	青木和明
	庶務担当	係長	宮沢和雄（～H20）　北村嘉孝（H21～）
		職員	吉村久江（～H20）　大竹千春（H21～）
	調査担当	係長	千野浩（H21～）
		主査	風間栄一（H19）　小林和子
		主事	宿野隆史（～H20）　塚原秀之（H20～）
		専門員	遠藤恵実子　長瀬出（H19）　山野井智子
			山岸千晃（H19）小池勝典（H19）　柴田洋孝（～H20）
		〃	向山純子（～H20）　佐々木麻由子（H19）
			塚原（小林）由実（H20～）　木村（小山）夏奈（H20～）
		〃	西澤尚紘（H20・21）　山本賢治（H21～）
		〃	髙田亜紀子（H22）　柳生俊樹（H22）

調査員　青木善子　池田寛子　多羅沢美恵子　鳥羽徳子　中殿章子　武藤信子　矢口栄子

調査補助員　中嶋昭二郎

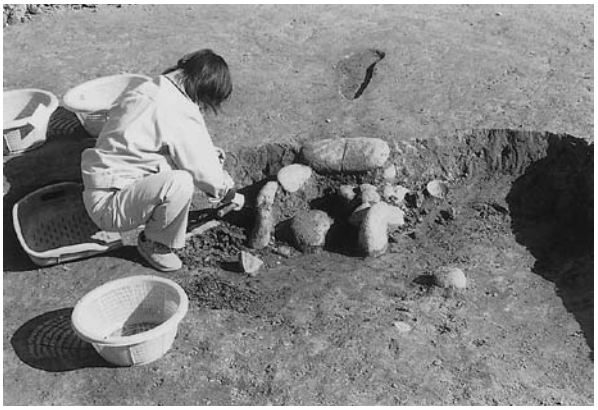
発掘作業員　岩佐道子　加藤英次　久保田温子　小松俊一　田村玲子　戸谷茂　峯村洋子　宮崎巌

整理作業員　倉島敬子　小泉ひろ美　清水さゆり　関崎文子　富田景子　西尾千枝　待井かおる
三好明子　村松正子

測量業務委託　株式会社写真測図研究所

石器分析業務委託　株式会社アルカ

平成20年度　都市計画道路栗田安茂里線地点の調査



平成20年度　都市計画道路栗田安茂里線地点の調査

Ⅱ　遺跡と環境

調査地の位置と地形

千曲川と犀川の合流点を中心として広がる長野盆地の西側には、西部山地から流下した大小の河川の堆積による扇状地が発達している。盆地内で最大の犀川扇状地以北にあっては、西から、裾花川、湯福川、浅川の各扇状地が複合し、居住域に適した南向きの緩斜面が形成される。旧来の長野市街地は、善光寺門前町を核として形成され、この複合扇状地上に発達してきたものである。遺跡の存在する芹田地区は、市街地の南部にあたるＪＲ長野駅東側に位置し、近年の宅地化以前までは水田と桑畑が広がる田園地帯であった。その範囲は概ね裾花川扇状地と重なり、扇状地内の微低地（裾花川旧流路）を利用した用水路（堰）が、西から漆田川、宮川、計渇川、古川、南八幡川と並列し、網目状に連絡し合いながら農地を潤してきた。このように裾花川旧流路が網目状に入り組む扇状地内にあっては、尾根状または島状に残された微高地を選んで遺跡が営まれている。芹田東沖遺跡は、芹田小学校遺跡とともに、集落遺跡として宮川筋と計渇川筋に挟まれた微高地の一角に位置しており、調査地の南側が一段標高を減じた犀川氾濫原に隣接し、その境界部分には犀川の侵食による比高差２m内外の段丘地形を観察することができる。同様に一帯の微高地には集落遺跡が分布しており、上流の微高地には御所遺跡が、北側の計渇川筋と古川筋に挟まれた微高地には東番場遺跡が営まれている。また、地形的な高低差を利用して中世城館跡も構築され、中御所居館跡や栗田城跡が集落遺跡と重複しながら分布している。

なお、調査地は、民営の市場団地（現在は長野卸売市場協同組合）として昭和40年までに造成されたものである。その後、経営規模拡大を目指す中で昭和63年に市場団地が市内真島町へと移転することとなり、その跡地利用として冬季オリンピック施設等の建設が計画されるに至ったものである。

調査地周辺の遺跡群

調査地が立地する裾花川扇状地には、地理環境を共有しながら多くの遺跡が有機的な関連をもって分布している。当市では、これら複数の遺跡を包括する範囲として「遺跡群」を設定しており、裾花川扇状地内に分布する遺跡の総体を「裾花川扇状地遺跡群」と呼ぶこととしている。同様に、安茂里地区の裾花川右岸の扇状地に分布するものを「安茂里遺跡群」、長野地区の湯福川扇状地と裾花川河岸段丘に分布するものを「長野遺跡群」、浅川扇状地に分布するものを「浅川扇状地遺跡群」と呼ぶこととしている。

次に、各遺跡群内の代表的な遺跡について紹介する。

【裾花川扇状地遺跡群】

１　芹田東沖遺跡　　大字若里字東沖ほか、平成５～７・20年度調査、本書

古墳後期～平安時代竪穴住居44軒、掘立柱建物14棟などを確認

２　芹田小学校遺跡　　大字稲葉字上千田沖ほか、昭和61年度調査、長野市教委1987『芹田小学校遺跡』

平安時代竪穴住居２軒などを確認

３　中御所居館跡・御所遺跡　　大字中御所字御所ほか、平成６・７・14・16年度～調査中、未報告

古墳後期～平安時代竪穴住居70軒以上、中世城館（主郭・土塁・堀・外縁）・掘立柱建物などを確認

４　栗田城跡・東番場遺跡　　大字栗田字東番場、昭和62・平成元・５・６年度調査、長野市教委1988『東番場遺跡』・1991『栗田城跡ほか』・1994『栗田城跡（2)』・1995『栗田城跡（3)』

古墳後期～平安時代竪穴住居、中世城館（主郭・堀・外縁）・竪穴・掘立柱建物などを確認

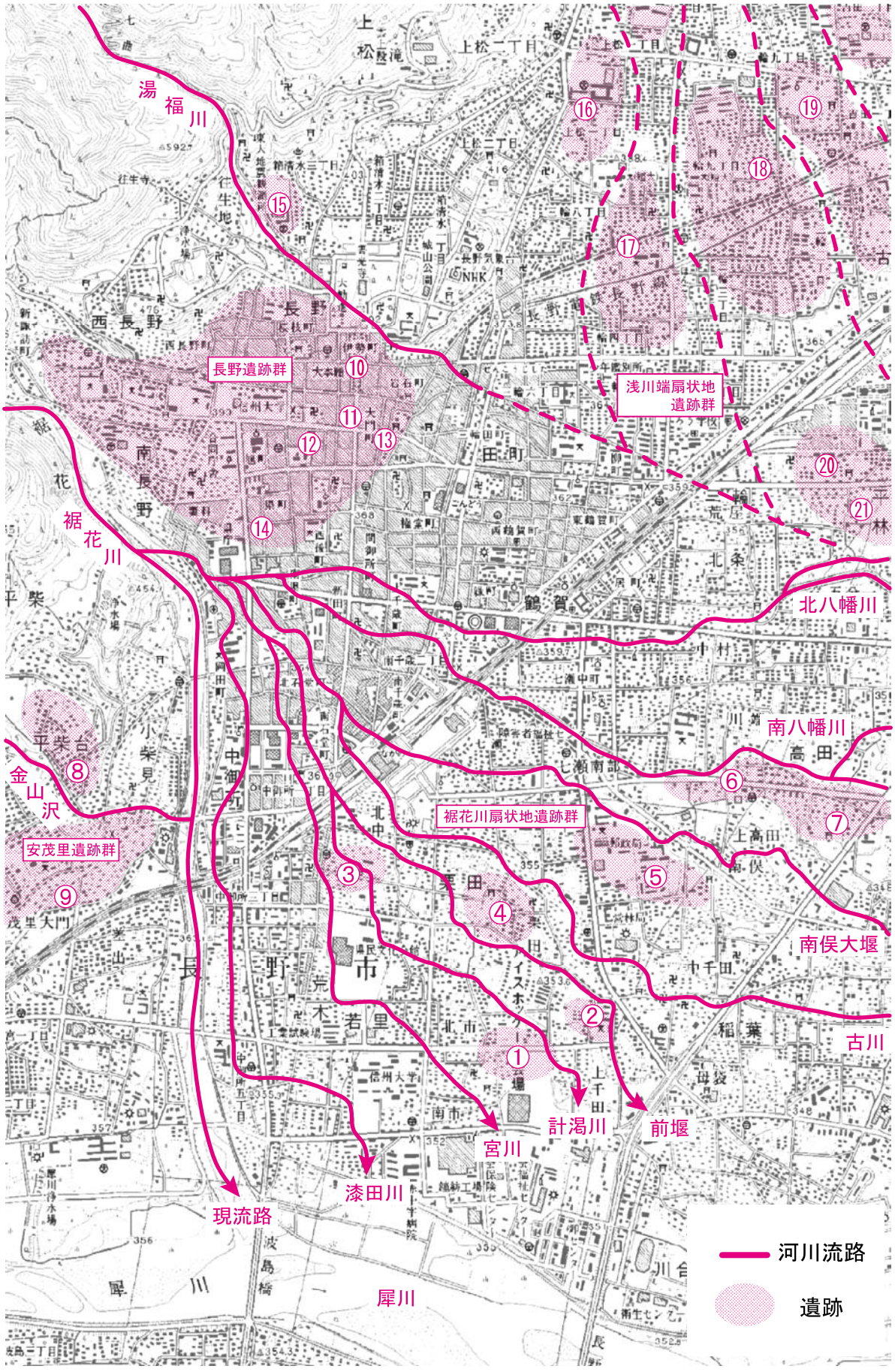


図３　周辺の地形と遺跡群（１：25,000）

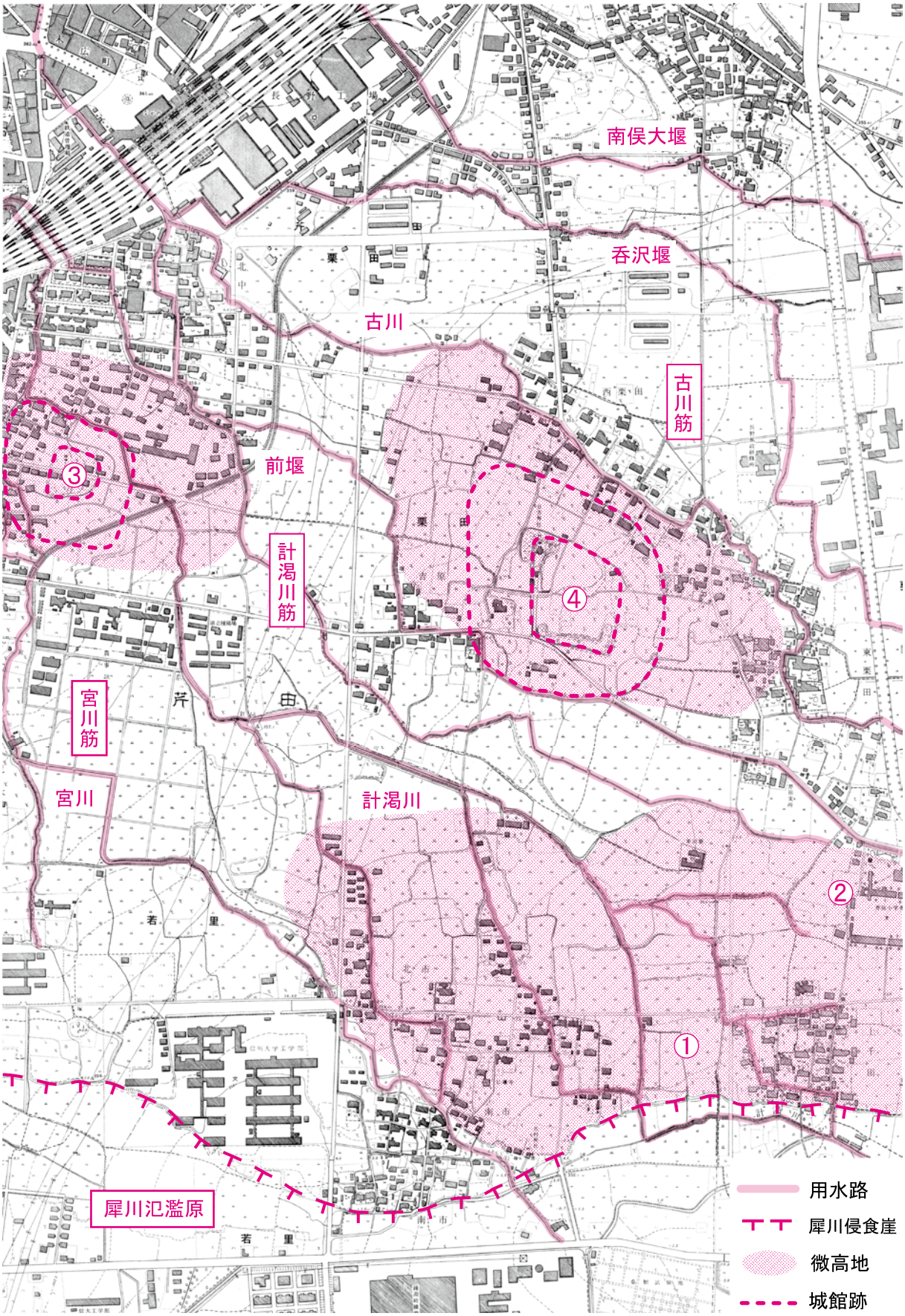


図４　旧地形図から見た遺跡立地（１：8,000）

5 **八幡田沖遺跡**　大字稲葉字八幡田沖、平成５年度調査、長野市教委1995『八幡田沖遺跡』
弥生後期溝、古墳時代前期～後期竪穴住居18軒、奈良～平安時代竪穴住居７軒などを確認

6 **中沢城館跡・西方遺跡**　大字高田字西方、平成６～８・10・11年度調査、長野市教委1998『西方遺跡・中沢城館跡』・2004『西方遺跡（２）』
古墳前期竪穴住居４軒、古墳後期竪穴住居１軒、平安時代竪穴住居15軒、中世城館（堀）などを確認

7 **南向塚古墳**　大字高田字南向、未調査、長野市2003『長野市市誌』第12巻資料編
長野盆地平地部では唯一の前方後円墳と目されるが、明確な施設・出土遺物については不明

【安茂里遺跡群】

8 **平柴平遺跡**　大字安茂里字遠藤塚ほか、昭和46年度調査、長野市2003『長野市市誌』第12巻資料編
縄文後期・弥生中～後期・平安時代竪穴住居、弥生後期・古墳時代方形周溝墓などを確認

9 **大門遺跡**　大字安茂里字大門・竹裏、平成５年度調査、長野市教委2011『大門遺跡』
縄文中期土坑、奈良時代竪穴住居３軒・掘立柱建物、平安時代竪穴住居17軒などを確認

【長野遺跡群】

10 **元善町遺跡**　大字長野字元善町、平成５年度調査、長野市教委2008『元善町遺跡』
古墳時代竪穴住居、善光寺に関連する中世溝・盛土造成、近世土坑などを確認

11 **善光寺門前町跡**　大字長野字大門町、平成17・19年度調査、長野市教委2006・2008『善光寺門前町跡』
古墳時代竪穴住居、中世溝・土坑・石積・竪穴、近世建物基礎・土坑・地下施設などを確認

12 **西町遺跡**　大字長野字西町ほか、平成７・８年度調査、長野市教委1998『西町遺跡』
縄文中期・弥生中期・古墳前～後期・奈良・平安時代竪穴住居、中世・近世建物・土坑などを確認

13 **東町遺跡**　大字長野字東町ほか、平成７・８年度調査、未報告
弥生中期・古墳中～後期竪穴住居、中世・近世建物・土坑などを確認

14 **県町遺跡**　大字南長野字聖徳、昭和44・52年度調査、長野市2003『長野市市誌』第12巻資料編
古墳時代中～後期・奈良時代・平安時代竪穴住居、奈良時代掘立柱建物などを確認

15 **箱清水遺跡**　箱清水三丁目字高岡道南、昭和55・58年度調査、長野市教委1981・1984『箱清水遺跡』
弥生後期竪穴住居１軒などを確認

【浅川扇状地遺跡群】

16 **本村東沖遺跡**　上松一丁目字本村東沖、平成３・６・16年度調査、長野市教委1993・1995・2005
縄文晩期土坑、弥生中～後期・古墳前～後期・平安時代竪穴住居、弥生後期周溝墓・木管墓などを確認

17 **三輪遺跡**　三輪八丁目相木東ほか、昭和50・51・60・平成２・４・５年度調査、長野市教委1980・1987 1991・1993・1994『三輪遺跡』 弥生後期・古墳中～後期・平安時代竪穴住居などを確認

18 **相木城跡**　三輪八丁目字本城、未調査、長野市2003『長野市市誌』第12巻資料編
周囲に土塁・堀をめぐらせた方形の居館跡　住人は相木氏あるいは宇木氏ともいわれる

19 **押鐘城跡**　吉田一丁目字本城、未調査、長野市2003『長野市市誌』第12巻資料編
周囲に土塁・堀をめぐらせた回字形の居館跡

20 **平林城跡**　平林二丁目字居村沖、長野市2003『長野市市誌』第12巻資料編
周囲に土塁・堀をめぐらせた回字形の居館跡　中心屋敷周囲に付属郭を伴う

21 **平林東沖遺跡**　平林一丁目字東沖、平成５年度調査、長野市教委2011『大門遺跡ほか』
縄文中期土坑、奈良時代竪穴住居３軒・掘立柱建物、平安時代竪穴住居17軒などを確認

Ⅲ　若里市民文化ホール地点（SRTH）の調査

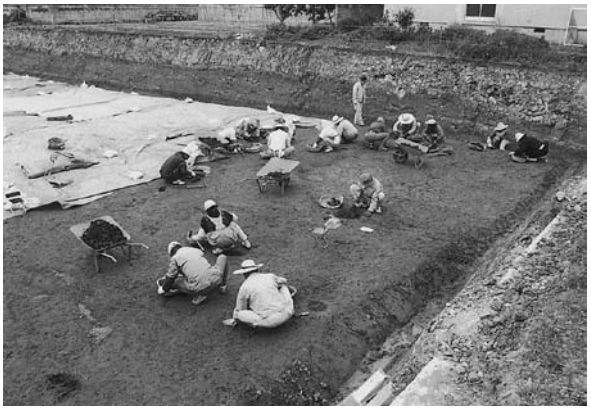
1　調査概要

建設予定地一帯は、昭和40年代から大規模に造成されて市場団地として整備されたため、旧来の地形の面影をとどめてはいない。元々は南市集落と上千田集落の間に引き込まれた用水路「計渇川」沿いに開かれた水田域であり、建設予定地の中央付近を東西に横断する段丘（侵食崖）を境として、北側が遺跡範囲となる裾花川扇状地面、南側が標高を一段減じた犀川氾濫原となっている。市場団地の造成と撤去に伴って表層は多分に撹乱を受け、また、広範囲の中で部分的な変移も観察されるが、標準的な土層堆積状態は概ね次のとおりである。

第１層：地表～　表土層（盛土等造成に伴う）
第２層：0.3m～　青灰色粘土層（旧水田土壌）
第３層：0.7m～　灰褐色粘土層（遺物包含層）
第４層：1.0m～　褐色粘土層（有機質混合）
第５層：1.2m～　黄褐色シルト質粘土層
第６層：1.5m～　灰～黄褐色粘土層
第７層：2.0m～　黒色粘土層（有機質多混）
第８層：2.2m～　灰褐色シルト質粘土層

Ａ－１区上層・遺構検出作業

堆積する土壌は、未分解の有機質が一部に混合するなど、低湿な環境下において連続的に形成された粘土が主体となり、基本的には当該地点が扇状地内における微低地に属し、通常の集落遺跡と比較してやや異質な環境内に立地していることがわかる。


Ａ－１区下層・遺構検出作業

そのなかで、平安時代相当の遺物包含が確認された第３層（以下「上層」という。）に関しては、第４層もしくは５層上面を検出面として遺構検出確認を行った。また、地下２ｍの位置で柱穴状の落ち込み等が確認された第７層（以下「下層」という。）に関しては、一部の地区において第８層上面を検出面として遺構検出確認を行った。結果として、上層に遺構・遺物の分布が確認され、下層にはそれが存在しないことが判明した。

調査においては、旧市場団地内の道路等の区画に応じて地区割りをし、調査初年度にＡ～Ｃ区を設定。次年度以降、外周の民家移転の進捗に応じてＤ・Ｅ区を設定し、順次調査を進めた。各地区での検出遺構と遺物の概要は、表１にまとめたとおりであり、総体として確認された遺構は、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住

Ａ－２区下層・遺構検出作業

居44軒、溝16本、土坑26基、掘立柱建物14棟などである（図５）。土壌が粘土質であることや土色変化に乏しいことなど、遺構の検出確認には不利な条件下において、確認されないまま見落とされた遺構も多いと考えられるが、実質の調査面積11,590㎡の中に分布している遺構としては少数にとどまる例と言って良い。次に、地区別に調査概要をまとめる。

Ａ区の調査と検出遺構

調査地西側の範囲をＡ区とし、さらにその中で西側部分をＡ－１区、東側部分をＡ－２区とした。

平安時代相当の遺物包含層を対象とした上層に関しては、Ａ－１区において古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居６軒（１～６号住居、ただし１号住居は調査区北壁断面における確認のため平面的に検出していない。）と掘立柱建物１棟（０号建物）を検出した。

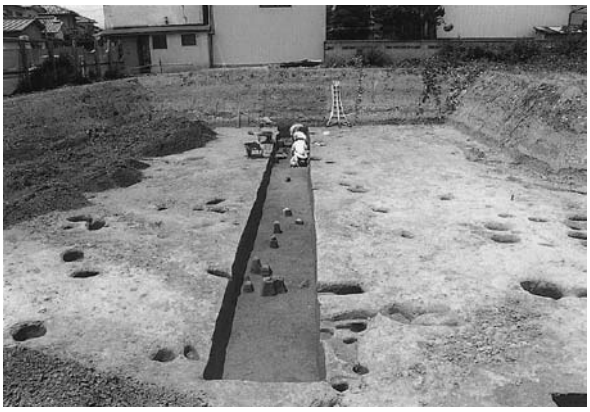
地下２ｍの黒色粘土層を対象とした下層に関しては、検出作業によって大小の黒色土の落ち込みが分布する状況を確認した（写真参照）。当初、これら黒色土の落ち込みに関しては、柱穴等の人為的な掘り込みによる遺構であると理解し、検出確認をすすめたものであるが、遺物を全く伴出しない点などから人為としての証左が得られず、形状が不明瞭で規則性も有さないことも勘案し、軟弱な堆積環境において生成された自然の窪みあるいは染みもしくは植物根茎などの貫入痕と理解すべきとの結論に至ったものである。

なお、下層における遺構検出作業においては、縄文土器破片や黒曜石製石器及び剥片など、少量の遺物が散発的に出土する状況が存在した。しかしながら、その出土状況に不審な点があり、遺物のなかに現代人の手による模造品が含まれている事実が判明したことから（第４節参照）、出土したとされる遺物のすべては作為的に混入されたものであって本来的な遺物と認定することはできない、と結論付けられたものである。

Ｃ区の調査と検出遺構

調査区南西の一角がＣ区である。上層及び下層について遺構の検出作業を実施したが、遺構の存在は確認され

Ａ－２区下層・遺構検出作業



Ａ－１区下層・試掘状況

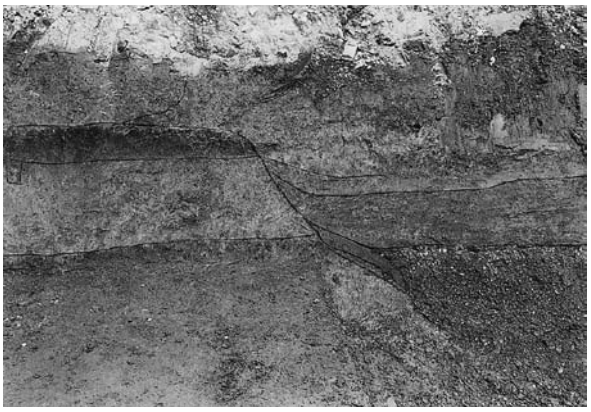
Ａ－１区下層・黒色土落ち込み検出状況（南から）

Ａ－２区下層・黒色土落ち込み検出状況（南から）

ていない。

なお、当調査区では、土層断面における調査によって侵食崖の形成と埋没に係る所見が得られている。当調査区は、遺跡の南縁辺を画する段丘（犀川による侵食崖）部分に位置しているものであるが、右に掲載した写真は、調査区の断面に表れたその侵食崖の断面と土層の堆積状態である。犀川氾濫の水流によって扇状地面が大きく侵食され、ほぼ45度の傾斜角の崖面が形成されている状況が確認できる。また、侵食の直後には氾濫堆積が始まったらしく、崖面は地表下２ｍまで砂礫によって埋没している状況も観察できる。段丘地形の形成過程を具体的に物語る資料として貴重である。

Ｃ区・土層断面（犀川による侵食崖）



同上・左側：扇状地の堆積、右側：氾濫原の堆積

Ｂ区の調査と検出遺構

調査地の中央部を広く占める範囲がＢ区である。遺物の取り上げに際して、北東側をＢ－１区、南西側をＢ－２区としているが、あくまで便宜的な区分である。

上層について遺構検出作業を実施し、竪穴住居等多数の遺構を確認している。下層についてはＡ・Ｃ区の調査実績を踏まえて遺構存在の可能性はほぼ皆無と判断し、一部に試掘坑を設けて状況を再確認したにとどまる。

Ｂ区における遺構分布をみると、北西～南東方向に直線的に走る一連の溝（２～４・９号溝）を境として様相が二分される。南西側には竪穴住居及び掘立柱建物が重複しながら多数分布するのに対して、北東側では遺構の分布が確認されずに水田土壌に近い強粘性土壌の堆積が観察される。隣接する各地区の遺構分布状態も総合すれば、竪穴住居等が分布する南西側は居住域として利用された微高地に該当し、それに沿った北東側は帯状の低地となって耕作域として利用されていた状況が想定できる。北西～南東方向に走る一連の溝はその境界に敷設され、土地利用に係る区画あるいは基準線としての役割を果たしている可能性が高い。また、溝と並列して、柱穴（杭）列も検出されていることから、水路的な遺構であったとも考えられる。いずれにせよこの一連の溝による区画が、遺構の分布と構成に係りを有していることには間違いない。

一連の溝により区画された南西側の居住域は、遺構分

Ｂ区・遺構検出作業

Ｂ区・遺構検出作業

布状態からさらに二分され、北側が平安時代（９世紀代）所産の竪穴住居（７～27号住居）密集地帯、南側が奈良時代（８世紀代）所産の大形の竪穴住居（10・20・25号住居）及び掘立柱建物（１～６号建物）の分布地帯となっている。前者は一辺４m内外の竪穴住居15基以上が、重複あるいは辺を接して連続的に構築されているものである。後者は、一辺７m前後の大形住居３軒と掘立柱建物５棟以上が、目立った重複関係をもたずに構築されているものである。また南側範囲には、大形の柱穴が多数分布しており、その配列は判然としないものの掘立柱建物が集中的に構築されている可能性が示唆される。

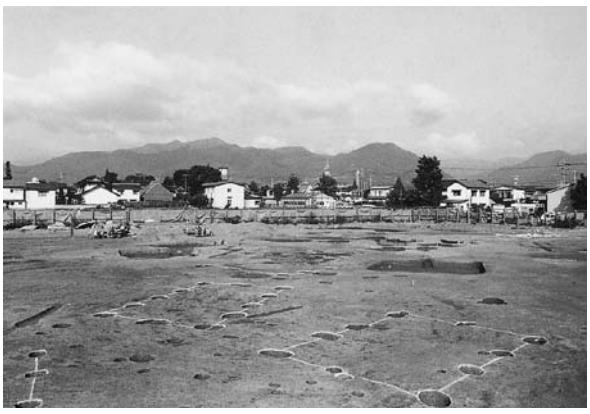
なお、当地区の検出面からは多量の遺物（土器破片90kg）出土を見ている。遺構の検出確認作業において土質・土色の見究めが難航した点も考え合わせれば、当地区にはさらに多くの遺構が存在していたと考えるべきであろう。したがって、欠落と誤認が多く含まれていることが前提となるものであるが、ここに提示できた遺構の分布状態から、集落構造の変遷と企画性を予測することは許容されると思われる。

ここでまず注目される点は、竪穴住居あるいは掘立柱建物の主軸方位である。平安時代竪穴住居の主軸がほぼ南北方位をとるのに対し、奈良時代前半の竪穴住居（20・25号住居）は北西方向に主軸方位を傾ける。この傾きは、居住域を区画していると考えた一連の溝（２～４・９号溝）とも合致するものであり、地形傾斜に則った本来的・地理的な方位と位置づけることができる。当該集落の成立当初から奈良時代まで用いられた、集落内の基準線の方位を示すものであろう。一方の平安時代竪穴住居に通有の南北方位は、奈良時代後半段階の竪穴住居（10号住居）から採用されているらしく、意図的に設定された新たな基準線の方位を示すものであろう。掘立柱建物の主軸方位もこの２方向に対応しており、南北方位から偏る３・５号建物は奈良時代前半、その他は奈良時代後半以降の所産と判断することができる。

おそらく、この基準線の変更は奈良時代における条里制の施行に関係するものであって、その意味においては、当遺跡だけの問題にとどまるものではないが、８世紀から９世紀にかけての時間幅の中で、竪穴住居と掘立柱建

B区・遺構検出状況（北から）

B区・遺構検出状況（北東から）



B区・遺構検出状況（南東から）

B区・遺構検出状況（南西から）

物とがある種の計画性をもちながら連続的に営まれた結果が示されていると理解しておきたい。

なお、調査区の北西隅（７号住居の西側）から弥生後期土器３個体が一括出土している（図42－289～291）。明確な遺構を確認するには至っていないが、出土状態からみてなんらかの遺構に埋設された土器群と考えてよい。裾花川扇状地遺跡群内では弥生時代所産の遺物出土例は今のところ僅少であるが、同段階には集落域としての利用が始まっていることを示す資料となろう。

Ｂ区・竪穴住居の検出作業

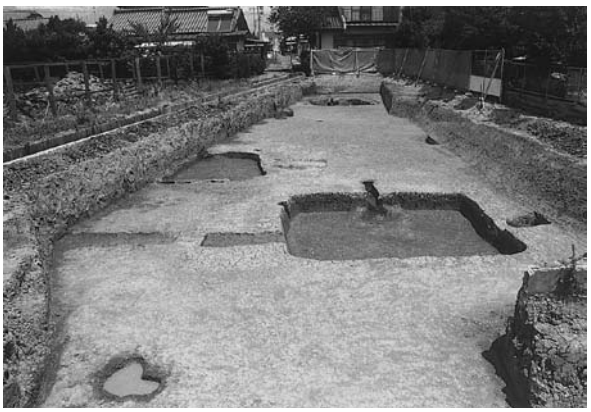
Ｄ区の調査と検出遺構

調査地東側の範囲がＤ区である。Ｂ区とは計渇川分流の用水路である宮田堰によって隔てられ、地籍としては大字稲葉字上千田沖に属する範囲となる。

地形的には、北東側が居住域に利用された微高地となり、南西側はＢ区から連続する帯状の低地域に属しているものと想定される。遺構の分布状態は疎であるが、地区の北側で竪穴住居３軒（28～30号住居）、南側で掘立柱建物３棟（８～10号建物）が検出されている。いずれも奈良時代の所産と判断されるが、30号住居に関しては古墳時代後期にさかのぼる可能性がある。

なお、掘立柱建物の西側には、南北方向に走る数条の溝（10・11号溝）が確認できる。奈良時代後半以降に敷設された南北方位の基準線を示すものであり、水田耕作等に関連した遺構と考えられる。

Ｂ区・掘立柱建物柱穴の断割作業



Ｄ区北側・遺構検出状況（南から）

Ｅ区の調査と検出遺構

調査地の北側、都市計画道路栗田安茂里線沿いの範囲がＥ区であり、家屋移転等に合わせて断続的に調査を進めたことから、Ｅ－１からＥ－４までの４地区に分割されている。

Ｅ－１区での遺構分布は疎であり、平安時代竪穴住居１軒（31号住居）と掘立柱建物１棟（７号建物）が検出されている。また、水田畦畔の痕跡を示すと思われる十字形の溝状遺構及び灰色系強粘性の水田土壌の分布が確認されている。

Ｅ－２区においても遺構分布は疎であり、奈良時代に属する竪穴住居２軒（32・33号住居）と柱穴が検出され

Ｄ区南側・遺構検出状況（南から）

るのみである。柱穴には柱痕跡が確認され、掘立柱建物の一角に該当するものと思われる。

Ｅ－４区はＡ－２区の北側に位置し、検出遺構は平安時代竪穴住居２軒（34・35号住居）及び掘立柱建物の一角に該当すると思われる柱穴群が確認される。

Ｅ－３区はＢ区南西側の居住域に連接する位置にあり、竪穴住居９軒（36～44号住居）、掘立柱建物３棟（11～13号住居）などが検出されている。竪穴住居は古墳時代後期に属する１棟（36号住居）を除いて平安時代の所産であり、辺を接して密集する状況や大形竪穴住居（44号住居）の配置など、Ｂ区において見られたある種の計画性が感じられるところとなる。また、奈良時代の所産である可能性が高い掘立柱建物群の一帯には、配列は判然としないものの大形の柱穴が多数分布しており、さらに複数の掘立柱建物が存在している可能性が強く示唆されている。

以上、各地区の調査状況と遺構検出状況を概観してきたが、次に全体的な所見をもって当地点の調査概要におけるまとめとしておきたい。

調査地点は、粘土を主体とする堆積土壌のあり方からもわかるとおり、基本的には扇状地内における微低地に属しているものと判断され、通常の遺跡立地と比較すれば低湿な環境の中に位置することが明らかである。また、８世紀から９世紀までの継続年代から換算すると、40軒を超えて発見された竪穴住居のうちで同時存在した数は10軒を超えることは有り得ず、集落規模としては小規模の部類であることも留意される。

このように居住域としては不向きとも思える条件下において、大形竪穴住居や掘立柱建物群を配した集落遺跡が、小規模ながらも２世紀にわたって継続した事象については、どのように整理できるのだろうか。自然発生的な集落と考えるよりも、水田開発など新たな意図と計画に基づく集落であったと考える方が、理解しやすいのではなかろうか。その意味において、当遺跡の性格は、律令体制下での信濃国水内群芹田郷と絡めて理解するべきであり、背景となっている、水田開発などの社会的動向との連関にも目を向ける必要があろう。

Ｅ－１区・遺構検出状況（南から）

Ｅ－２区・遺構検出状況（東から）

Ｅ－３区・遺構検出作業

Ｅ－３区・遺構検出作業

Ｅ－３区・竪穴住居の検出作業

Ｅ－３区・遺構検出状況（南から）

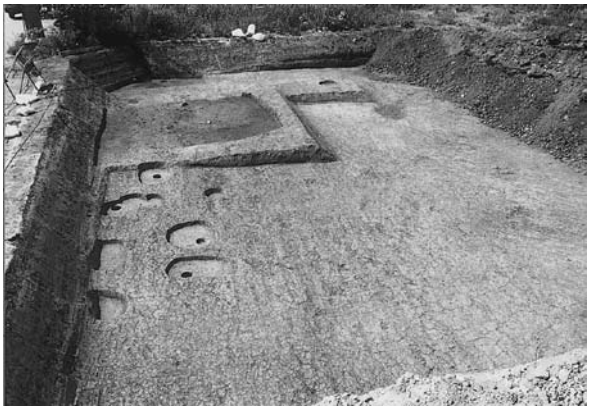
Ｅ－３区・遺構測量作業

Ｅ－３区・遺構検出状況（南東から）

Ｅ－３区・遺構検出状況（北から）

Ｅ－４区・遺構検出状況（西から）

Ｅ－３区・遺構検出状況（南西から）



Ｅ－４区・遺構検出状況（北から）

２　遺構

調査において検出確認した遺構は、遺構種別に一連の番号を付し、各遺構の概要（所属時期、形態・施設・規模等検出状況、出土遺物）を一覧表に集約した（表１）。

遺構測量図に関しては、調査区全体図（１：1000)、遺構全体図（１：250）及び遺構実測図（１：100）を掲載した。また、遺構写真については、種別に集成して図版とした。

なお、図及び写真においては、遺構名を次のとおり記号で表記している。

竪穴住居：ＳＢ　　溝：ＳＤ　　土坑：ＳＫ　　掘立柱建物：ＳＴ　　柱穴：Ｐ

(1) 竪穴住居

検出総数は44軒を数え、時代別内訳では、古墳時代後期が３軒（６・30・36号住居)、奈良時代が９軒（３・４・10・20・25・28・29・32・33号住居)、平安時代が32軒（１・２・５・７～９・11～19・21～24・26・27・31・34・35号住居）となる。奈良時代及び平安時代所属のものは、さらに時期を細分することが可能であり、平安時代に関してはⅠ～Ⅲ期として区分している。

分布の中心となるＢ区及びＥ－３区では、竪穴住居が重複しながら密集する状況が観察されるが、７世紀末から９世紀末までの200年間、10世代の中で連続的に構築された住居群と考えれば、１世代あたり同時存在した住居は５軒程度と換算されることとなり、その分布状態は小規模かつ疎であったとみるべきか。また、先述したとおり、時間的な異動はあるにせよ主軸方位やカマド配置には規格性が強く表れており、ある種の意図と計画に基づきながら継続的に構築された住居群である可能性も示唆される。

【古墳時代】

古墳時代に属する竪穴住居のうち、唯一全形が知られる36号住居は、一辺4.7mの方形で北壁中央部にカマドを設置する。主柱穴４本を有するものと判断され、その内の２本には径15㎝程度の柱痕跡が認められる。

【奈良時代】

奈良時代に属する竪穴住居には、大形と小形の二者が存在する。大形住居は、床面積として50～60㎡の広さを有し、小形住居と比較すれば３～４倍の規模となる。また、10・20号住居においては、検出面から測る床面まで深さが70㎝となり、小形住居に比較して掘り込みが深い構造にあることも注意される。

10号住居は一辺6.9mで、床面は凹凸が著しいものの堅く緻密であり、４本の主柱穴（Ｐ１～Ｐ４）を配置する。主柱穴の掘方は径１ｍを前後する大規模なもので、二重に掘り込まれたかのような不整形を呈し、各々には径20～30㎝の柱痕跡が認められる。Ｐ２・Ｐ４にあっては柱痕跡が２本認められ、柱根劣化に伴っての建替え（補修）が行われた可能性が示される。北壁に設置されたカマドは、3.2mにも及ぶ長大な煙道を住居外に延ばし、燃焼部には石製支脚が据付けられている。燃焼部の奥壁に開口する煙道入口部分は方柱状石材で三面補強されており、きわめて堅牢な構造といえる。また、袖には石材の抜き取り痕が観察される。

20号住居は一辺7.7mで、10号住居よりさらに一回り大きく、床面は比較的平坦であるもののやや軟弱となる。住居廃絶時点での主柱穴は４本（Ｐ１～Ｐ４）と判断されるが、貼床の下からも旧の柱穴（Ｐ５～Ｐ８、Ｐ９は住居埋没後に掘り込まれた別遺構）を確認しており、建替え（拡張・補修）が複数回行われている可能性が示される。当初は主柱穴がＰ３とＰ５～Ｐ７によって構成され、柱間3.3mの規模から考えると一辺6.5m程度の一回り小さい住居構造であったろうと推定できる。その後、Ｐ１～Ｐ４による主柱穴への変更にあわせて住居の床

面積が拡張され、柱間4.5mの大規模住居に改修されたものであろうと想定される。また、Ｐ１～Ｐ４は二重三重に掘り込まれたかのような不整形を呈し、複数の柱痕跡も確認できることから、柱根劣化による補修も行われていることが確実と思われる。カマドは、北壁に設置された２箇所（カマド１・２）が確認されるとともに、同壁から1.5m内側に寄った位置に燃焼部の痕跡が焼土の窪みとして残されている（カマド３）。住居廃絶直前まで機能していたものは、北壁左側に位置するカマド１であると判断され、燃焼部には土製支脚、袖には石材の抜き取り痕が観察される。右側に位置するカマド２は、袖と燃焼部が完全に除去削平された状態にあり、燃焼部の痕跡を示す焼土と煙道のみが遺存し、カマド１に先立って使用されていた旧カマドと判断される。煙道は長さ２ｍを測り、内部は焼土と煤が充満した状態にある。おそらく、長期にわたる使用に伴って煙道が詰まったことにより、新たにカマドを付け替える必要が生じたものであろう。床面に僅かな焼土窪みとして残されるカマド３は、カマド２を遡る初代のものと考えられ、住居拡張にともなって除去された状況を示している。この主柱穴及びカマドの異動から、当該住居が執拗に建替え（拡張・補修）を重ねている状況と、その維持・使用の期間がかなりの長期に及んでいる状況が導かれるが、大形住居の機能と用途を考える上では見逃せない所見といえる。

25号住居は一辺７ｍ内外の方形で、堅く緻密な床面を有す。主柱穴は４本を配し、内２本には径15～20㎝の柱痕跡が認められる。北壁中央部に設置されたカマドの燃焼部には焼土塊が形成され、袖には石材の抜き取り痕が観察される。

一方、奈良時代の小形住居（３・４・28・29・32・33号住居）は、一辺４ｍ内外の規模で、主柱穴が確認できないことから、主柱穴４本を有する大形住居とは小屋組みの構造を異にしていると理解される。また、カマドの構造においても、石材抜き取り痕の存在から大形住居が堅牢な石芯構造を採ると考えられるのに対して、小形住居では石芯の痕跡が認められず、比較的簡略な構造を採っていると理解することができる。

28号住居では、壁上端の崩落傾斜によって見かけ上一辺4.0mを測るが、本来は一辺3.6mの規模により、床面は凹凸を有してやや軟弱である。カマドは北壁中央部に半ば切り込まれるように設置され、袖は除去されていて遺存しないが、当地におけるカマド構造の特色がよく示されている。煙道は遺存状態が良好であり、穴の断面は15㎝角の四角形を呈し、カマド燃焼部奥壁から住居外側へ70㎝延びて径50㎝の小穴へと接続する。この小穴は煙道から５㎝程度掘り窪められて低くなり、煤や焼土塊が厚く堆積している。上部構造は不明であるが煙突穴の底部に相当する施設であり、落下してくる煤を溜め込む構造をとっていると考えられる。

29号住居は、一辺4.4～4.1mを測り、床面は平坦で壁際を除いて堅く緻密である。北壁に設置されたカマドは崩壊して高まりとして遺存し、砂を多く混合した粘土によって袖が構築されている様子が観察できる。煙道は住居外側に1.2m延ばされている。

なお、小形住居は大形住居及び掘立柱建物が分布するＢ区では確認されず、Ａ－２区、Ｄ区及びＥ－２区においてのみ検出されている。距離にして50mほどの隔たりではあるが、意識的に分布域を別にしている可能性が指摘できる。構造上の差異や使用期間なども絡めれば、機能と用途の面においても、両者が隔たりを有していた可能性が示唆され、住居の大小が単なる床面積だけの問題に留まらないことを再認識させてくれる。

【平安時代】

平安時代に属する竪穴住居は、Ｂ区からＥ－３区にかけて集中的に分布している。その多くが一辺４ｍ以内の小形住居であり、奈良時代よりさらに小型化する傾向が認められる。東壁にカマドを設置する16号住居を除き、北壁にカマドを設置することが通有であり、袖に石芯を用いているカマドの例（９・14号住居）も存在する。Ｂ区における分布状態をみると、13・17～19号住居のように完全に重なり合う例もあるが、部分的に辺を接する程度の重複例が多く、それぞれの位置を意識し合いながら連続的に構築された結果を示すものと理解される。

Ｅ－３区に位置する44号住居は、一辺8.5～9.0ｍと群を抜いて大規模な竪穴住居となっている。床面はやや軟弱であるが平坦面が形成され、柱間3.4ｍの主柱穴４本が確認される。検出面から測る床面までの掘り込みの深さは、20㎝以内であり、隣接する小形住居と比較して浅い傾向を見せている。特異な構造としては、壁際に石列が配される点があげられる。５～30㎝の礫（河原石）を用い、壁に沿って一直線に据え置き、一部欠落はあるがほぼ全周しているように観察できる。礫の配列の間隔はまちまちであるが、東壁際においては1.5ｍ間隔に配置される傾向が認められる。類例としては塩崎遺跡群塩崎小学校地点22号住居（長野市教委1978）があり、平安時代初期に属す一辺６ｍの同住居において、壁際に礫を隙間なく一列に並べている状況が確認されている。その位置からみて、壁に関係した構造物の礎石または重石的な役割が想起されるものであるが、現時点ではその機能・用途は不明といわざるを得ない。なお、44号住居においてはカマド形態にも特異な様相が観察されている。北壁に位置するカマドは、幅2.5ｍ、奥行き１ｍの区画をもって燃焼部が外側に張り出している。小形住居においても９号あるいは19号住居のように燃焼部が外側に張り出す例はあるが、その幅は70㎝程度の規模で比較にはならない。袖や煙道などが確認されていないため、カマド全体の構造は不明確といわざるを得ないが、特殊な構造をもつカマドである可能性は認められよう。また、南壁にはこの張り出したカマドに対応するかのように、幅２ｍ、奥行き１ｍの方形の張り出し区画が存在する。検出時点では別遺構と判断して25号土坑と命名したものであるが、壁際の石列と類似した礫の配置が確認される点から、出入口的な施設として44号住居に付随する張り出しと理解した方が正解であろう。

(2) 掘立柱建物

検出総数は14棟を数えるが、Ｂ区及びＥ－３区には配列が判然としないものの柱穴が集中分布していることから、未確認の建物が多数存在していることが明らかであり、実体はそれを大きく上回ると思われる。柱間による内訳では、１×１間が１棟（12号建物）、１×２間が２棟（２・７号建物）、２×２間が２棟（０・８号建物）、２×３間が６棟（１・３・４・10・11・13号建物）、２×４間が１棟（５号建物）となる。また、Ｅ－３区41号住居に重複して確認されている１×１間の建物（番号なし）は、柱穴内に礎石を置く例となる。所属年代については、出土遺物が乏しいため確定することは危険であるが、主軸方位や竪穴住居との位置関係の状況から、奈良時代に構築されたものが主体となると推定される。ただし、主軸方位をほぼ南北方向に置いた２×２間の建物は平安時代の所産となる可能性が高い。

ここで、検出数の多い２×３間の建物について詳述する。その分布状態は、Ｂ区に３棟、Ｄ区に１棟、Ｅ－３区に２棟と分かれており、距離にして50ｍ以上離れるが、主軸方位及び規模においてはそれぞれに共通性を観察することができる。６棟の規模を具体的な数値で示せば、短辺（２間）は4.4～4.9ｍ、長辺（３間）は6.2～6.5ｍの中に納まり、１間あたりに割り返すと25～10㎝の偏差となる。面積で示せば、27～31㎡の中に納まり、４㎡程度の偏差となる。この偏差を僅かなものとして捉えるなら、これら６棟の設計が同一規格に基づいている可能性が考えられよう。各建物の構築と使用期間には時間的な前後関係が含まれるものであることから、全てが同時存在していたとは認めがたいが、使途を同じくする一連の施設として相互に関連を有しながら機能していた状況を想定することができる。竪穴住居との位置関係や重複のあり方などについても注意を払う必要があろうが、掘立柱建物の使途を倉庫として仮定するなら、奈良時代という時代背景を考え合わせて、租稲を収納管理するための施設と位置づけることもできよう。

なお、当調査では柱痕跡を確認できた例が比較的多い。これは、掘立柱建物の存在を意識してその検出確認に

努めたことも影響してくるが、遺跡内の土壌が柱痕跡を残しやすい条件にあったことが大きな要因となっている。当遺跡においては遺物包含層が水田土壌に近い灰褐色粘土で構成されることから、柱穴掘り方内の埋土もこの粘土が主体となり、基盤の褐色～黄褐色シルト質粘土が混合した斑状を呈する。その中で柱痕跡は均質な灰色粘土として認識される場合が多い。柱痕跡は径20㎝前後のものが一般的で、細いもので径15㎝、太いものでも径25㎝に留まるようである。

(3) 土坑・溝

住居・建物以外の遺構としては、土坑26基、溝16本が検出されている。出土遺物から所属年代を推定できる範囲においては、奈良時代に属するものが多いように思われる。

それらの中で、Ｂ区掘立柱建物群に接して位置する５・６号土坑と３・４号溝について詳述しておく。同遺構群の検出に関しては、表土除去段階において土器破片が集中散布する範囲として認識され、同範囲を一段掘り下げた結果として土坑及び溝の平面形を確認するに至った経過がある。また同時に、１号建物の柱穴２本（Ｐ１・９）が確認されており、それ以降の掘立柱建物群検出確認の契機ともなったものである。これらの土坑と溝については、１号建物も含めて、奈良時代に属する一群の遺構である可能性が高いと判断されるが、その年代を特定することとなった出土遺物として、「市寸」と記した墨書土器（須恵器杯）の存在をあげることができる。５号及び６号土坑から１点ずつ出土し、６号土坑出土のものは残念ながら発掘現場で盗難に会い、本書には５号土坑出土品のみを掲載することとなったが、遺構群の性格を考える上でも重要な遺物と位置づけられる。墨書土器を出土した土坑の規模は、確認面において径0.6～1.2m、深さ10～20㎝を測り、小規模の部類に属す。また、上部での遺物散布状態から、各々個別に掘り込まれたものではなく、一連の遺構として掘り込まれている状況も想定することができる。

土坑の東側に接して位置する３・４号溝は、幅員50㎝前後、深さ10㎝内外で、位置と規模からみて土坑と連動しながら掘り込まれている可能性が認められる。前節においても言及している点であるが、３・４号溝から２・９号溝に連なる形で、北西～南東方向に延びる長さ70ｍの直線区画が形成されている。これは、居住域となる微高地と低地域とを区分するための区画と目されるものであり、さらに長さ８ｍを測る柱穴列が、溝と重複又は連続する位置において、２箇所確認することができる。径20～30㎝の小形柱穴６～７本が一直線に配列されるものであり、その間隔は不規則であるが、径10㎝未満の柱痕跡も検出されている。柱痕跡の太さからすれば、柱穴列というよりも、杭列と表現した方が実態に近いのだろうと思われる。なお、これらの溝及び杭列は、複合して水路的な施設として機能していたと考えることができるが、その位置関係をみると、並行しながらも微妙に位置をずらしている状況が観察される。つまり、厳密には直線上に連続して並んでいるわけではなく、断続的に個別に存在していた可能性も考慮されるところである。果たして、上部にはどのような施設が存在していたものか、現時点では不明といわざるを得ない。

同様に、区画を示す溝との例として、Ｄ区の11・12号溝とＥ－３区の13・14号溝をあげることができる。いずれも幅の狭い小溝が２～３条並行しながら、南北方向に近い方位で敷設されたものである。条里区画との関連が注意され、奈良時代後半から平安時代に所属する可能性が指摘されよう。

遺構写真①

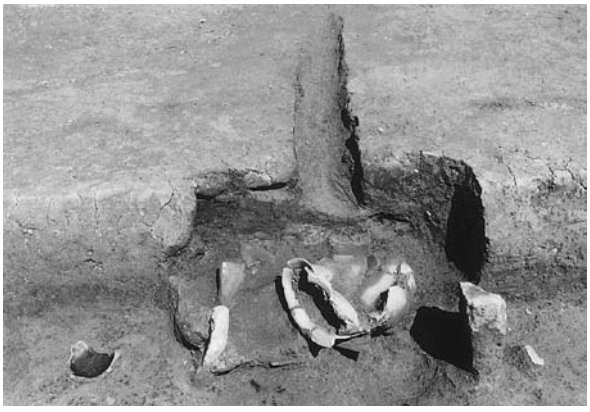
Ａ－２区　ＳＢ－２（南から）

ＳＢ－２　カマド（南から）

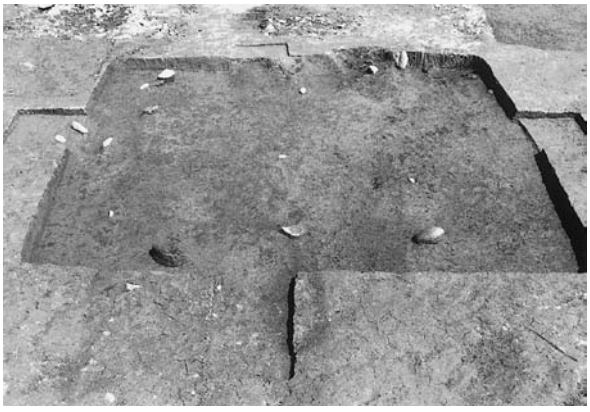
ＳＢ－３（南から）

ＳＢ－５（南から）

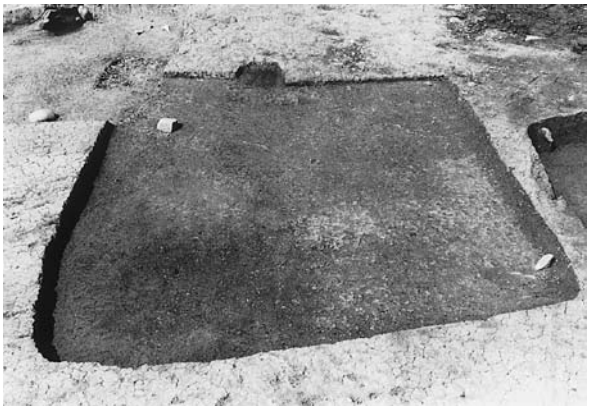
Ｂ区　ＳＢ－９（南から）



ＳＢ－９　カマド（南から）

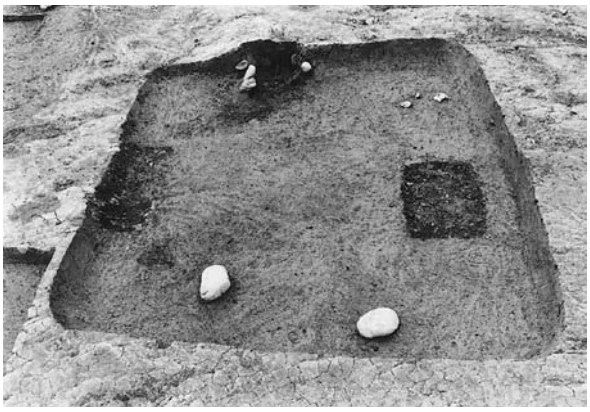


ＳＢ－11（南から）



ＳＢ－15（南から）

遺構写真②



B区　ＳＢ－14（南から）

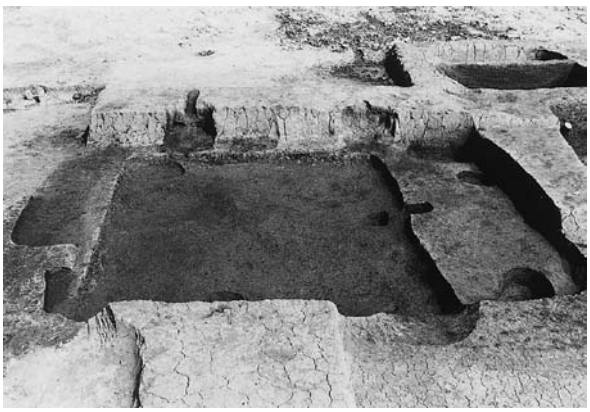
ＳＢ－14　カマド（南から）

ＳＢ－13・18（南から）

ＳＢ－18　カマド（南から）

ＳＢ－９～19（南から）

ＳＢ－13～24（南から）



ＳＢ－13・17・19（南から）

ＳＢ－16（西から）

遺構写真③

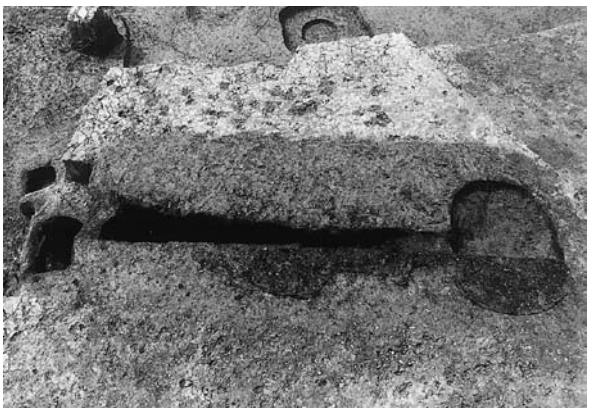
B区　ＳＢ－21・22（南から）

ＳＢ－25（南から）

ＳＢ－10・20（南東から）

ＳＢ－10（南から）

ＳＢ－20（南から）



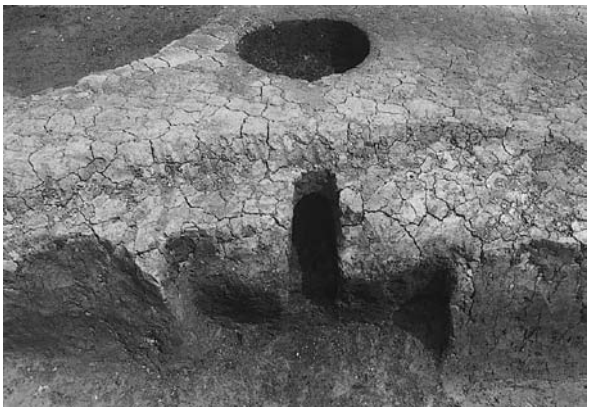
ＳＢ－10　カマド煙道（東から）

ＳＢ－20　カマド（南から）

ＳＢ－10　カマド（南から）

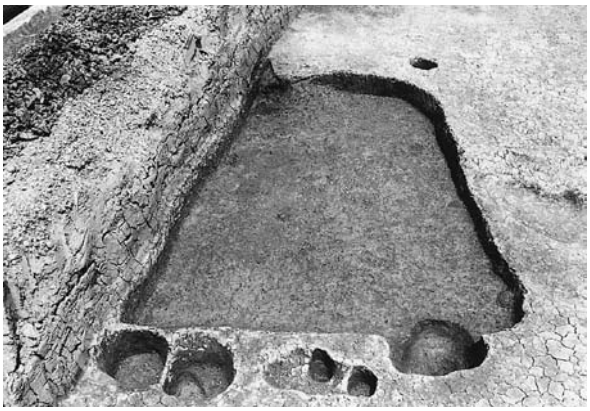
遺構写真④

D区　ＳＢ－28（南から）



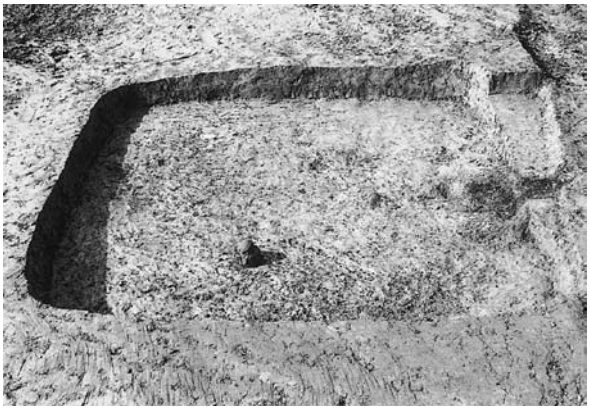
ＳＢ－28　カマド（南から）

ＳＢ－29（南から）



ＳＢ－30（南から）

Ｅ－１区　ＳＢ－29（東から）



Ｅ－２区　ＳＢ－32（東から）

Ｅ－３区　ＳＢ－36（南から）

ＳＢ－37・38（南から）

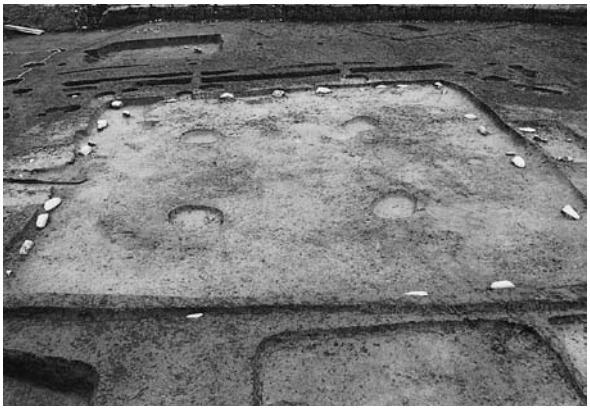
遺構写真⑤

Ｅ－３区　ＳＢ－39・40（南から）

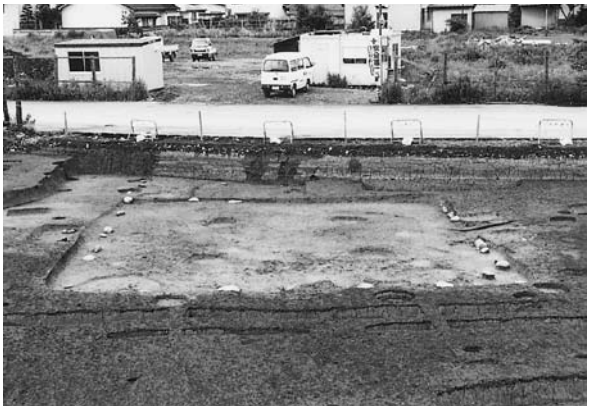
Ｂ区　ＳＢ－41・ＳＴ礎石（東から）

ＳＢ－42・43（南から）

ＳＢ－44（南から）



ＳＢ－44（西から）

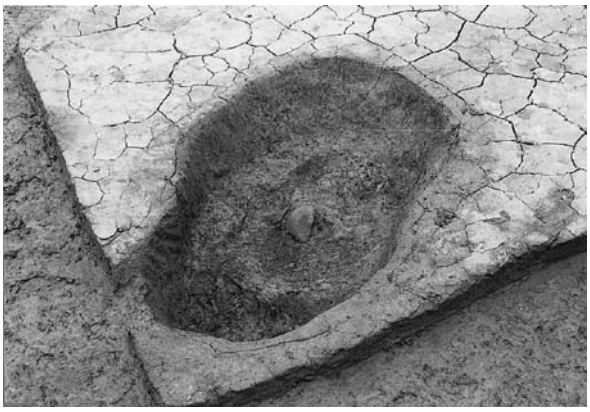


ＳＢ－44（東から）

ＳＢ－44　カマド（南から）

ＳＢ－44東壁際　礎石？（北から）

遺構写真⑥



B区　SK－5「市寸」墨書土器出土状態

A－2区　ST－0（南から）

B区　南西小穴群（東から）

B区　ST群（北から）

B区　ST群（南西から）

ST－1・5（南東から）

ST－1（北から）

ST－3（東から）

遺構写真⑦

B区　ＳＴ－４（東から）

B区　ＳＴ－５（北西から）

ＳＴ－５　柱穴位置に整列（北東から）

ＳＴ－５（南東から）

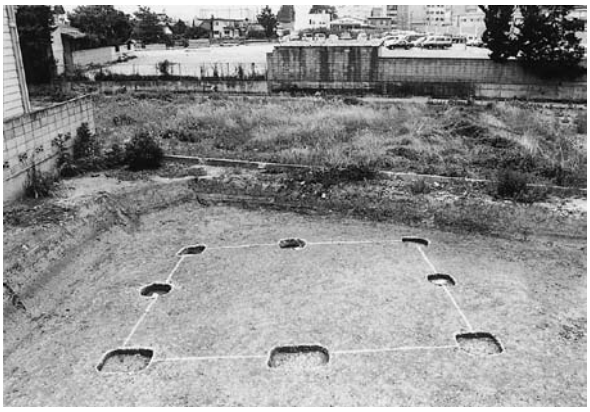
ＳＴ－６（北から）

ＳＴ－４　柱穴断面調査状態

ＳＴ－４　Ｐ８断面

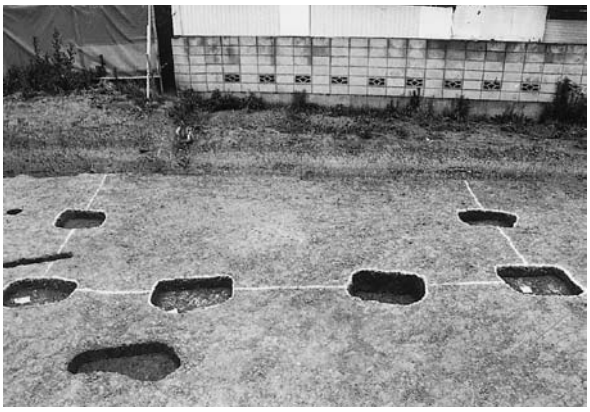
ＳＴ－５　Ｐ４断面

遺構写真⑧

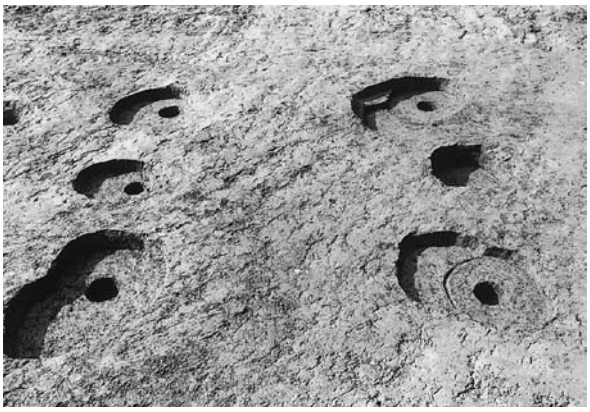


D区　ＳＴ－８（北から）

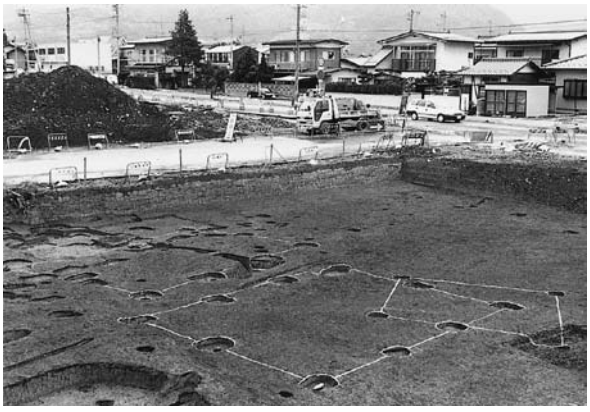
ＳＴ－９・10（北から）



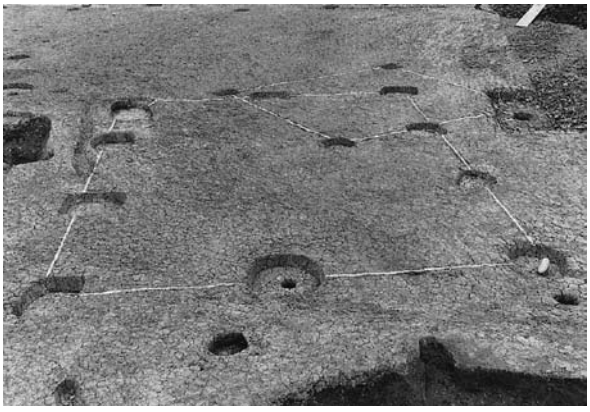
ＳＴ－10（西から）



Ｅ－１区　ＳＴ－７（東から）



Ｅ－３区　ＳＴ群（南東から）



ＳＴ－11・12（南から）

ＳＢ－11～13（西から）

ＳＢ－13（南から）

表１　若里市民文化ホール地点（SRTH）遺構一覧表

遺構名	記号	地区	時代（期）	遺構		出土土器			その他出土遺物	遺物注記（整理№）
				形態・施設・規模	備考	重量（g）	実測	特記	土・石・金属製品他	
1号住居	SB-1	A-1	平安（Ⅱ）	不明	調査区北壁断面において確認	660	2			SB1-1・2
2号住居	SB-2	A-2	平安（Ⅱ）	方形（4.0×4.4m）北壁カマド	SB-3に重複	11,170	7	篦書	鉄片・土玉	SB2-1～7
3号住居	SB-3	A-2	奈良	方形（4.5×5.2m）北壁カマド	SB-2が重複	11,990	11	篦書	土製品・支脚	SB3-1～7
4号住居	SB-4	A-2	奈良	方形（4.1×3.9m）		170	0			SB4
5号住居	SB-5	A-2	平安（Ⅰ）	方形（4.0×4.0m）北壁カマド	SB-6に重複	13,940	8	灯明？	土玉	SB5-1～6
6号住居	SB-6	A-2	古墳（後）	方形（？×5.4m）北壁カマド	SB-5が重複	6,820	6		土製支脚・ミガキ石	SB6
7号住居	SB-7	B	平安（Ⅱ）	方形（2.6×2.9m）北・西壁カマド		1,900	4	灯明皿		SB7-1～3
8号住居	SB-8	B	平安（Ⅰ）	不明	カマド部分のみ検出	1,370	2			SB8-1・2
9号住居	SB-9	B	平安（Ⅰ）	方形（3.4×3.6m）北壁カマド	SB-19と重複	7,150	5			SB9-1・№1～4
10号住居	SB-10	B	奈良	方形（6.9×6.8m）北壁カマド　柱穴	SB-20に重複	32,633	39	墨書・篦書	漆？・土製品・軽石・鉄片	SB10-1～10・P1～4
11号住居	SB-11	B	平安（Ⅰ）	方形（4.3×3.6m）北壁カマド		4,350	3		砥石	SB11-1～3・№1～4
12号住居	SB-12	B	平安（Ⅰ）	方形（3.8×4.1m）北壁カマド		6,850	10	篦書	鉄滓	SB12-1～4
13号住居	SB-13	B	平安（Ⅲ）	方形（3.4×3.9m）北壁カマド	SB-17～19に重複	15,510	15		鉄片・骨片・炭化物	SB13-1～4
14号住居	SB-14	B	平安（Ⅲ）	方形（3.3×4.0m）北壁カマド	SB-15に重複	7,840	14	転用硯	鉄片・ミニチュア	SB14-1～4・№1～3
15号住居	SB-15	B	平安？	方形（4.0×4.2m）北壁カマド	SB-14が重複	4,370	5	篦書		SB15-1・№1
16号住居	SB-16	B	平安（Ⅲ）	方形（3.3×3.1m）東壁カマド	SB-24に重複	3,400	5	転用硯・灯明皿		SB16-1・№1～3
17号住居	SB-17	B	平安（Ⅲ）	方形（？×3.8m）北壁カマド	SB-13・18・19と重複	2,610	3		鉄滓・骨片	SB17-1～3・P1～3
18号住居	SB-18	B	平安（Ⅲ）	方形（4.0×4.0m）北壁カマド	SB-13・17・24と重複	10,230	7		黒曜石砕片	SB18-1～3・№1～3
19号住居	SB-19	B	平安（Ⅲ）	方形（？×2.9m）北壁カマド	SB-9・13・17と重複	420	1			SB19-1・2
20号住居	SB-20	B	奈良	方形（7.7×7.7m）北壁カマド3　柱穴	SB-10が重複 建替・拡張	38,363	25	篦書	土製支脚・粘土塊	SB20-1～15・P1～9
21号住居	SB-21	B	平安（Ⅱ）	方形（4.0×3.1m）北壁カマド	SB-22に重複	6,920	5	灯明皿	鉄片・鉄滓	SB21-1～5
22号住居	SB-22	B	平安（Ⅱ）	方形（3.2×？m）北壁カマド	SB-21・SK-11が重複	120	1			SB22-№1
23号住居	SB-23	B	平安（Ⅱ）	方形（3.4×3.3m）北壁カマド	SB-24と重複	6,055	10	墨書・刻書		SB23-1～5・P1・2
24号住居	SB-24	B	平安（Ⅲ）	方形（3.0×3.5m）北壁カマド	SB-16・23と重複	2,010	2			SB24-1～3
25号住居	SB-25	B	奈良	方形（7.0×6.4m）北壁カマド		16,560	14		砥石・ミニチュア・骨片	SB25-1～6・№1・2
26号住居	SB-26	B	平安（Ⅱ）	不明	カマド部分のみ検出	2,210	7	灯明皿		SB26
27号住居	SB-27	B	平安（Ⅰ）	方形（2.9×？m）	北辺地区外　SK-15Aに重複	1,480	1	篦書		SB27
28号住居	SB-28	D	奈良	方形（4.0×4.0m）北壁カマド		2,610	2			SB28-1～5
29号住居	SB-29	D	奈良	方形（4.4×4.1m）北壁カマド		945	2		骨片	SB29-1～5
30号住居	SB-30	D	古墳（後）	方形（？×3.5m）北壁カマド	西辺地区外	6,904	0			SB30-1～5
31号住居	SB-31	E-1	平安（Ⅰ）	方形（2.9×3.0m）北壁カマド		1,830	3			SB31-1～3
32号住居	SB-32	E-2	奈良	方形（3.8×3.7m）北壁カマド		3,740	3		馬歯	SB32-1・2
33号住居	SB-33	E-2	奈良	方形（3.7×？m）北壁カマド	南辺地区外	2,190	2			SB33-1・2
34号住居	SB-34	E-4	平安（Ⅲ）	方形？（3.2m超）北壁カマド	南・東辺地区外	1,880	2	篦書	鉄片	SB34
35号住居	SB-35	E-4	平安（Ⅱ）	方形？（3.5m超）		2,520	4	墨書・灯明皿	砥石	SB35-1・2
36号住居	SB-36	E-3	古墳（後）	方形（4.7×4.7m）北壁カマド　柱穴		10,530	9		敲石	SB36-1～5・№1・2

遺構名	記号	地区	時代（期）	遺構		出土土器			その他出土遺物	遺物注記（整理No.）
				形態・施設・規模	備考	重量(g)	実測	特記	土・石・金属製品他	
37号住居	SB-37	E-3	平安（Ⅱ）	方形（3.2×？m）北壁カマド	SB-38・ST-13と重複	300	0			SB37
38号住居	SB-38	E-3	平安（Ⅰ）	方形（4.1×3.3m）北壁カマド	SB-37・SD-16・ST-13と重複	1,360	0		鉄片	SB38-1～3
39号住居	SB-39	E-3	平安（Ⅲ）	方形（2.2×？m）北壁カマド	SB-40に重複	3,340	5			SB39-1・2・No1・2
40号住居	SB-40	E-3	平安（Ⅱ）	方形？北壁カマド	SB-39が重複	2,970	4		土製支脚	SB40-1・2・No1・2
41号住居	SB-41	E-3	平安（Ⅱ）	方形（？×4.1m）	SB-42・ST と重複	3,960	7		砥石	SB41-1～4・No1
42号住居	SB-42	E-3	平安（Ⅱ）	方形（？×3.3m）	SB-41と重複	3,060	2	転用硯	土製品・羽口	SB42-1～3・No1
43号住居	SB-43	E-3	平安（Ⅱ）	方形（？×4.4m）	東辺を除き地区外	2,520	1		鉄片	SB43-1・2
44号住居	SB-44	E-3	平安（Ⅰ）	方形（8.5×9.0m）北壁カマド　柱穴	壁際に列石SD-13・14と並列	9,070	11	墨書	鉄片・砥石・敲石	SB44-1～4
1号溝	SD-1	A-2		幅0.3～0.4、長20m		20	0			SD1
2号溝	SD-2	B		幅0.3～0.6、長19m		3	0			SD2
3号溝	SD-3	B		幅0.4～0.6、長6m	SD-4と並列柱（杭）列が付属	70	0			SD3
4号溝	SD-4	B	奈良	幅0.4～0.6、長2.5m	SD-3と並列柱（杭）列が付属	85	1			SD4
5号溝	SD-5	B	奈良	幅0.3～0.5、 長12mL字形	SD-6と接続	80	1	墨書		SD5
6号溝	SD-6	B		幅0.3～0.4、長7m	SD-5と接続	360	0			SD6
7号溝	SD-7	B		幅0.2、長2.5m	SD-8・9と並列	30	0			SD7
8号溝	SD-8	B		幅0.4～0.6、長9m	SD-7・9と並列	20	0			SD8
9号溝	SD-9	B	奈良	幅0.2、長4m	SD-7・8と並列	80	0			SD9
10号溝	SD-10	D		幅0.6～0.9、長20m	SD-11と並列	420	0			SD10
11号溝	SD-11	D		幅0.6～1.3、長15m	SD-10と並列	25	0			SD11
12号溝	SD-12	E-3		幅0.3、長10mL字形		90	0			SD12
13号溝	SD-13	E-3	奈良	幅0.5～0.6、長20m	SD-14と並列	980	0		骨片	SD13
14号溝	SD-14	E-3		幅0.4、長9m	SD-13と並列	140	0			SD14
15号溝	SD-15	E-3	奈良	幅0.3、長3m		420	0			SD15
16号溝	SD-16	E-3	奈良	幅0.3～0.5m、長5m	SB-38・SK-24・ST-13と重複	300	0			SD16
1号土坑	SK-1	A-1		楕円形（長径2.5m）自然？	下層検出	840	0		石製品（混入？）	SK1
2･3号土坑	SK-2・3	A-2		連接した円形の窪み（径1.8・2.1m）		190	1		炭化物	SK2
4号土坑	SK-4	B		楕円形（長径1.5m）		120	0			SK4
5号土坑	SK-5	B	奈良	楕円形（長径1.2m）		233	1	墨書		SK5
6号土坑	SK-6	B	奈良	円形（径0・6m）		160	0	墨書（盗難）		SK6
7号土坑	SK-7	B	奈良	円形（径1.4m）	北側地区外	830	0		骨片	SK7
8号土坑	SK-8	B	奈良	楕円形（長径2.6m）	ST-3と重複	300	0			SK8
9号土坑	SK-9	B		不正形（長辺0.7m）	柱穴？	10	0			SK9
10号土坑	SK-10	B		楕円形（長径1.6m）		3	0			SK10
11号土坑	SK-11	B	平安	円形（径2.6m）	SB-22に重複	1,417	1			SK11
12号土坑	SK-12	B	奈良	不正形（長辺2.6m）		640	0			SK12
13号土坑	SK-13	B	奈良	円形（径1.3m）		80	0			SK13
14号土坑	SK-14	B	奈良	不正形（長辺1.5m）		580	1			SK14

遺構名	記号	地区	時代（期）	遺構		出土土器			その他出土遺物	遺物注記（整理No.）
				形態・施設・規模	備考	重量（g）	実測	特記	土・石・金属製品他	
15A号土坑	SK-15A	B	奈良	方形（辺1.4m）	SB-27が重複	630	2		骨片	SK15A
15B号土坑	SK-15B	D	奈良	方形（辺2.8m）	西辺地区外 竪穴住居？	230	1			SK15B
16号土坑	SK-16	D		円形？（径1.5m）	東半地区外	60	0			SK16
17号土坑	SK-17	D	奈良	不正形（長辺2.1m）		670	0			SK17
18号土坑	SK-18	D		幅0.6～07、長1.0m	SB-29に重複した東西方向の溝	10	0			SK18
19号土坑	SK-19	D		不正形（長辺0.8m）		20	0			SK19
20号土坑	SK-20	D		不正形（長辺0.9m）		50	0			SK20
21号土坑	SK-21	D	奈良	楕円形（長径1.3m）		1,310	0			SK21
22号土坑	SK-22	D	平安	楕円形（長径2.5m）		955	0			SK22
23号土坑	SK-23	E-4	奈良	円形（径0・6m）		260	0			SK23
24号土坑	SK-24	E-3	奈良	長方形（1.0×2.2m）		540	0			SK24
25号土坑	SK-25	E-3	奈良	方形？（辺2.0m）	SB-44と重複（SB-44付属施設？）	160	0			SK25
26号土坑	SK-26	E-3	平安	長方形（0.8×1.1m）		100	0			SK26
0号建物	ST-0	A-2	平安？	2×2間 （3.8×4.5m）	柱痕跡5	0	0			
1号建物	ST-1	B	奈良	2×3間 （4.9×6.4m）	柱痕跡4	313	0			ST1- 1・P1～9
2号建物	ST-2	B		2×1間 （3.1×2.6m）	柱痕跡6	80	0			ST2- P1
3号建物	ST-3	B		3×2間 （6.2×4.4m）	柱痕跡7 2棟重複？	145	0			ST3- P2～10
4号建物	ST-4	B		3×2間 （6.5×4.5m）	柱痕跡7	43	0			ST4- P1～8
5号建物	ST-5	B	奈良	2×4間 （4.4×7.8m）	柱痕跡11	131	2			ST5- P2～12
6号建物	ST-6	B		3×？間 （5.4×？m）	柱痕跡未確認 柱列？	20	0			ST6- P3
7号建物	ST-7	E-1		2×1間 （2.3×2.3m）	柱痕跡5	0	0			
8号建物	ST-8	D		2×2間 （5.0×4.0m）	柱痕跡未確認	12	0			ST8- P1～6
9号建物	ST-9	D		2×2間？ （？×2.9m）	柱痕跡2	10	0			ST9- P2・3
10号建物	ST-10	D		2×3間 （4.5×6.5m）	柱痕跡未確認	1,362	0		骨片	ST10- P1～5
11号建物	ST-11	E-3	奈良	2×3間 （4.9×6.4m）	柱痕跡6	700	1			ST11
12号建物	ST-12	E-3		1×1間 （3.5×3.5m）	柱痕跡未確認	20	0			ST12
13号建物	ST-13	E-3	奈良	2×3間 （4.8×6.4m）	柱痕跡6	240	0			ST13
試掘坑A区下層	T	A-1・2	縄文～弥生？	自然？	下層検出	70	0		石器・剥片・砥石（混入？）	T- A1下・A2下
試掘坑A区上層	T	A-1・2	弥生～平安			940	0			T- A1・2
試掘坑B区	T	B	弥生～平安			990	2			T- B1
小穴A区	Pi	A-1・2 C	縄文～弥生？	自然？	下層検出	381	1		石器・剥片・種子・堅果・炭化物（混入？）	Pi- A1・A2・C
小穴B・E-3区	Pi	B E-3	弥生～平安			6,135	4			Pi- 1～46・E3
検出面A・C区下層	検	A-1・2 C	縄文～弥生？	自然？	下層検出	338	0		石器・砥石（混入？）	検A1・A1下 検A2-3・検C
検出面A-2区	検	A-2	弥生～平安			5,940	2		土製支脚・骨片	検A2- 1・2・4
検出面B・D・E区	検	B・D E-1～3	弥生～平安			99,691	105	箆書・灯明？	石製品・砥石・鉄滓・羽口・骨片・剥片	検B1・2 検E・E2・E3
合計						407,912	395			

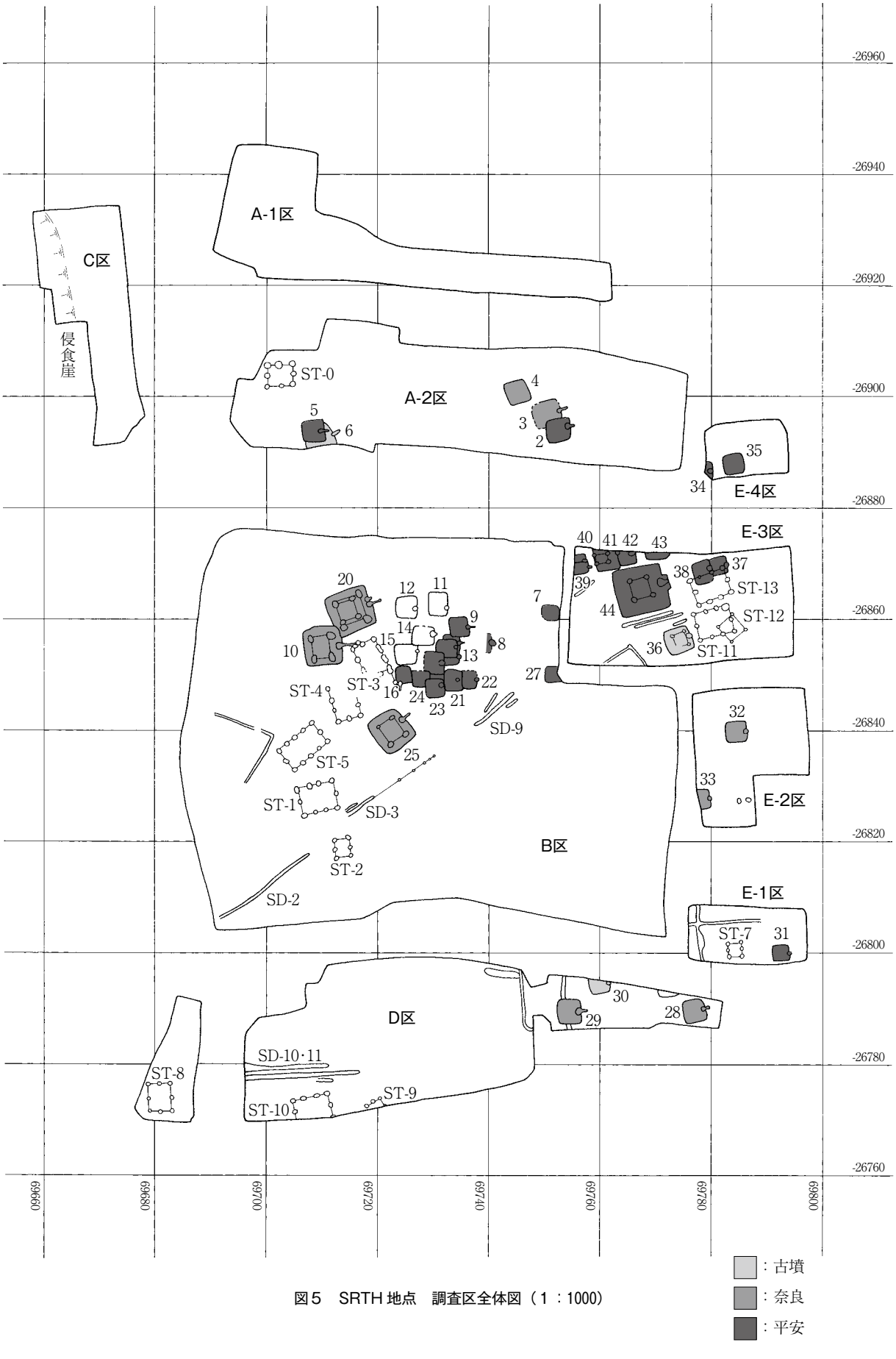


図５　SRTH 地点　調査区全体図（１：1000）

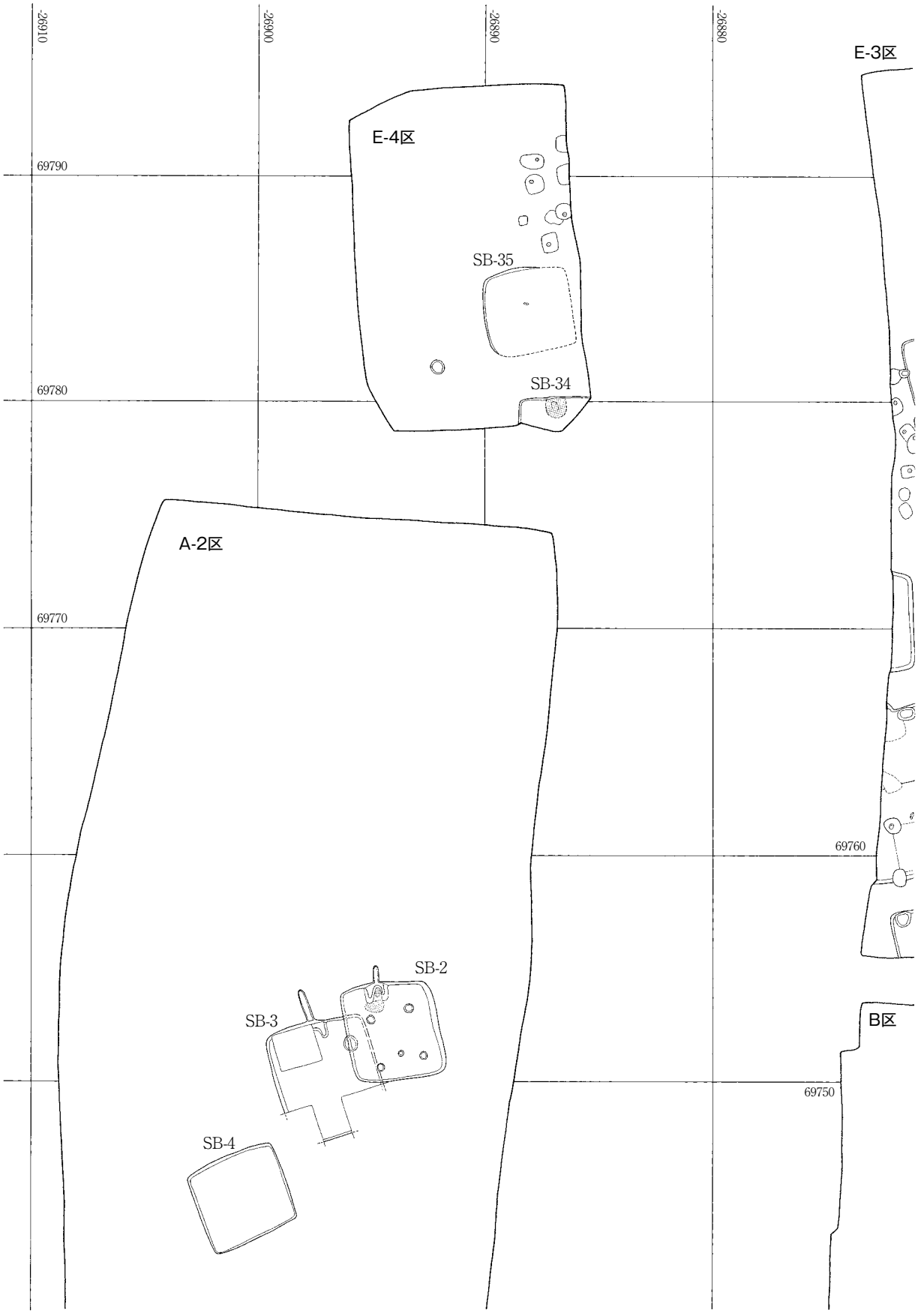


図６　SRTH 地点　遺構全体図①（１：250）

図７　SRTH 地点　遺構全体図②（１：250）

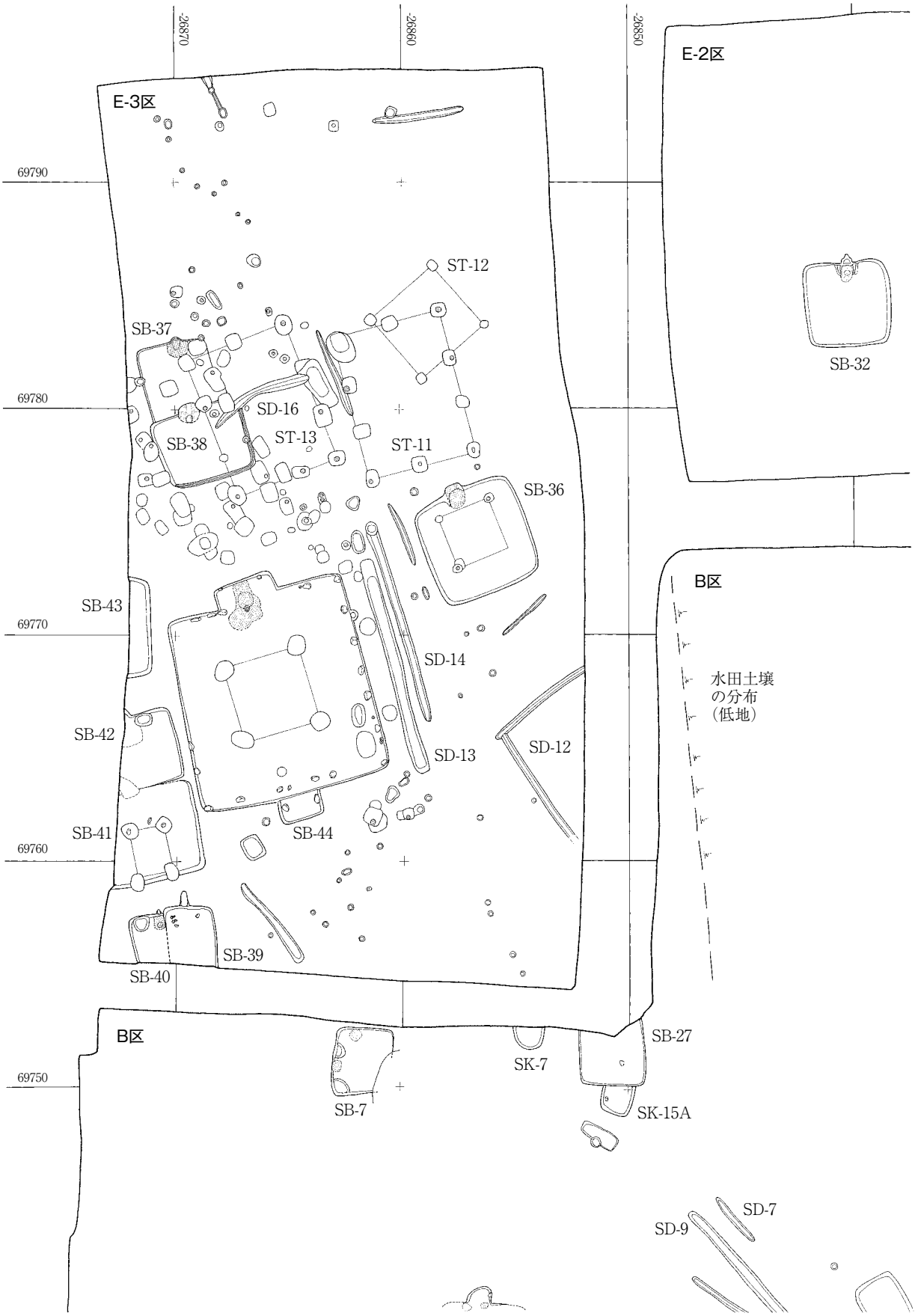


図８　SRTH 地点　遺構全体図③（１：250）

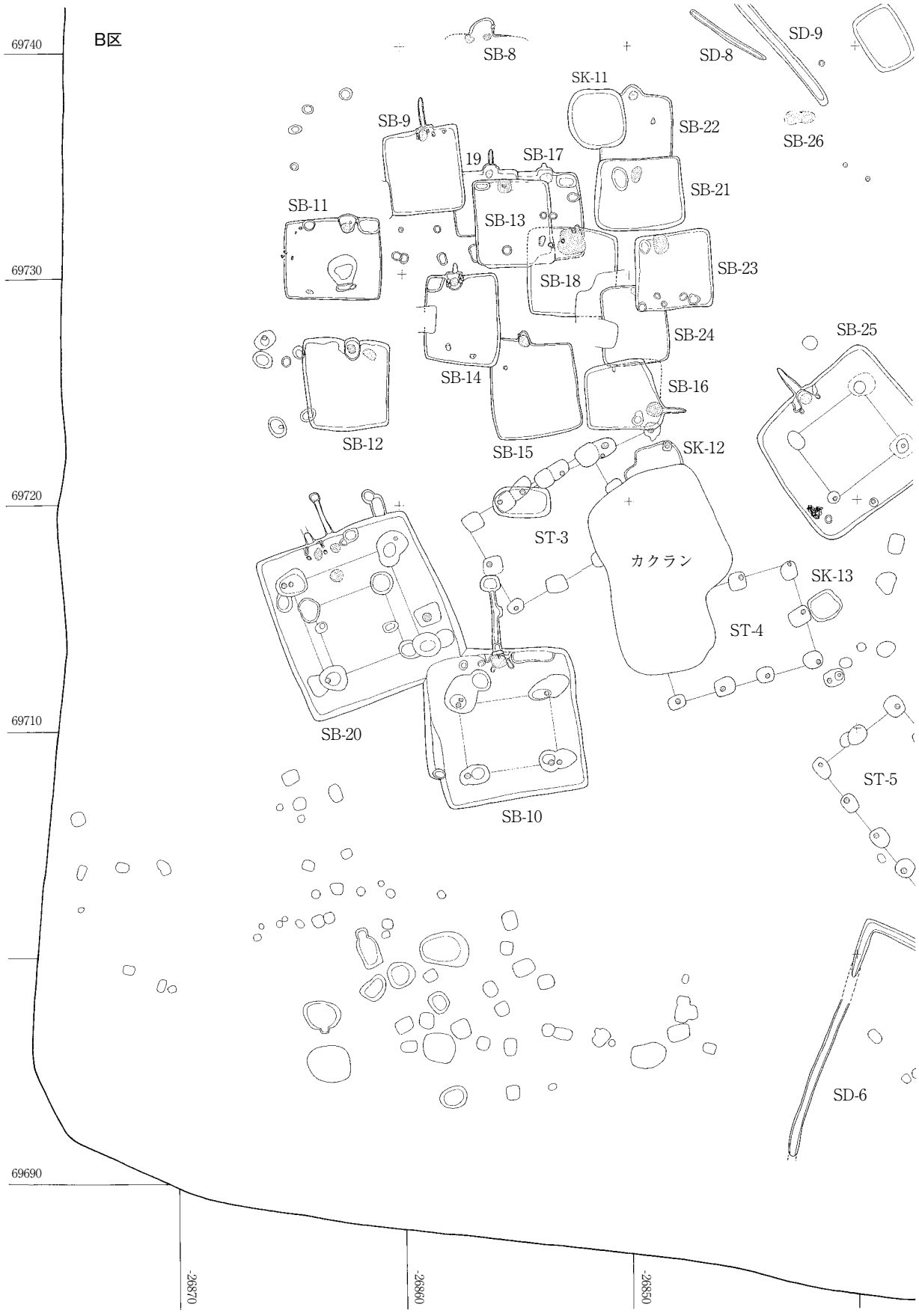


図９　SRTH 地点　遺構全体図④（１：250）

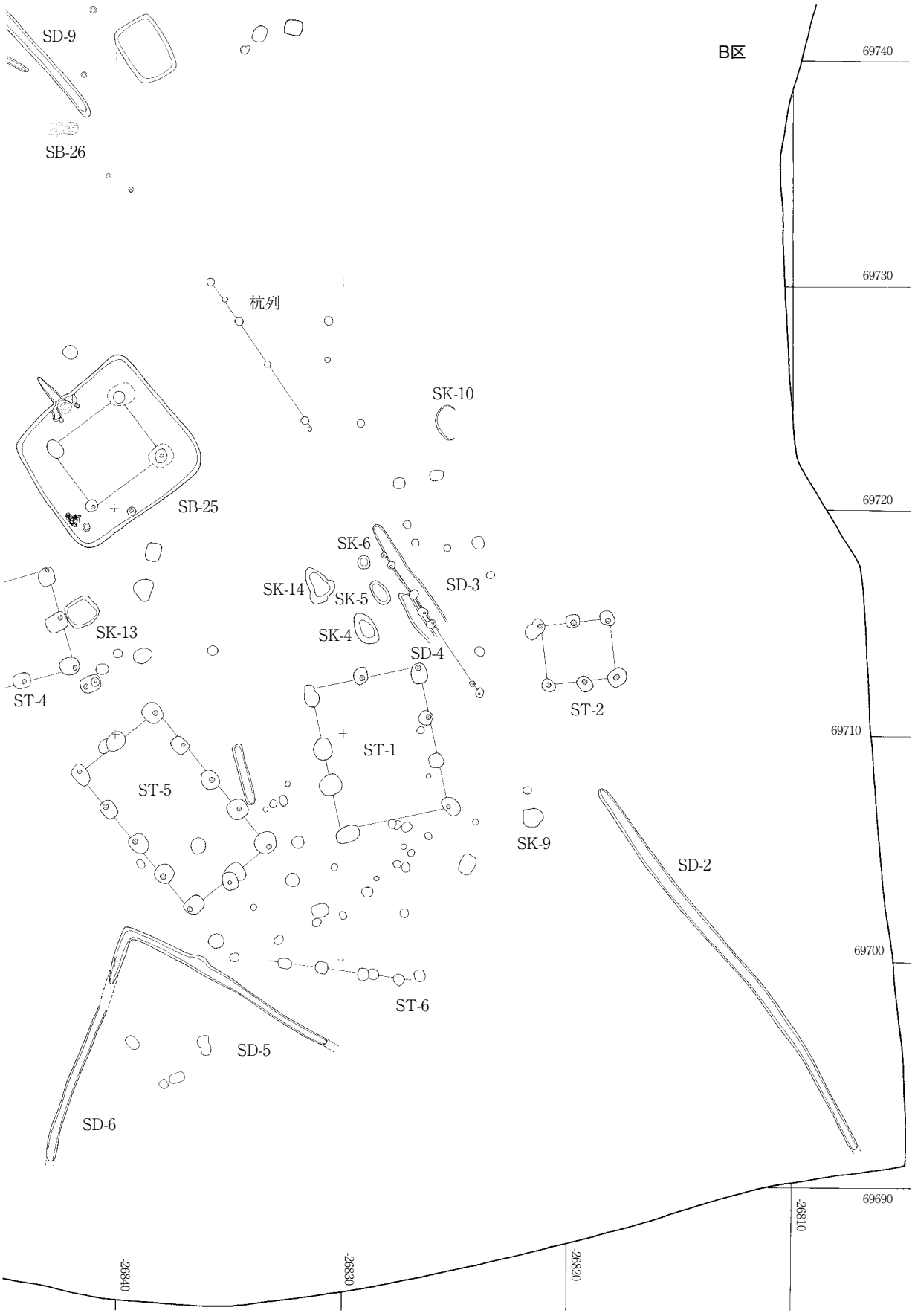


図10　SRTH 地点　遺構全体図⑤（1：250）

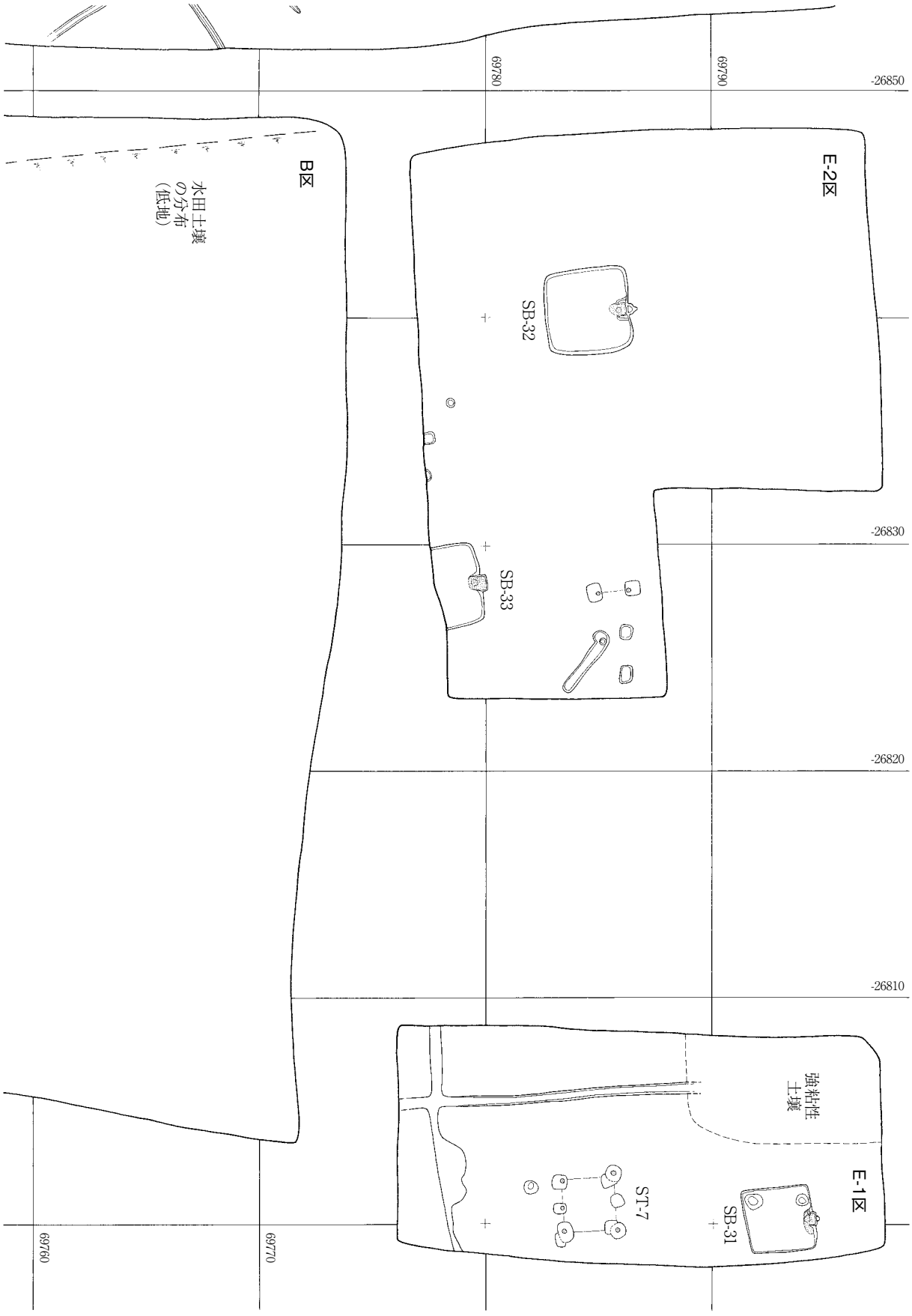


図11　SRTH 地点　遺構全体図⑥（1 ：250）

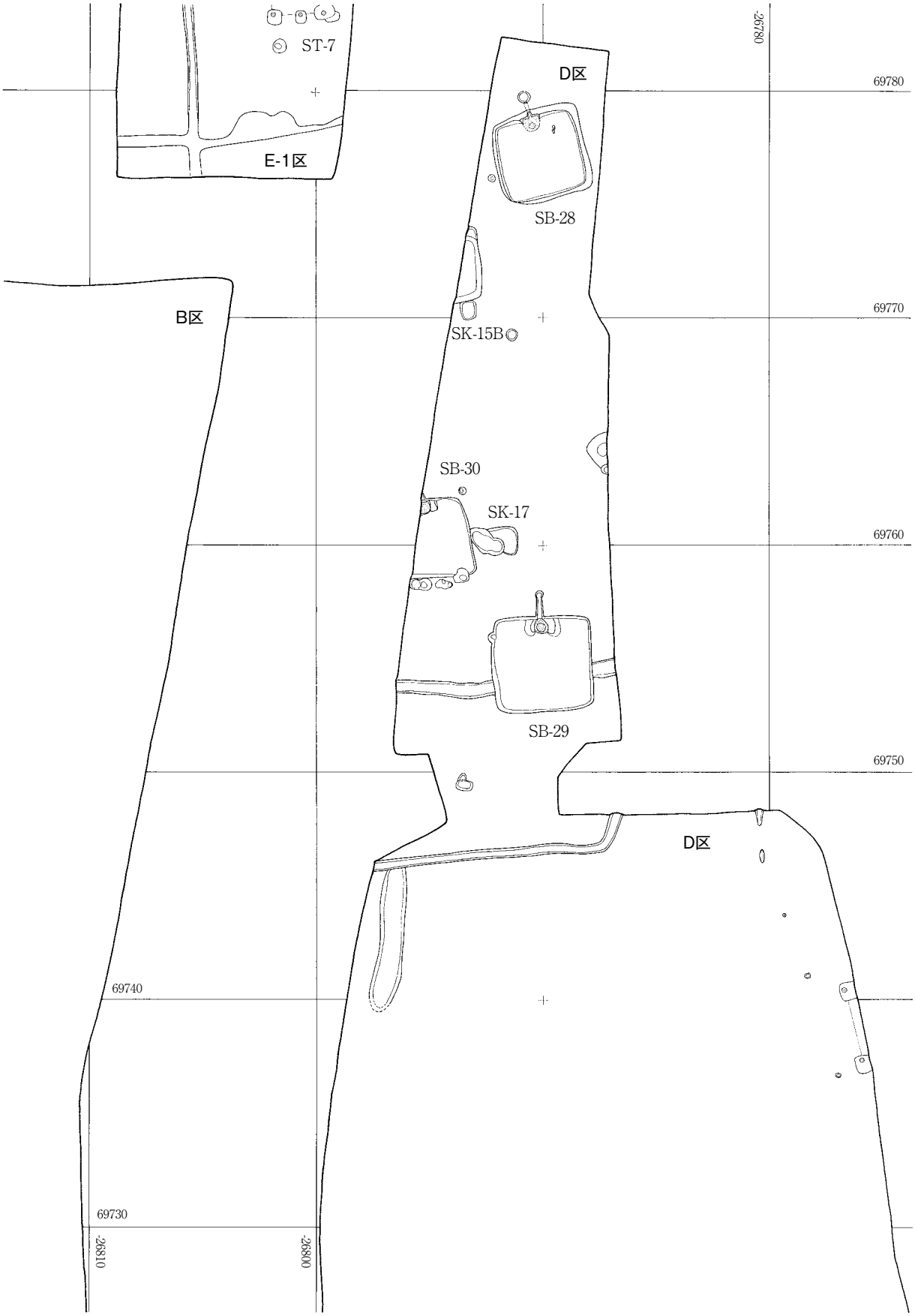


図12　SRTH 地点　遺構全体図⑦（1 ：250）

図13　SRTH 地点　遺構全体図⑧（1 ：250）

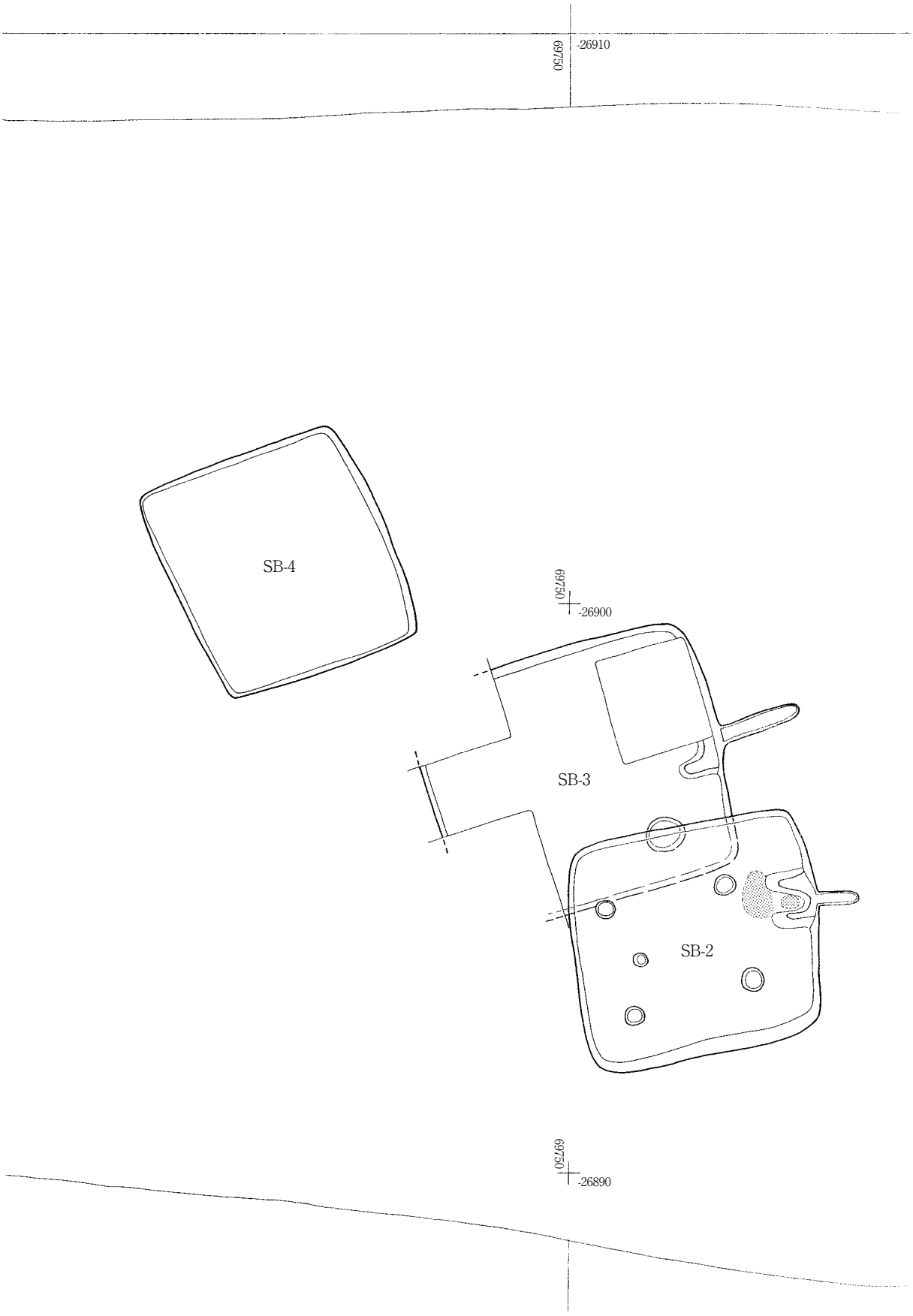


図14　SRTH 地点　Ａ－２区　遺構実測図①（１：100）

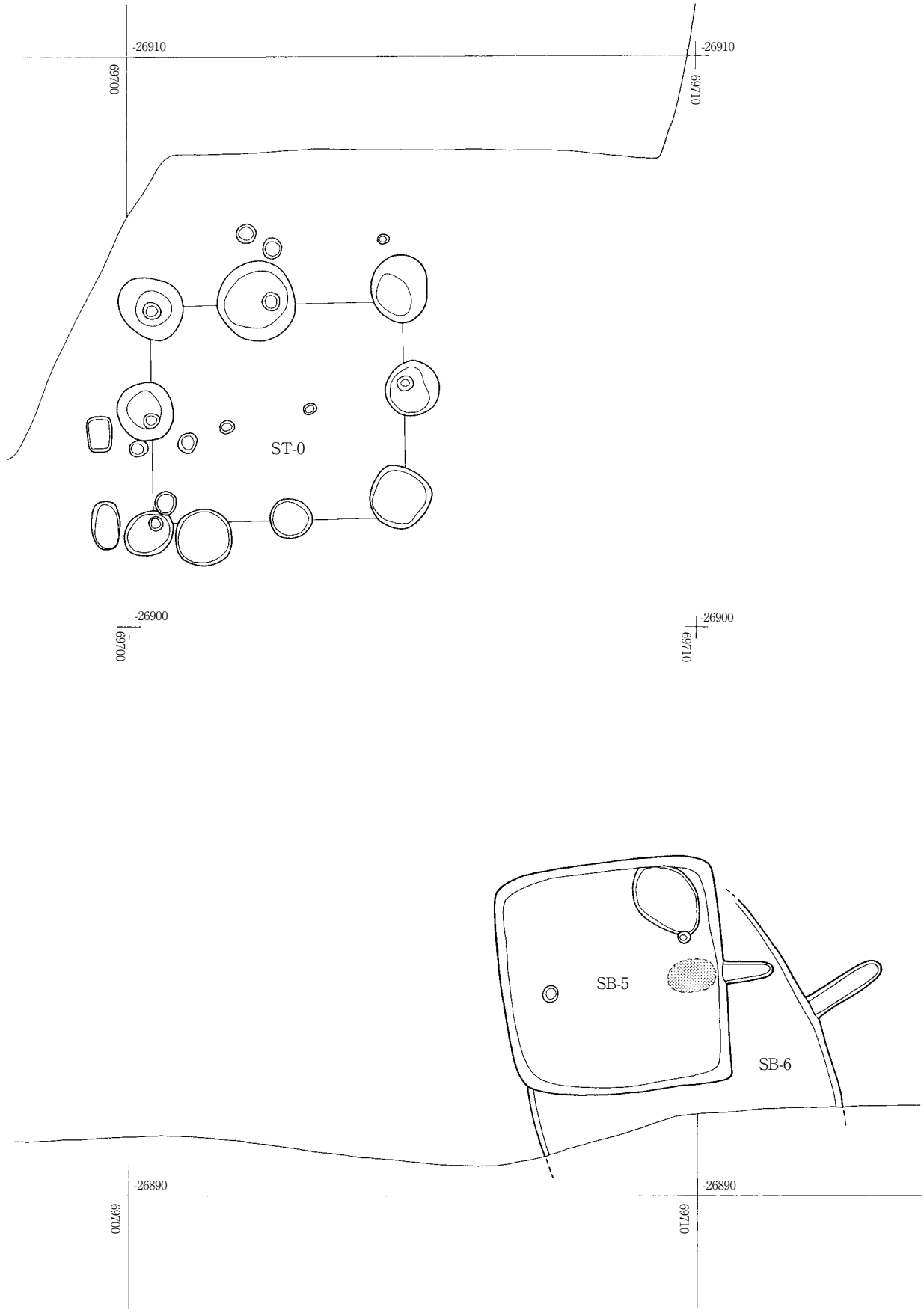


図15　SRTH 地点　Ａ－２区　遺構実測図②（１：100）

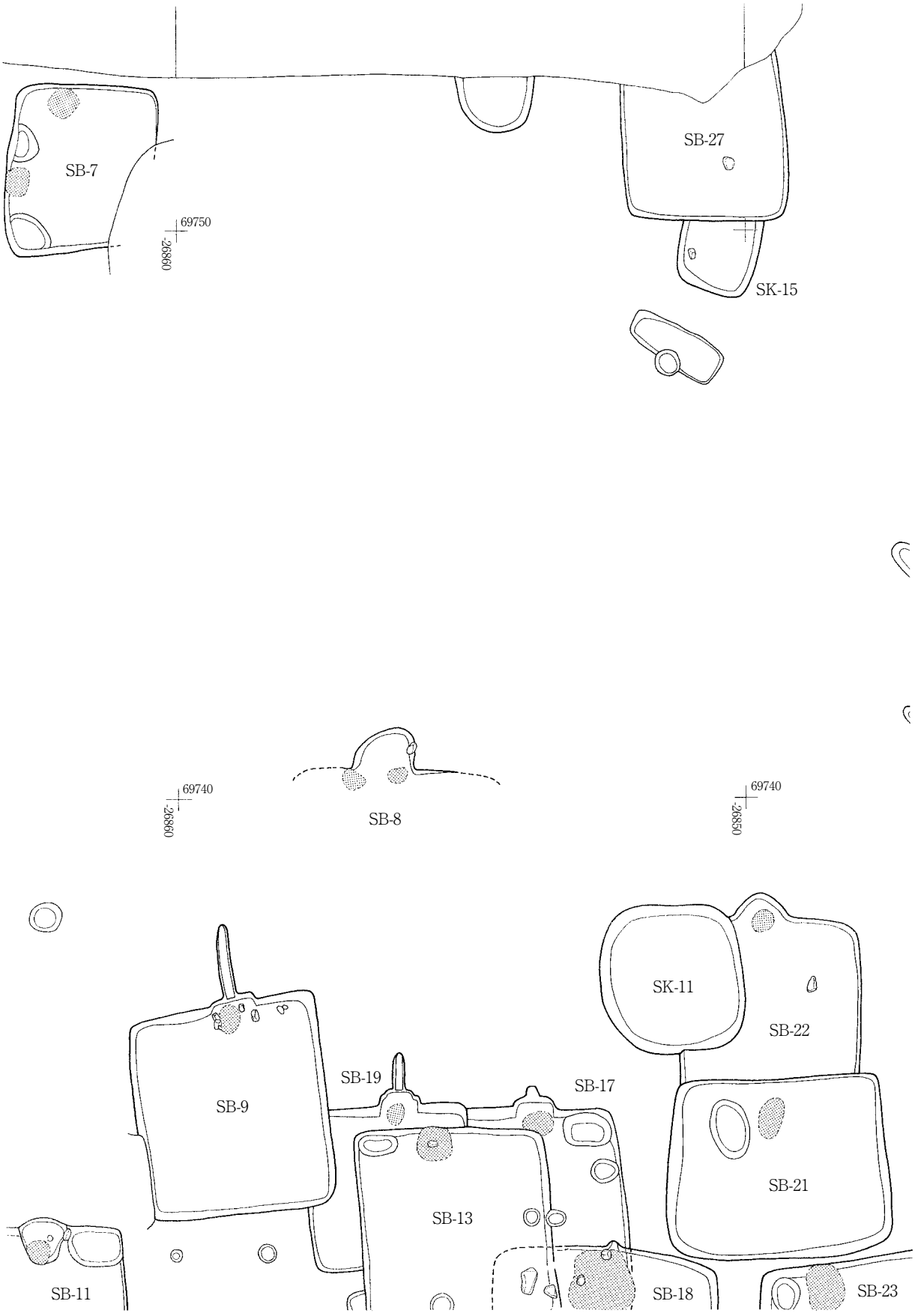


図16　SRTH 地点　B区　遺構実測図①（1：100）

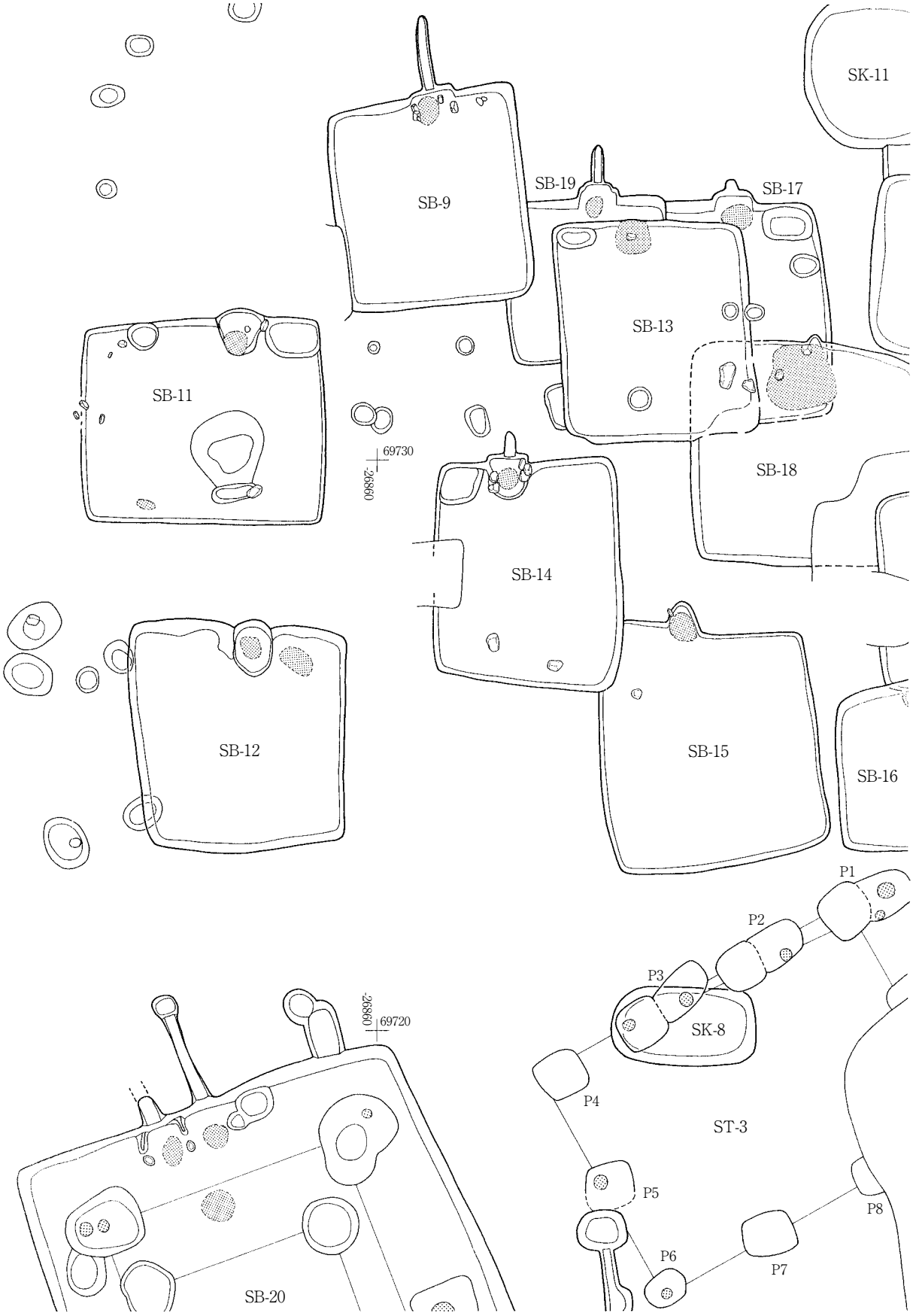


図17　SRTH 地点　B区　遺構実測図②（1：100）

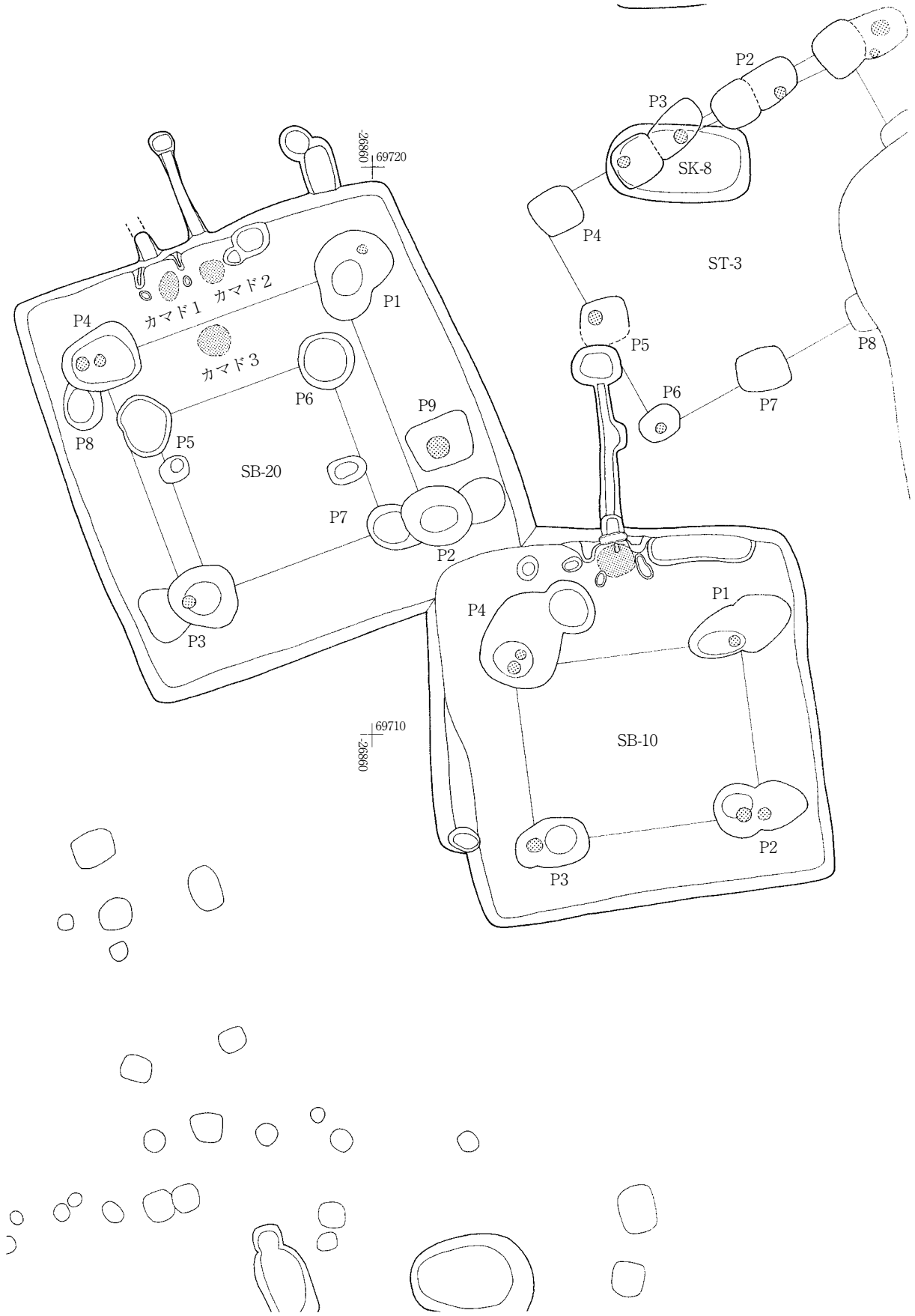


図18　SRTH 地点　B区　遺構実測図③（1 ：100）

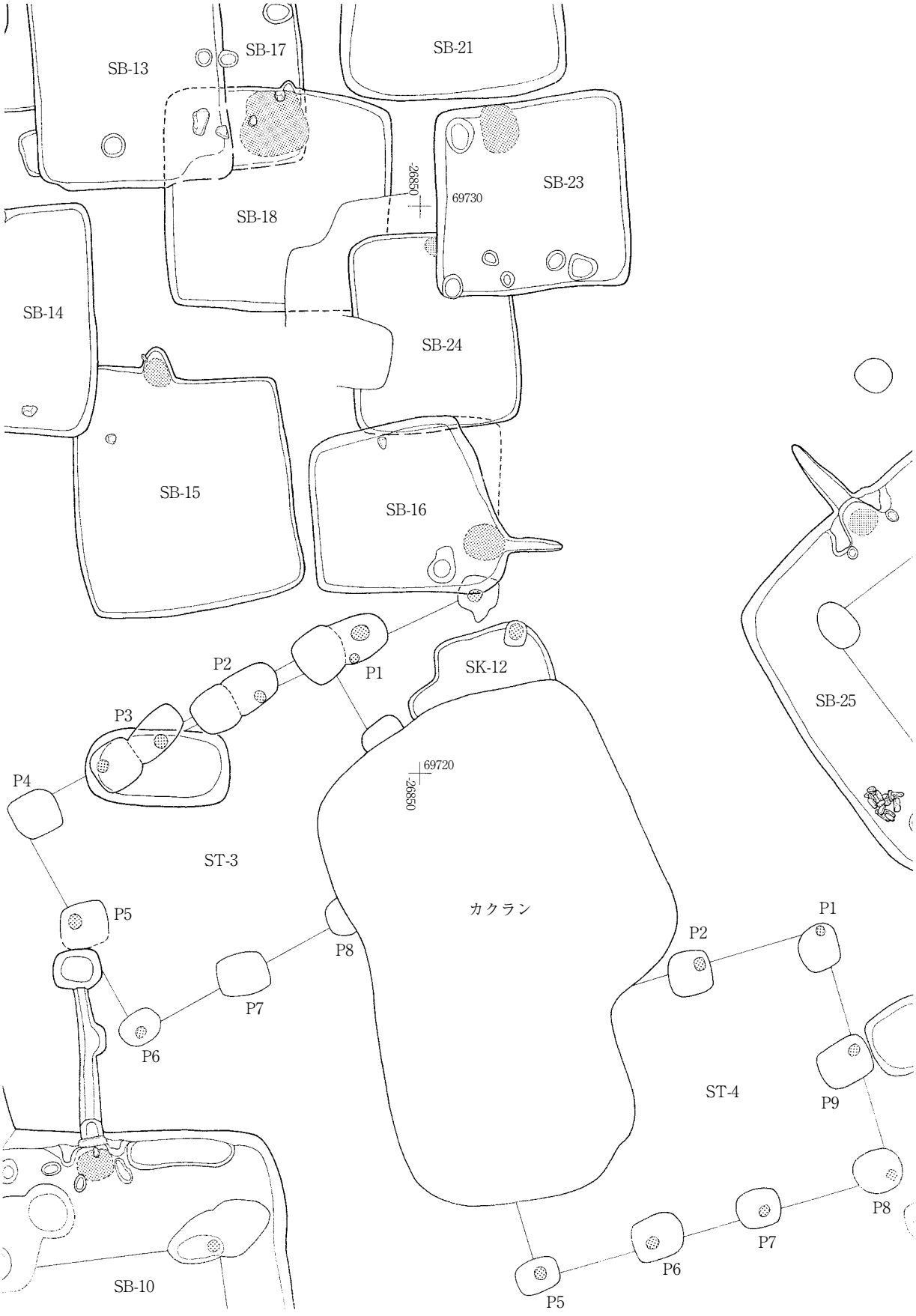


図19　SRTH 地点　B区　遺構実測図④（1：100）

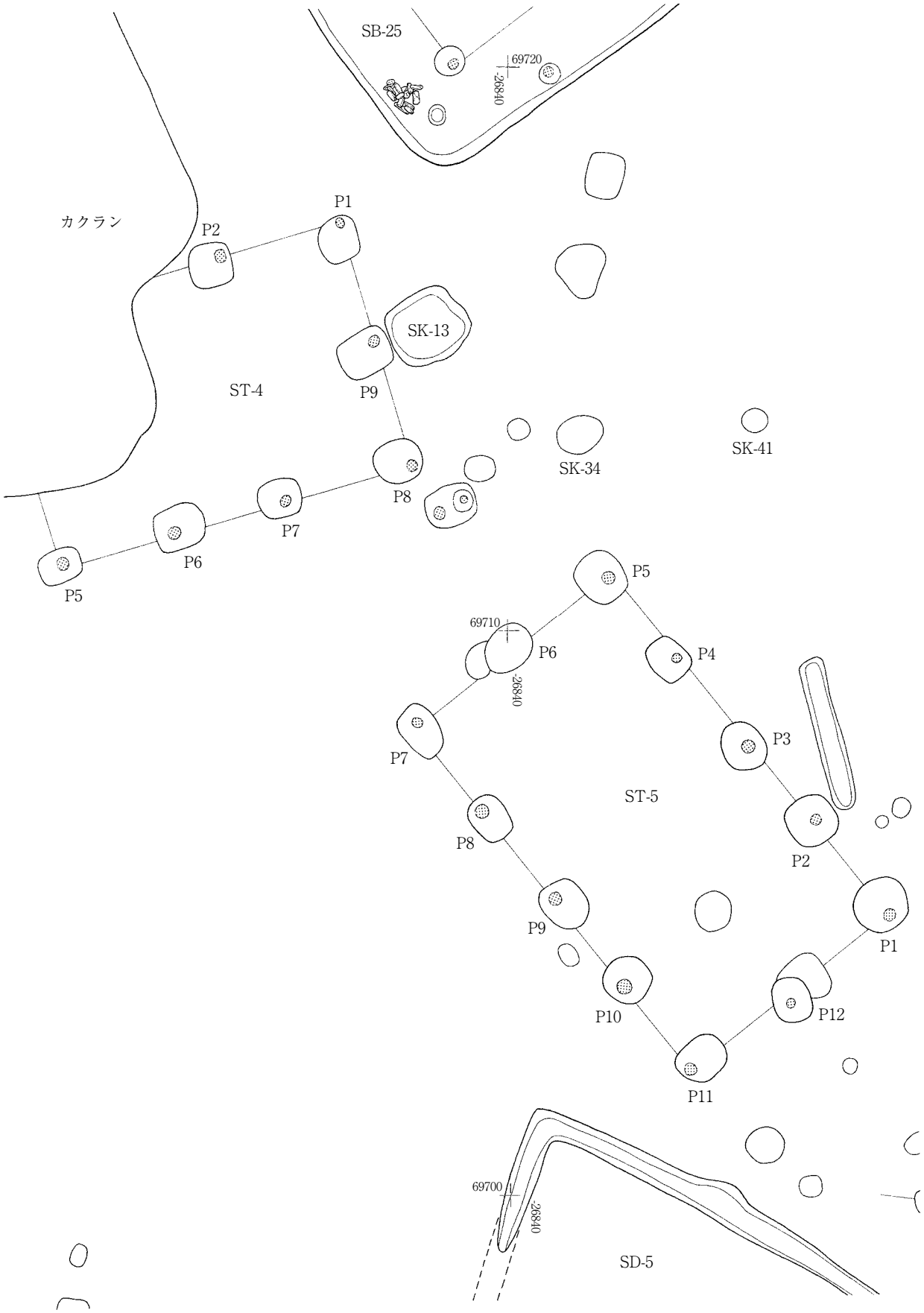


図20　SRTH 地点　B区　遺構実測図⑤（1：100）

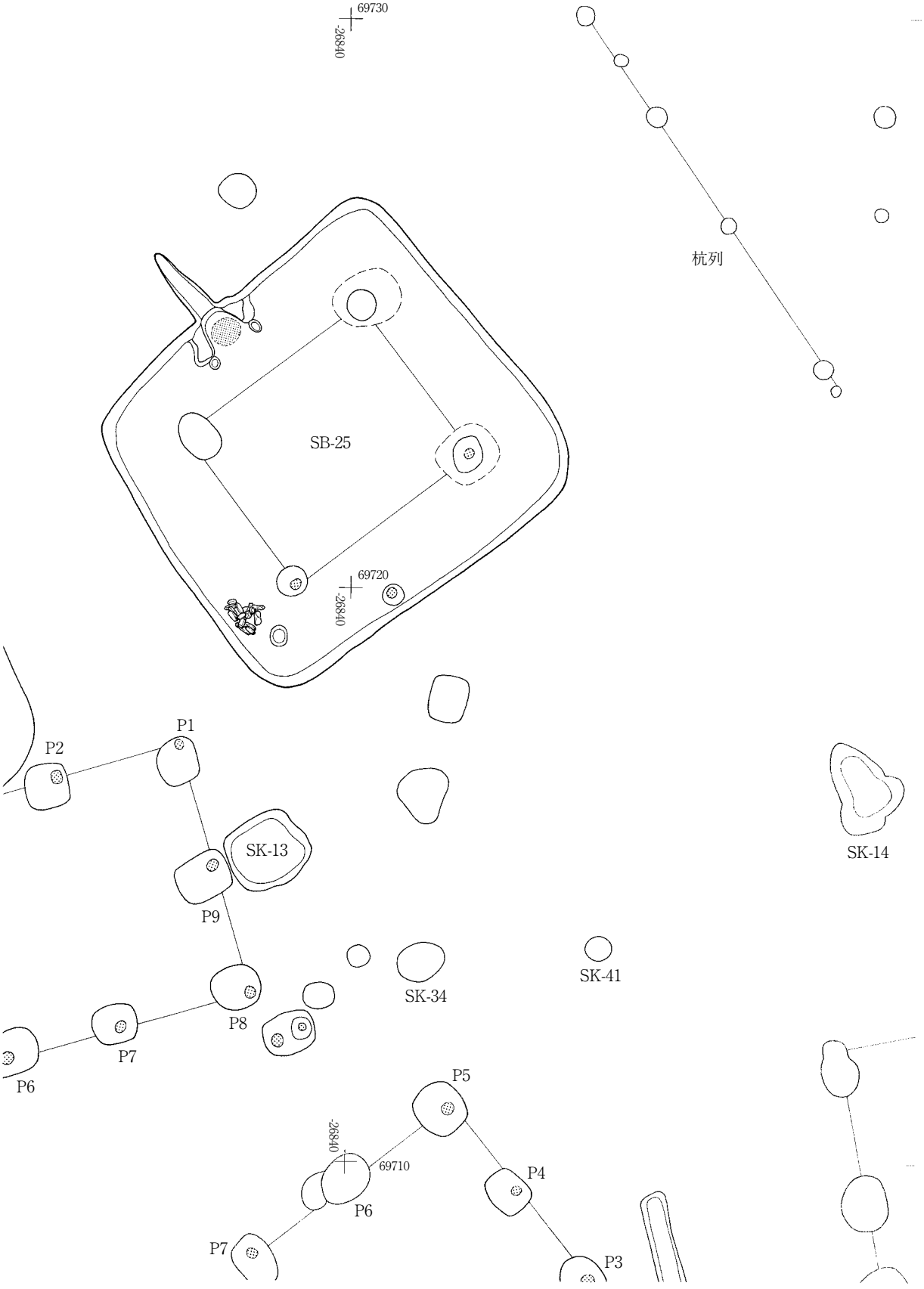


図21　SRTH 地点　B区　遺構実測図⑥（1 ：100）

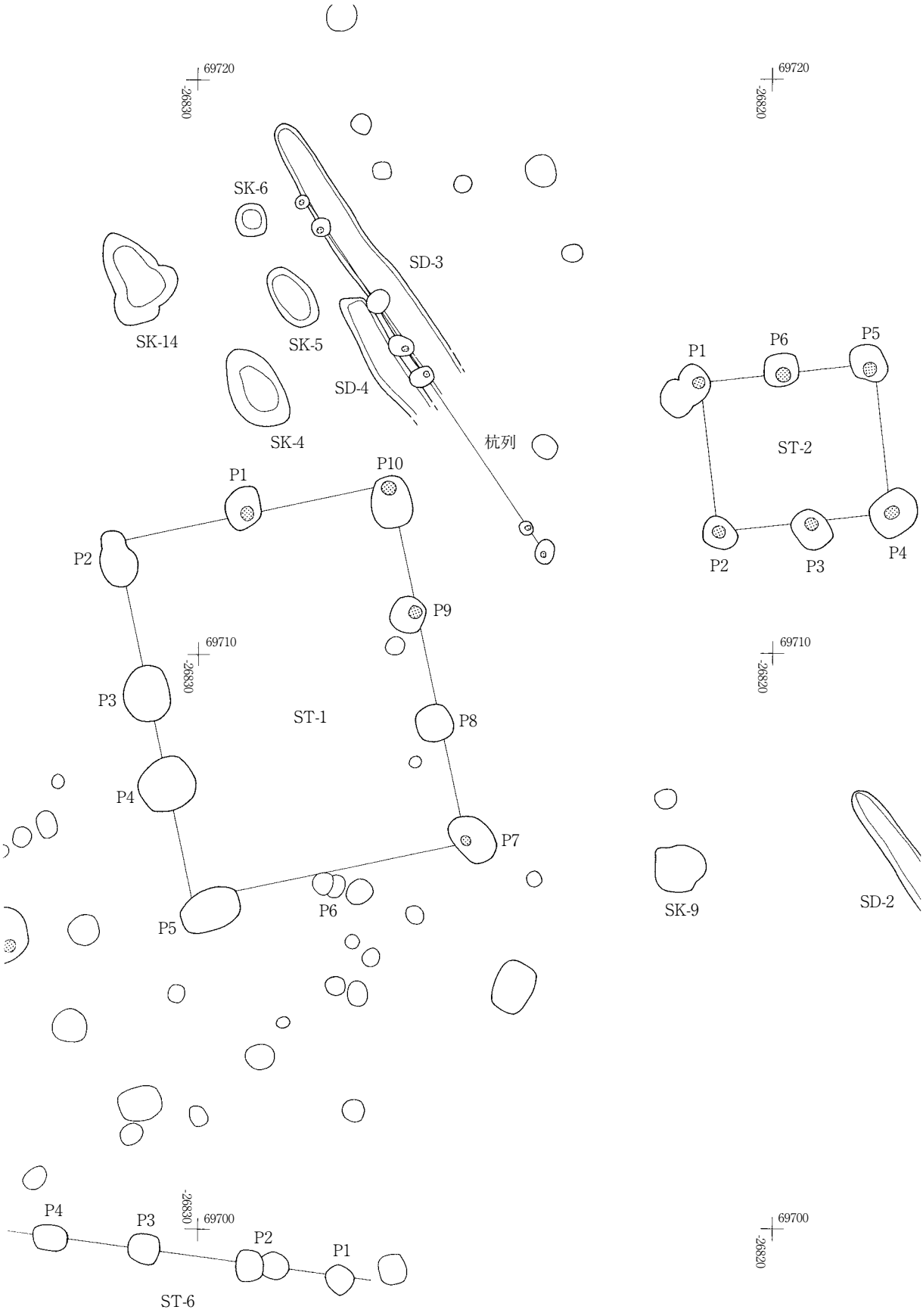


図22　SRTH 地点　B区　遺構実測図⑦（1 ：100）

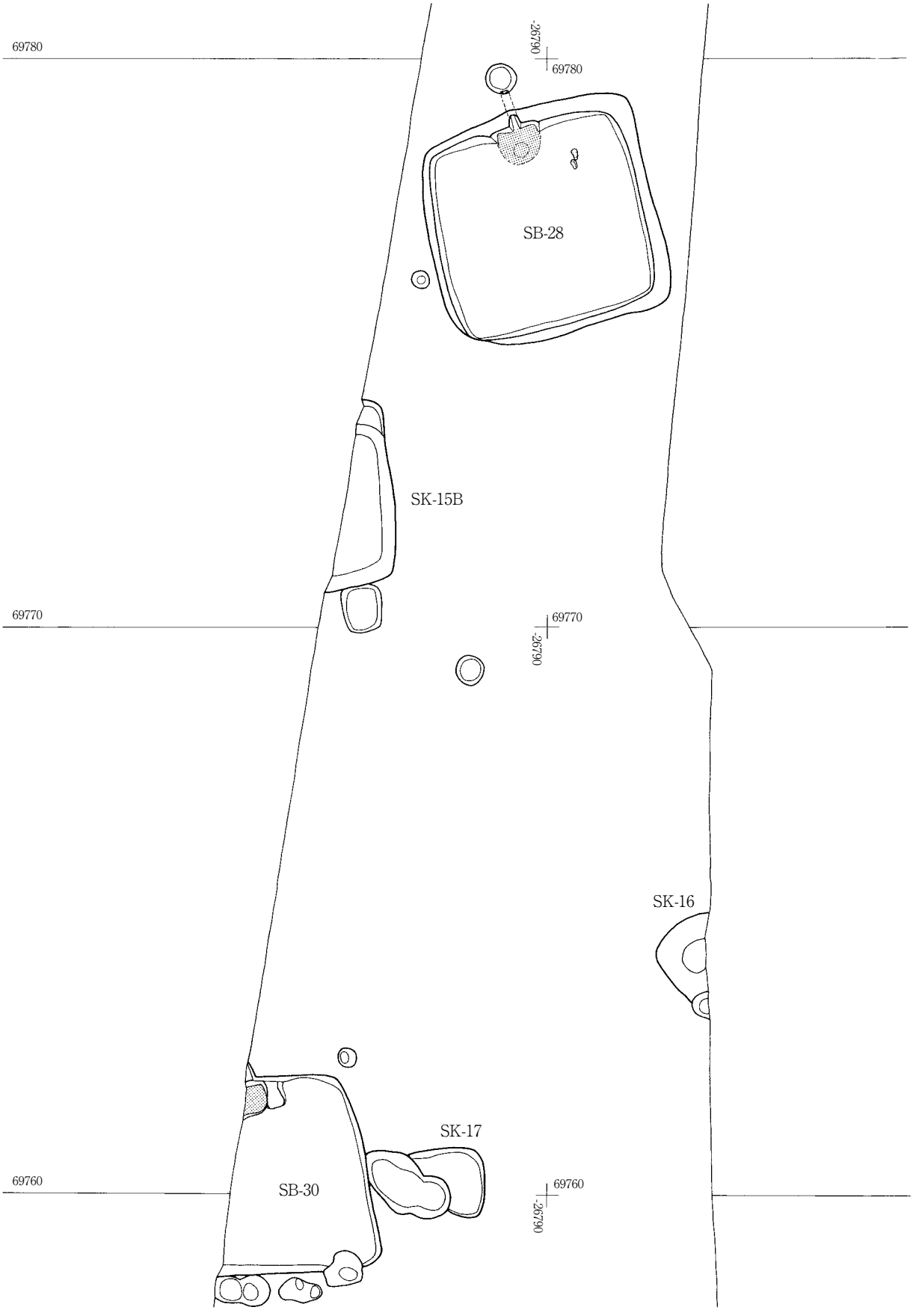


図23　SRTH 地点　D区　遺構実測図①（1：100）

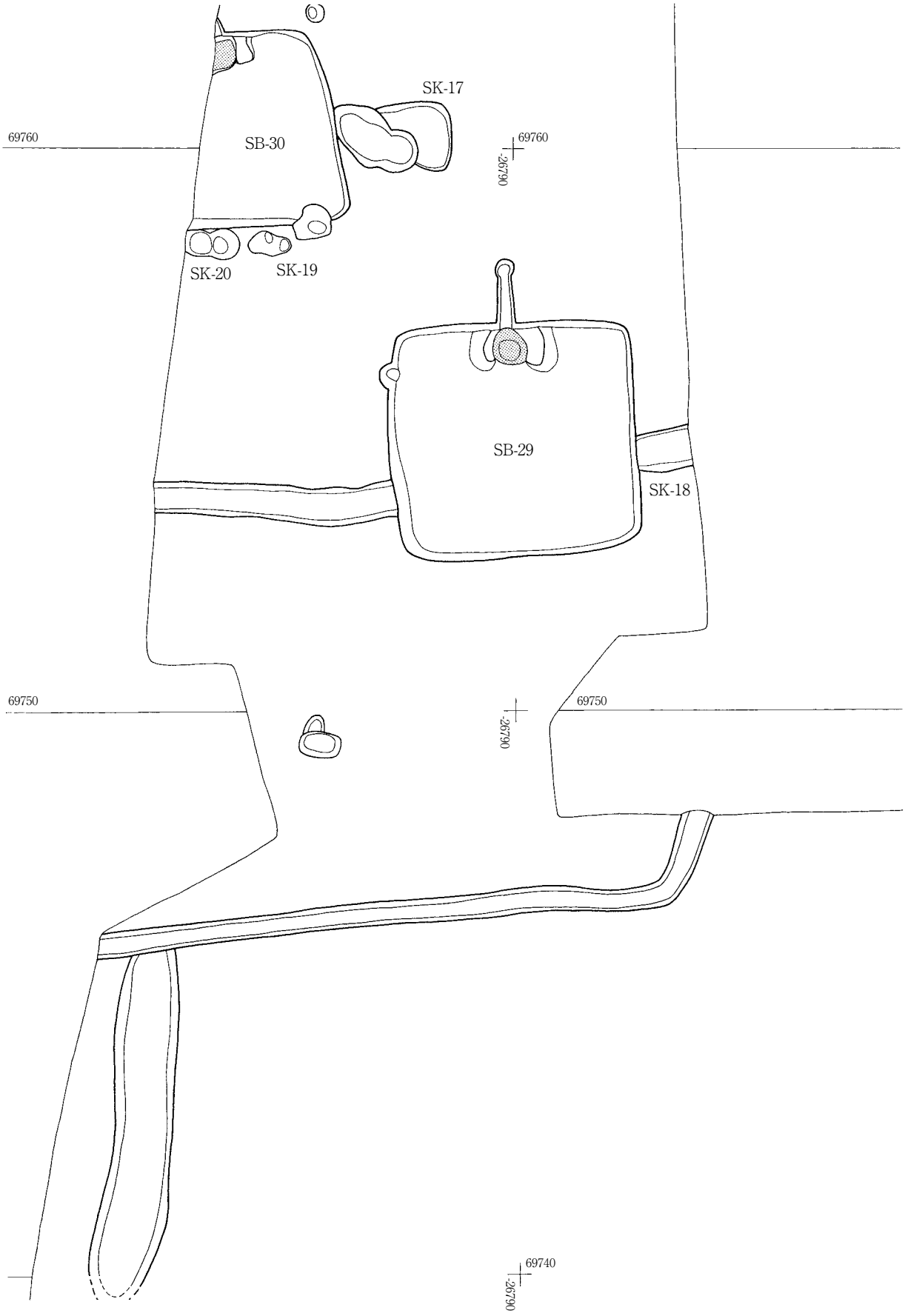


図24　SRTH 地点　D区　遺構実測図②（1 ：100）

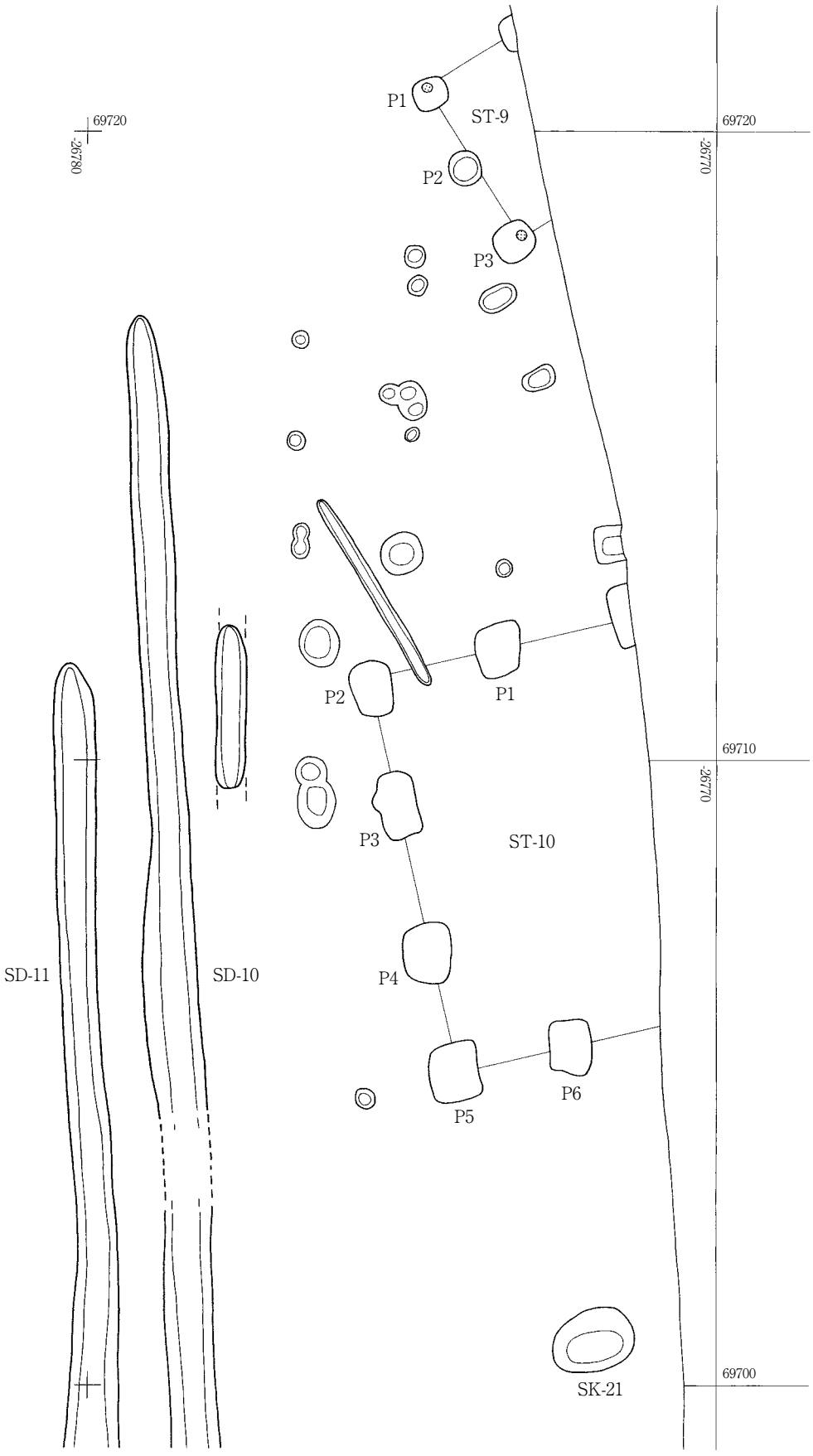


図25　SRTH 地点　D区　遺構実測図③（1 ：100）

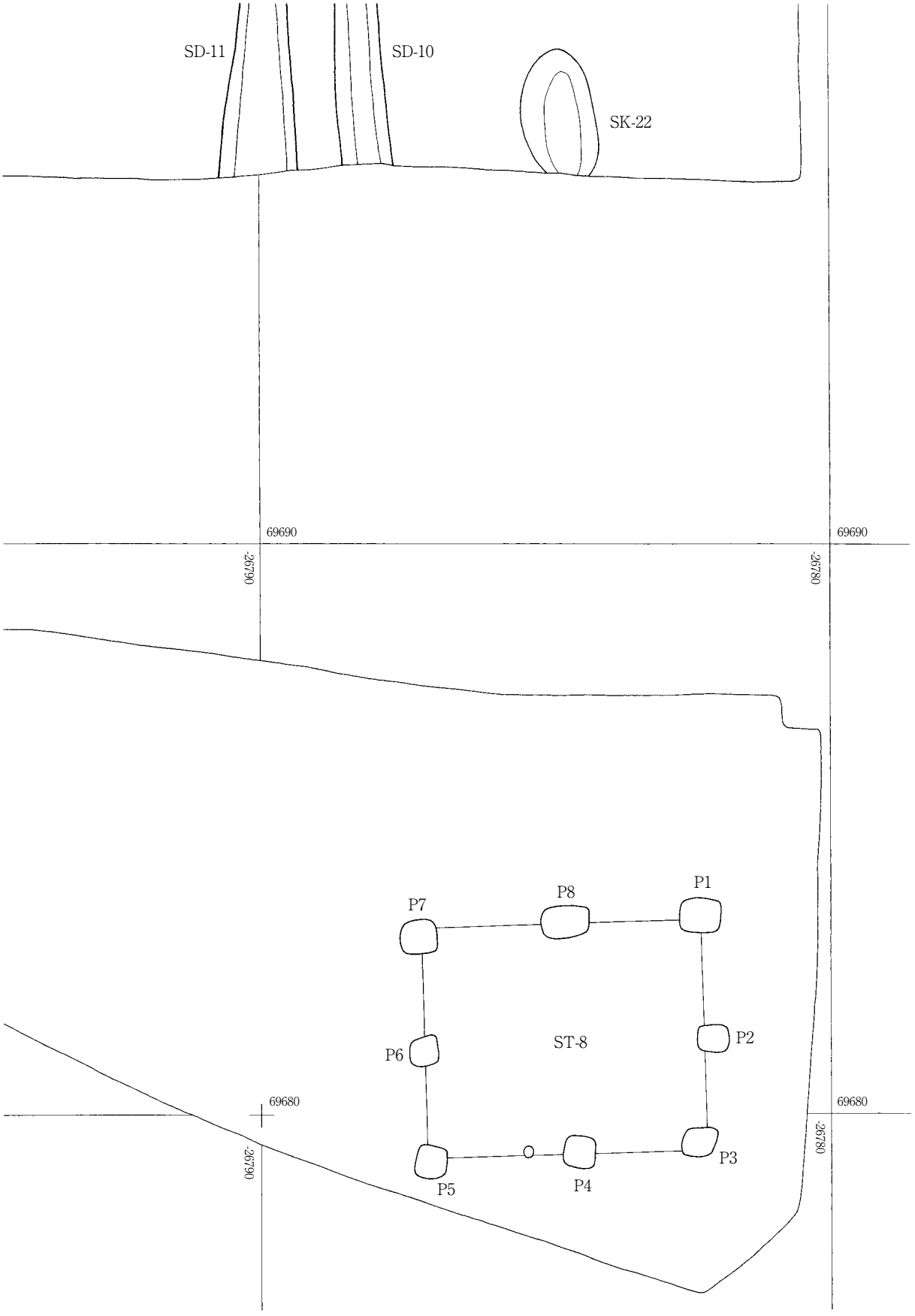


図26　SRTH 地点　D区　遺構実測図④（1 ：100）

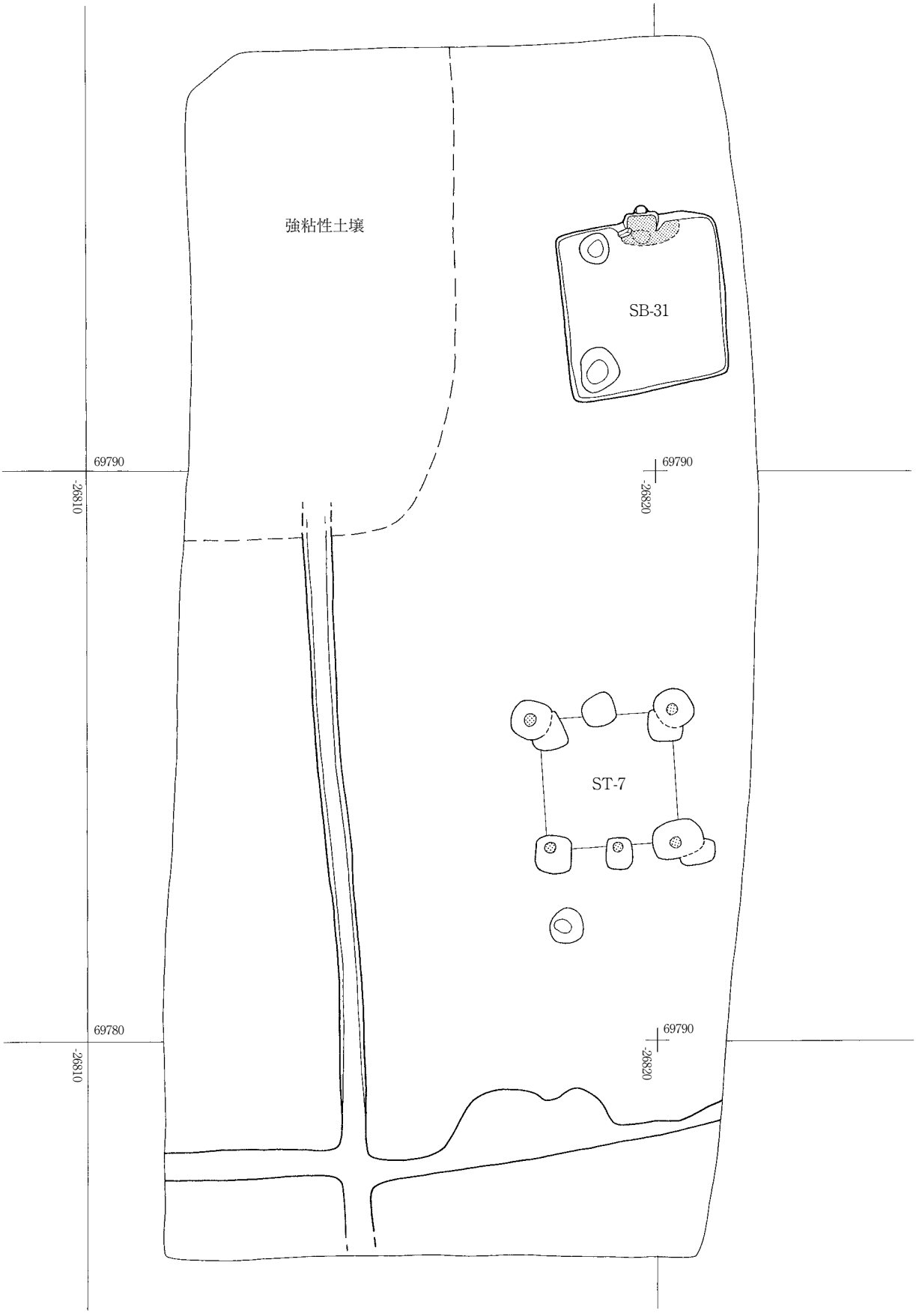


図27　SRTH 地点　Ｅ－１区　遺構実測図（１：100）

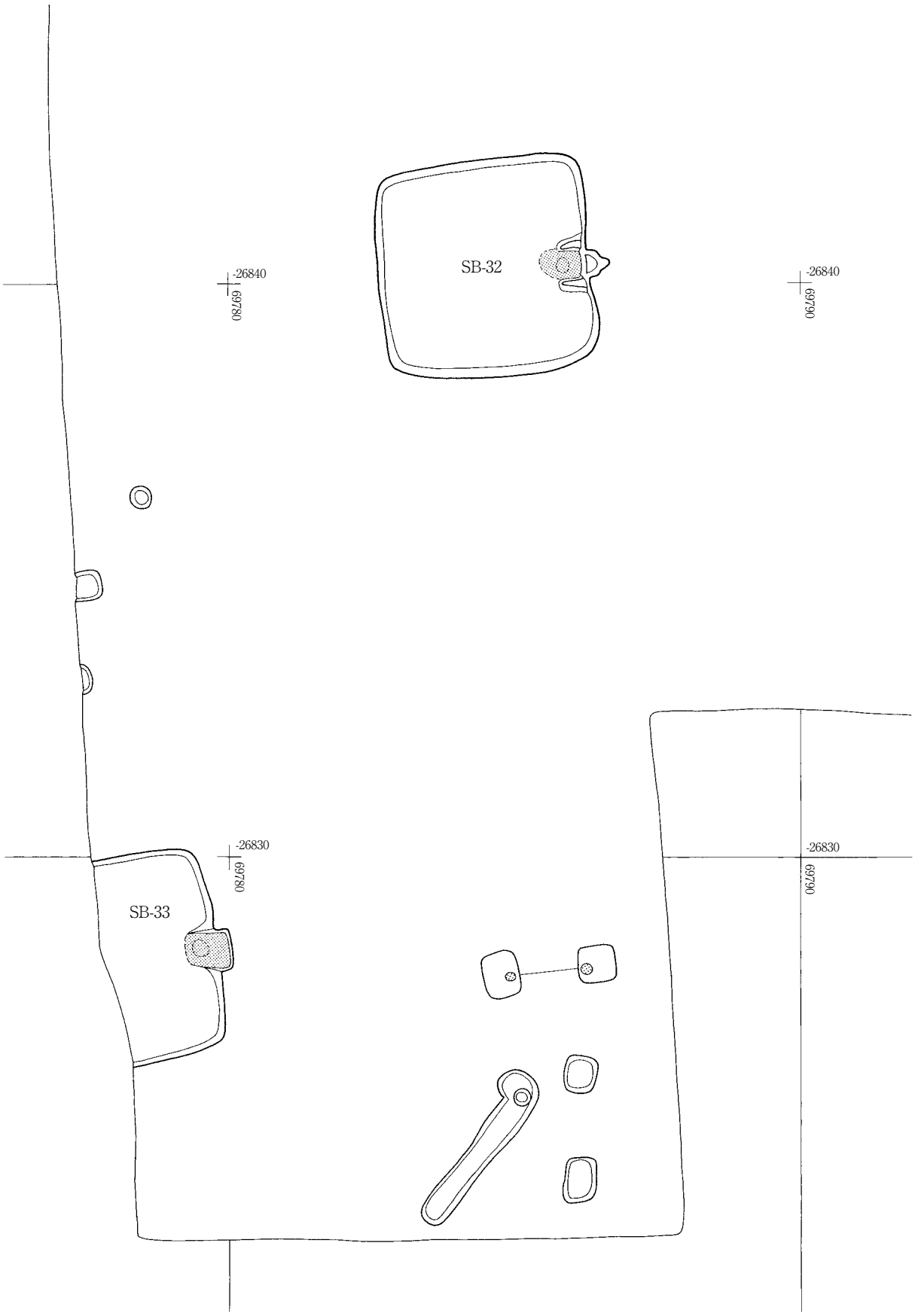


図28　SRTH 地点　Ｅ－２区　遺構実測図（１：100）

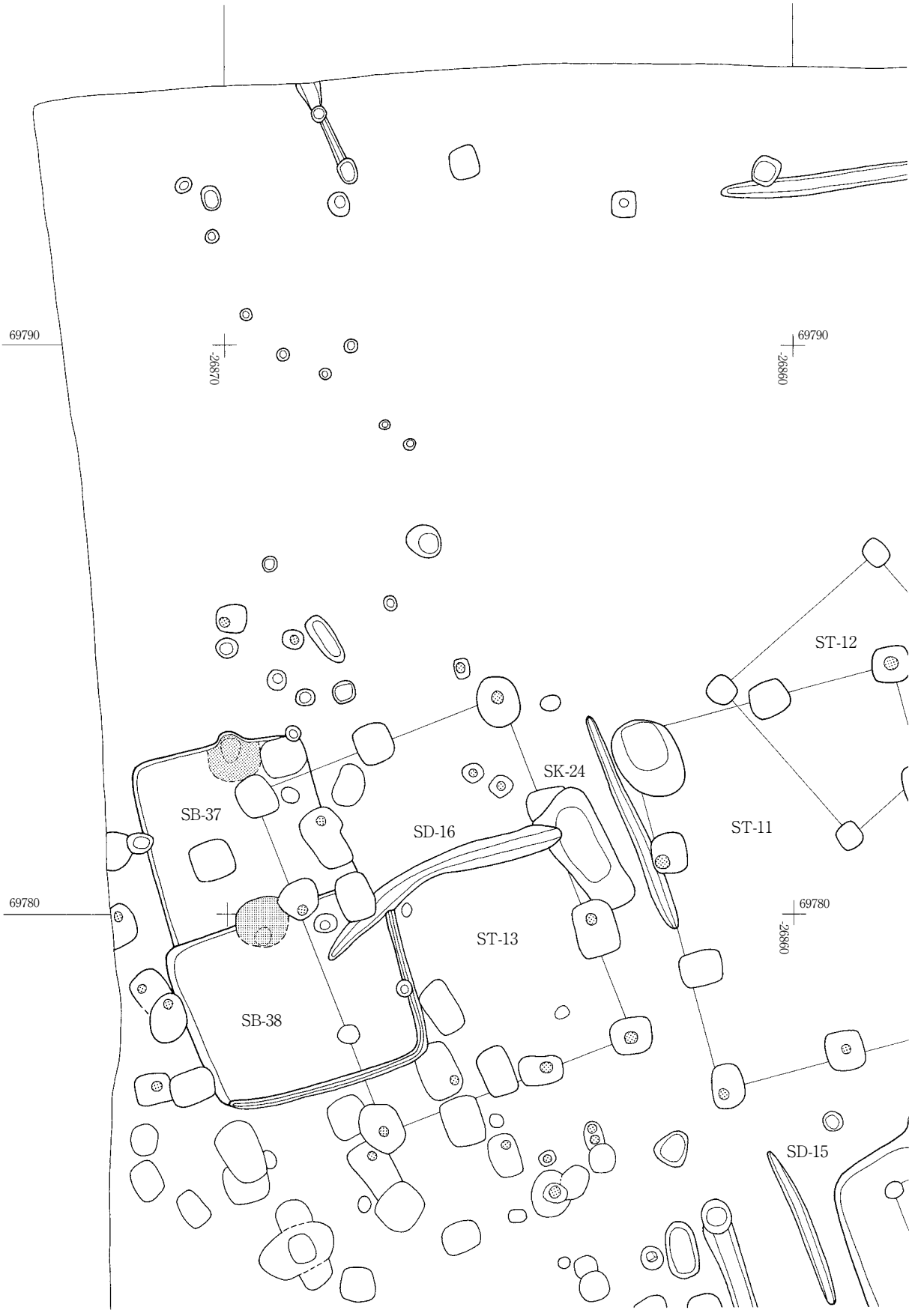


図29　SRTH 地点　Ｅ－３区　遺構実測図①（１：100）

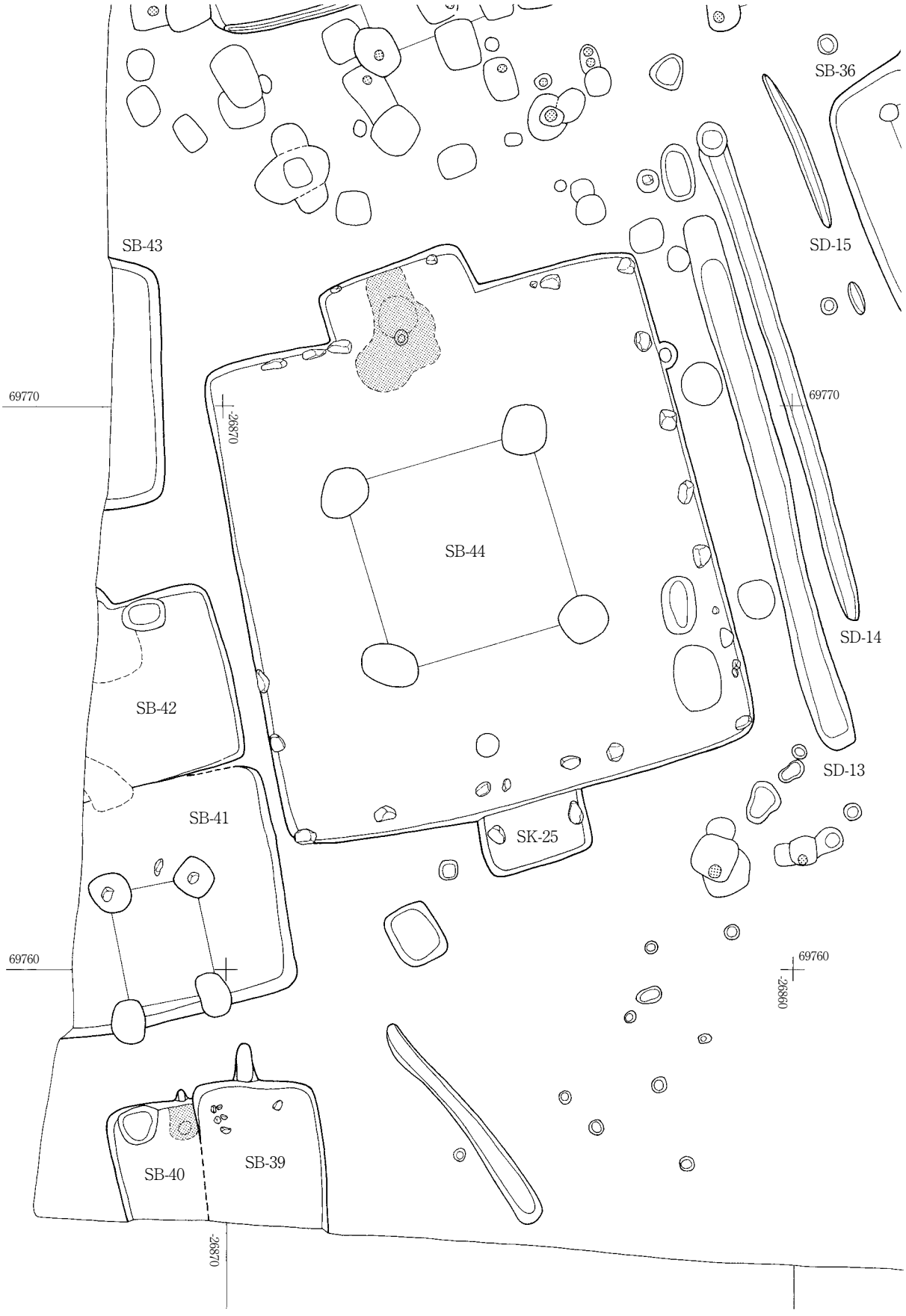


図30　SRTH 地点　Ｅ－３区　遺構実測図②（１：100）

図31　SRTH 地点　Ｅ－３区　遺構実測図③（１：100）

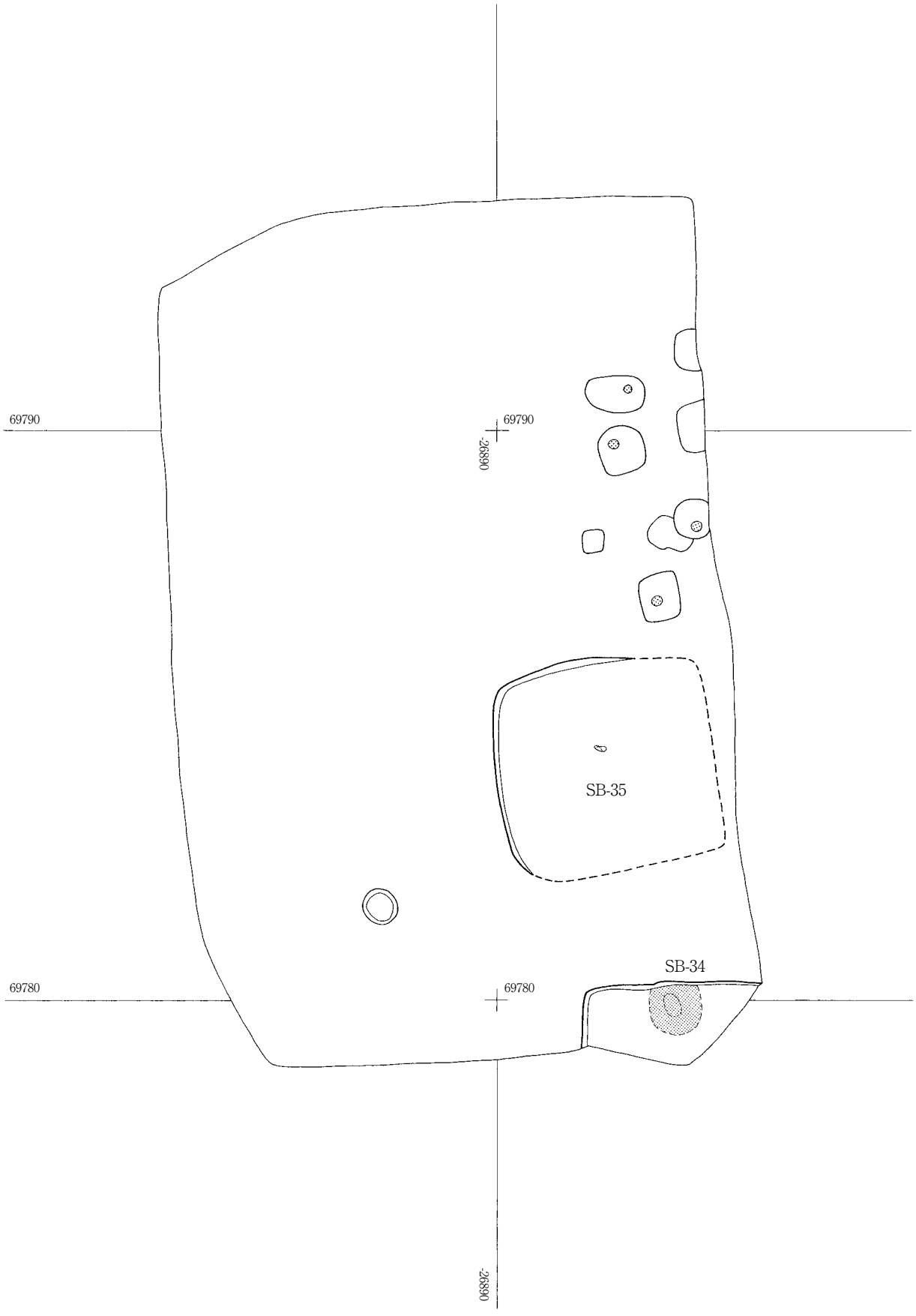


図32　SRTH 地点　Ｅ－４区　遺構実測図（１：100）

3　遺物

全遺構、遺構外より出土した遺物を整理し、種類ごとに抽出、図化を行い一連の番号を付した。図化したものに関しては観察表にその詳細を記す。以下、種類ごとに詳細を述べる。

(1) 土器

全遺構、遺構外から出土した土器の総重量は407,912ｇ（およそ408kg）に及ぶ。このうち、実測対象として各部位いずれかの径が概ね２分の１以上遺存する個体を抽出し、395個体を図化した。その上で器種ごとに、形態及び遺存の程度、寸法に応じて分類を行い、詳細を土器観察表にまとめた。なお、表中では、図面上認められる遺存部位を「全形」「口縁部」「底部」のように表記し、これに対する遺存の程度を「１／１」「２／３」「１／２」などとした。

当地点では古墳時代後期から、平安時代前葉までの住居を中心とした遺構が検出されており、その主体は７世紀末から９世紀末にあるといえる。

以下、時代ごとに詳細を述べる。

①弥生時代後期後半～古墳時代前期（図42）

当該期の遺構は確認されていないが、Ｂ－２区の検出面より甕が３個体出土した。289は、口縁から頸部にかけて波状文を上位から下位方向に施し、簾状文は施文されない。291は胴部に波状文を施し、下半部はヘラミガキを施す。290は波状文が確認できないが、上部はヨコハケ、下部は左上がりのハケで調整した後、ミガキによって仕上げられている。いずれも内面は丁寧に磨かれており、弥生時代後期後半に位置付けられる。

299～301は甕の底部である。299は摩耗により内外面の調整が不明であるが300は外面をケズリ調整する。301は胴部に丸みをもち、外面にはハケメが残る。いずれも、古墳時代前期に位置付けられる。

②古墳時代後期

該期の遺構は６・30・36号住居が確認されている。30号住居については小破片が多く実測個体が認められなかった。

６号住居（図34）　鉢・甑が確認できるが、いずれも状態が悪く底部のみ残存している。30は摩耗により調整が不明だが、29・31・32・34はいずれも外面が磨かれている。欠損部分が多く、全容を知ることができないが、形態から古墳時代後期後葉に比定される。

36号住居（図40）　大小異なる寸法の鉢（231～233）が認められるが、いずれもカマドの周辺より出土している。234は摩耗しているが内外面が磨かれ、偏平な皿状となる。甕は３点認められる。237は胴部下方をヘラケズリし、なでて調整している。238は小形であり内面には篦状工具の痕跡が残る。239は口縁に最大径をもち、胴部がやや膨らむ形態となり、炭化物が付着する（破線部分）。いずれも外面をハケ調整する。

③奈良時代

該期の主な遺構として３・10・20・25号住居が挙げられる。食膳具の変化に着目しながら以下で詳細を述べる。

３号住居（図33） 抽出個体において土師器坏は認められず、食膳具の主体は須恵器坏・高台坏によって占められる。須恵器坏は底部をヘラ切りした後なでて調整する。口縁にむかってハの字形に開くように体部が立ち上がり、腰部が丸みを帯びる。高台坏は底部が高台よりも張り出すもの（12・14）、高台の内面が接地するもの（13）が見られ、共に古い様相を呈する。貯蔵・煮炊具ではハケ調整の甕が認められ、口縁に最大径を持ち、底部にかけてすぼまるもの（19）と胴部に膨らみをもつもの（20）が出土した。

10号住居（図35） 抽出した食膳具37点の内、須恵器は32点に及ぶ（土師器４点、灰釉陶器１点）。須恵器坏は15点確認できるが、ヘラ切り未調整もしくは、ケズリ調整を加えるものが７点、回転糸切り未調整のものが８点で、おおよそ半々の割合である。72は腰部が張らずに緩やかに立ち上がり、浅い椀形になる。それ以外はほぼ逆台形となり、定型化の傾向がうかがえる。78～80は口縁端部の内面が外傾し、底部が内弯する点で共通する。75は体部に墨書があり、右横に傾いて「市」と読める。須恵器坏の破片ではあるが396（図45）も同様に「市」と墨書されている。高台坏では86・87のように器高の高い個体が認められる。また、抽出個体において須恵器蓋を12点確認した。折り返し部分が垂直になるもの（63・64）、外へ向かうもの（66）、内側に折り返されるもの（59）に分類できる。いずれも折り返し部分に加えられる調整は弱い。また、59・60のように擬宝珠形のつまみも見られ、古式の様相を呈す。

20号住居（図38） 食膳具では土師器よりも須恵器の占める割合が高い。土師器坏（175～178）はいずれも摩耗しているが、ミガキ調整し内面を黒色処理している。177は口縁が欠損しているものの、寸法は176・178と同様に15cm台前半になると考えられる。

須恵器の坏は４点確認できる。この内、168と169は底部をヘラ切りした後になでて整える。また、底部には「Ｖ」の篦書が認められるが、詳細は「(5) 墨書・刻書・篦書」の項で取り上げる。171は底部が欠損しているものの、形態から同様にヘラ切り後にナデ調整をするものと思われる。高台坏は口径が16.2cmと大きく、底部がやや張り出して比較的古い段階の特徴を備える。

貯蔵・煮炊具は長胴化した甕（188・189）や外面を丁寧に磨いた壺（187）などが出土した。また、181は器面全体を磨くが頸部を持たず、上部に口が開く無頸壺である。

25号住居（図39） 抽出個体では須恵器坏が１点、高台坏が３点、土師器坏が４点見られる。土師器坏（195～198）はいずれも内外面を磨いているが、黒色処理している個体は195のみである。須恵器坏（191）は底部をヘラ切りした後、なでて調整し、底部全体が張り出して丸みを帯びる。192の高台坏は口縁部が外反し、坏部が逆台形へと定型化する前段階のものと思われる。また、194は体部の形態が欠損のため不明だが、高台径は5.6cmと狭く、腰部の立ち上がりから椀形に近い体部を持つ可能性がある。いずれも、高台坏の初現期に相当するものと推察される。また、脚部のみの残存であるが土師器高坏も確認された（199～201）。高坏の使用における最終末段階になると思われる。

貯蔵・煮炊具では、外面をミガキ調整する壺（202）、胴部をハケ調整する甕（203・204）が見られる。204は最大径を口縁部に持ち、胴部の中心がやや膨らみながら底部にかけてすぼまるタイプである。

食膳具の変化における時期細分

20・25号住居段階に出土する土師器坏と須恵器坏・高台坏の割合は同程度であり、須恵器の占める割合は増しているものの、土師器坏における非ロクロ成形技法が消滅する段階には至っていない。25号住居段階で依然として高坏が認められる一方で、20号住居段階では須恵器蓋が出土し、高台坏にも定型化の兆しがうかがえる。３号住居においては、土師器坏の抽出個体が認められないものの、須恵器坏・高台坏の形態から25号住居と並ぶものと思われる。10号住居段階では須恵器が主体を占めるが、坏は底部切り離し技法が混在するようになる。

年代は３・20・25号住居段階が７世紀末から８世紀初頭、10号住居段階が８世紀中葉から後半に位置付けられ新たな器種組成への変換期と言える。

④平安時代

当地点では該期の遺構とそれに伴う遺物が主体を占めているが、概ね８世紀末から９世紀末に該当する。形態及び、食膳具における器種の組成からⅠ期（古段階）・Ⅱ期（中段階）・Ⅲ期（新段階）の３つの時期に区分した。

○Ⅰ期

主な遺構として９・12・44号住居が挙げられる。

９号住居（図34） 抽出個体では須恵器坏１点と蓋２点、黒色処理の土師器坏１点が確認される。須恵器が主体であるものの、黒色処理した坏の存在が認められる。須恵器坏（43）はやや器高が高いが、底径は７㎝台前半、口径は14㎝台前半となり、縮小化の傾向にある。41・42の蓋は共に折り返し部分が垂直からやや内側に折れ、外面のつまみ周辺にはケズリ調整が加えられる。甕（45）と共にカマド内からの出土である。黒色処理の土師器坏（44）はロクロ成形後に底部を丁寧な手持ちヘラケズリで整えており、ロクロ成形の土師器坏の初現段階と言える。

12号住居（図34） 食膳具の抽出個体では須恵器のみ確認できる。坏（52・53）は底径・口径に縮小化が見られる。高台坏は残存状態が悪く、底部のみの残存である。55は大きくひしゃげており、このような粗悪品も流通していたようである。56と同様に底部外面には回転糸切りの痕跡を残し、底部調整の粗雑化の傾向がうかがえる。貯蔵・煮炊具では、底部のみの残存であるが、小甕（57）などが確認された。

44号住居（図41） 須恵器坏・高台坏・蓋が確認される。坏は底径が７㎝台後半～８㎝と大きいものの、器高は３㎝台と低くなる。高台坏は体部が逆台形となり定型化したものであるが、269は底部外面の中央部に回転糸切り痕を残しており、粗雑化が認められる。蓋（259～262）は折り返し部分が内側を向き、内外面に加えられる調整が強くなる。

Ⅰ期の傾向と特色

食膳具では奈良時代から継続して須恵器坏・高台坏が主体を占める中で、ロクロ成形で内面を黒色処理した土師器坏が認められるようになる。須恵器坏は寸法に小形化の傾向があり、底部調整がヘラ切り・ヘラケズリのものから回転糸切り未調整へと変化する。高台坏においては、底部調整の粗雑化の傾向がうかがえる。

貯蔵・煮炊具ではこれまでの長胴甕は見られず、糸切りの底部をもつ小形甕（57）や砲弾形の甕（45）が認められる。

須恵器坏・高台坏の形態的特徴、器種組成の変化から８世紀末から９世紀前半に比定される。

○Ⅱ期

主な遺構として７・23・26・35号住居が挙げられる。

７号住居（図34） 抽出された個体は須恵器坏１点、黒色処理した土師器坏３点である。35は底径が5.5㎝となり、灰白色の色調を呈す軟質須恵器である。内面と口縁部には煤と油脂滓が付着しており、灯明皿として使用していた可能性がある。黒色処理の土師器坏（36～38）は底部を手持ちヘラケズリする。36はケズリ後になでており比較的丁寧に整形されるが、38は底部が非常に薄くなるほど粗く削っている。

23号住居（図37） 須恵器坏が３点確認できるが、157は体部に墨書をもつ。また、黒色処理した土師器に高台坏と皿といった新たな器形が加わる。159は回転糸切り後に底部をケズリ調整している。一方、160は外面も黒色処理し底部は回転糸切り未調整で、底部調整の異なる個体が共存する。また、162・163のような高台坏、皿が認め

られるようになり、次第に黒色処理が主流になっていく。なお、161～163には刻書が見られる点で特筆される。

煮炊・貯蔵具は糸切り底をもつ小形甕(164)と内面にカキメを残す砲弾形甕（165）が確認できる。

26号住居（図39） 抽出個体では須恵器はみられず黒色処理の土師器坏が確認できる。底部調整は回転糸切り後にケズリ調整するものが２点（205・206)、回転糸切り未調整のものが５点（207～211）認められる。前者は口径13～14cm台、後者では口径17～18cm台と寸法に差があり、大小に器形分化したものと思われる。また、208は内外面に油脂滓が付着し、灯明皿としての使用が考えられる。

35号住居（図40） 須恵器坏３点、黒色処理した土師器坏１点が確認される。須恵器坏は底径が6.1～6.2cmと小形化が進む。また、227は体部に「平」と墨書される。229は灰白色を呈す軟質須恵器であるが、内外面に油脂滓が付着し、灯明皿としての使用がうかがえる。黒色処理の土師器坏（230）は底部を回転糸切り後に手持ちヘラケズリによって調整する。

Ⅱ期の傾向と特色

須恵器坏は小形化が進み、焼成の甘い軟質須恵器が目立つが、全体的にその数は減少していく。

一方で、黒色処理の土師器坏は増加傾向にあり、食膳具の主体を占めるようになる。坏に加え、灰釉陶器の影響を受けた高台坏や皿といった新たな器形が加わる。坏は底部をヘラケズリするものと、回転糸切り未調整の個体が共存し、後者が徐々に数を増していく。また、寸法に差が見られ、大小に器形分化していたようである。

貯蔵・煮炊具は抽出個体の数が限られているため、詳細な形態の変化は不明であるが、Ⅰ期に続いてロクロ成形の小形甕や砲弾形の甕が認められる。

食膳具における形態的な特徴と器種組成から９世紀中頃から後半に比定される。

○Ⅲ期

主な遺構として13・14・19・24号住居が挙げられる。

13号住居（図36） 食膳具では黒色処理の土師器が主体となり、灰釉陶器皿（110）が認められる。坏は底部が回転糸切り未調整の個体が多数を占めるが稀にケズリ調整するものが認められる（98・99)。盤（108・109）は皿と類似するが、高台が高くなる点で２号住居（図33）の９のような皿とは区別している。106・107は体部から口縁部が欠損しており、器形が不明確であるが高台坏に分類した。110の灰釉陶器皿は重ね焼き部分を除いた底部内面にも施釉しており、痕跡は不明瞭だがハケ塗りで施釉しているものと思われる。

煮炊具では砲弾形の甕（112）が見られる。胴部上半はロクロ目を残し、下半はヘラケズリした後なでて整形し、内面下半には指圧痕が残る。

19・24号住居（図37） 土師器坏がそれぞれ１点ずつ確認された（147・154)。共に底部は回転糸切り未調整であり、底径はおよそ６cm台になる。器壁がやや厚く、154は体部にロクロ目を残す。また、体部が直線的に開いて立ち上がる逆台形となり、須恵器的な要素をもつ。このような土師器坏の出土は稀少であり、在地産ではなく搬入された外来系の土師器坏と推察される。

14号住居（図36） 食膳具14点中黒色処理の土師器坏が９点、土師器坏・皿が各１点、灰釉陶器椀が３点確認できる。黒色処理の土師器坏は全て底部が回転糸切り未調整である。口径は12cm台半ばから13cm台に収まり、寸法や形態に大きな差は認められない。123は口縁端部が外反する皿で高台をもたない。皿は器高が低く、体部が直線的に開いて立ち上がるものを皿とし、坏と区別している。124～126の灰釉陶器椀はハケ塗りによって施釉される。124は高台端部が内外面共に内傾し、丸みを帯びた三日月形となる。125・126は重ね焼き部分を除く見込み内にも薄く施釉される。高台の内面は直線的に外傾し、外面は端部が内傾する。また、126は底部外面に朱墨が付着し、転用硯として使用していたものと推定される。

Ⅲ期の傾向と特色

Ⅱ期に続いて食膳具の主体は黒色処理した土師器坏によって占められ、これまで見られた須恵器坏は確認できない。これに替わって灰釉陶器椀・皿が認められるようになり、その大半はハケ塗りの技法によって施釉される。また、底部の破片を利用した転用硯の出土も認められる。

黒色処理の土師器坏は全体的に小形化し、器高も低く口径が概ね13㎝前後の個体が多い。ただし、寸法の大きな個体も見られることから器形の分化は継続して認められる。一方で黒色処理をしない土師器坏が見られるが、その形態から在地で製作されたものではなく、搬入されたものである可能性が考えられる。

器種の組成及び灰釉陶器の形態・施釉技法から９世紀後半から末に比定される。

○まとめ

以上、食膳具の変遷に３つの画期を設けて述べた。遺物の出土量は各期にわたって平均的である。黒色処理の土師器が食膳具における主体となり、須恵器坏・高台坏にかわって、灰釉陶器が認められるようになる。また、灰釉陶器の影響を受けた土師器高台坏や皿が加わった。このように各期を通して食膳具は大きく様変わりし、変革期であったと言える。また、Ⅲ期以降の遺物が認められない点においては、この時期をもって集落の存続に関わるような大きな変化がもたらされたと推察できる。

⑤墨書・刻書・箆書（図45）

当地点では墨書９点、刻書３点、箆書16点が確認されている。刻書と箆書は土器に文字や記号などを刻む点において共通しているが、混同しやすいので分類基準を明確にしておく。

墨書（文字や記号などを墨書きしたもの）

刻書（焼成後に釘状の工具などを用いて、文字や記号を刻んだもの）

箆書（焼成前に箆状の工具などを用いて、文字や記号を刻んだもの）

以下、詳細を述べる。

墨書　全て須恵器坏の外面体部に記されている。このうち、文字として認識できるのは「市」(75・396)、「市寸」(273)、「山」(398)、「平」(227)、「中寸（？）」(266）である。遺構では10号住居で最も多く確認されている（75・396～398)。

10号住居（奈良）では「市」と書かれた土器が２点（75・396)、５号土坑（奈良）からは「市寸」と書かれた土器（273）が出土している。本遺跡一帯は、平安時代末期には「市村」という地名が認められ、中世になると「市村荘」と呼ばれる荘園が営まれるようになる。墨書の「市寸」とは、おそらくこの「市村」という地名に由来するもので、「寸」は「村」の木偏を略したものと推察できる。こうしたことから奈良時代には、すでに本遺跡一帯が「市村」という地名で呼ばれていた可能性が高い。

刻書　３点確認できるが全て23号住居からまとまって出土している。161は下部が欠損しているが「史」に類似した文字が坏の体部外面に刻まれる。163は皿の底部内面に刻まれる。「干」の上に一本横線を引いた字であるが判読が不可能である。162は高台坏の底部内面に161と163の字を組み合わせた語句「史（干)」が刻まれる。いずれも器種は内外面を黒色処理した土師器である。

箆書　16点が出土しているが、このうち文字は２点（９・399）のみであり、それ以外は「Ｖ」「＋」「×」「Ｔ」などの記号である。９は内外面黒色処理した土師器皿の底部外面に「芹」や「芽」・「茅」に類似した文字を刻むが、判読は出来ない。また、検出面から出土した須恵器壺？（399）の底部内面には「水」という字が刻まれる。内面に刻まれるため完成時は、刻まれた字を読むことができないと思われるが、製作時の目印としてつけられた

もの、あるいは呪術的な要素をもって刻まれたものと考えられる。

最も多く見られる記号は「Ｖ」であり明確なものは５点（10・75・168・169・322）出土しているが、器種は全て須恵器坏である。須恵器坏は底部をヘラ切りしたのちにナデ調整するもので、その後に底部外面に箆書している。いずれも形態が類似しており、時期的にも近いことから窯印として付けられていた可能性がある。

この他、須恵器高台坏では底部外面に「＃」(54)、「×」(351）が見られ、127は体部外面に「＋」が刻まれている。

⑥その他（転用硯・灯明皿）

転用硯　当地点では転用硯が３点（126・136・256）出土している。判断基準は器面が光沢をもつほど著しく摩滅しているもの、墨や朱墨が付着するものを転用硯とした。硯として使用したものの他、墨溜めや筆揃えも広義の転用硯として扱う。

126は灰釉陶器椀の高台部分の破片を転用したものである。高台内の中央部が摩滅して光沢をもつほどなめらかになり、朱墨が薄く付着する。また、体部を打ち欠いて高台部分が安定するように加工を施す。

136も灰釉陶器椀の高台部分の破片を転用するもので、高台内が摩滅してなめらかになる。墨が付着し、126と同様、体部を打ち欠いて安定させている。

256は底部が回転糸切り未調整の須恵器坏だが、内面に朱墨が付着する。その範囲は底部から体部下半まで、一部口縁付近にも付着が認められる。しかし明確な摩滅は見られず、朱墨を擦る目的で使用したものではないようである。体部下半まで朱墨が付着することからも朱墨溜めとして使用していた可能性が高い。

灯明皿　土器に煤や油脂滓状の付着物が認められるものを灯明皿として取り上げる。当地点では須恵器坏（35・150)、土師器坏（133・208・229)、土師器盤（381)、土師器鉢？（25）の計７点にその痕跡が認められた。須恵器坏、土師器坏はともに内外面体部や口縁にかけて油脂滓や煤の付着が見られる。

381の土師器盤は脚部が欠損しているが脚部にはヘラによって透孔が切り開けられていたものと思われる。体部内面と口縁の一部に油脂滓様の炭化物が付着しており、灯明具もしくは火にまつわる事柄に使用していたと推察される。

25は内面が黒色処理された土師器鉢？の底部だが、外面には厚く油脂滓が付着する。おそらく底部の平面を利用して灯明具として転用したものと思われる。

(2) 土製品（図46）

残存が比較的良好なものを実測対象とし、図化を行った。掲載している14点の他、羽口と思われる破片が１点、使途不明な土製品が４点確認された。

土玉（400・401）　２点確認された。400は全体的に黒色を帯びた土錘形である。401は直径1.4㎝の丸玉である。共に摩耗のため整形の状態が不明である。

ミニチュア土器（402～404）　全て手づくねによって成形されているが、402は腰部を丁寧に削り、体部には指圧痕が残る。403は底部を欠損しているが体部が丸みを帯びた形状になる。外面を磨き、内面はなでて整形される。404は底部のみの残存であるが、内外面共にハケ状の工具によってなでられている。

把手状土製品（405）　土師質でＵ字形だが作りは粗雑であり、器面を整えた痕跡は認められない。

羽口 (406)　先端部のみの残存だが、器面の状態は比較的良好である。径が2.1㎝と小型で、先端部に近づくにつれて滓が厚く付着する。

支脚（407～413）７点出土している。このうち、407・408の２点が完形である。407は20号住居のカマドから出土したもので、粘土紐を輪積みして成形した痕跡が残る。このような輪積み痕は同一遺構から出土した411でも認められる。407の方がわずかに底径が大きいが、類似した形態になるものと思われる。408は上部をわずかに欠くがほぼ完形と言える。底部には篦状の工具で押しつけたような痕が残る。いずれの個体も被熱により器面が著しく剥離している。

（3）石製品（図46）

人為的な加工が行われ、製品として使用していたことが明確なものを選出し、図化した。主に砥石が出土している。この他に敲石、ミガキ石も確認されたが、写真のみの掲載である。

砥石（414～421）全８点の内、手持ち用の砥石が７点（414・415・417～421）、置き砥が１点（416）出土している。使用石材は凝灰岩が５点で最も多く、砂岩が２点、珪質頁岩が１点である。

414は珪質頁岩の自然石をそのまま利用したもので、表裏面の２面のみを使用し、無数の細かい線状痕が残る。415は欠損した端部以外の５面を使用している。いずれも使用面が平滑であり、線状痕などはみられない。416は端部以外の４面を使用している。Ｕ字状の溝痕が複数本確認でき、使用面全てに金属製の刃物を当てたと思われる線状痕が残る。大きさと形態から置き砥であると推察される。417は６面全てを使用面とする。このうち、表面と片側面の２ヶ所にはＵ字状の溝痕が数本認められる。416と同様、砂岩を使用している。418は片側面部から上端部にかけてＬ字形に孔が貫通しており、紐などを通して使用していたものと思われる。６面全てを使用し、表裏面と両側面は滑らかになっている。一方、上下端部には平滑な使用痕はなく、粗い表面に刃物傷とみられるＶ字状の線状痕を数本残す。419は断面形が六角形を呈し、六角柱状になる。両端部以外の６面と、欠損部位を再使用した１面を合わせた７面を使用している。420は上端部に向かって先細りになり、平面三角形を呈す。両端部と片側面部以外の３ヶ所を使用しており、Ｕ字形の溝痕と線状痕が見られる。421は断面台形を呈し両端部以外の６面を使用している。側面にはＵ字状溝痕を数カ所もつ。

敲石（写真のみ掲載423・424）423は現状で全長が5.7㎝、幅は最大2.6㎝、最小0.9㎝、厚みは最大で1.3㎝となり、半分程度欠損していると思われるが、小形のものである。端部には敲打痕が残る。424は全長16.0㎝、幅6.8㎝で側面片側に粗い敲打痕が残る。

ミガキ石（写真のみ掲載422）直径が最大で6.5㎝のやや偏平な球状を呈する。材質は石英斑岩と思われ、表面は光沢を持つほど滑らかで、使用した際に生じる擦痕などは見受けられない。

（4）金属製品・他（表４）

鉄製品と鉄滓が出土している。鉄製品はおよそ144.4ｇ出土している。腐食により、原形をとどめたものがなく、刀子片と思われるものが４点、釘状の製品が１点出土している。鉄滓は292.7ｇ確認された。

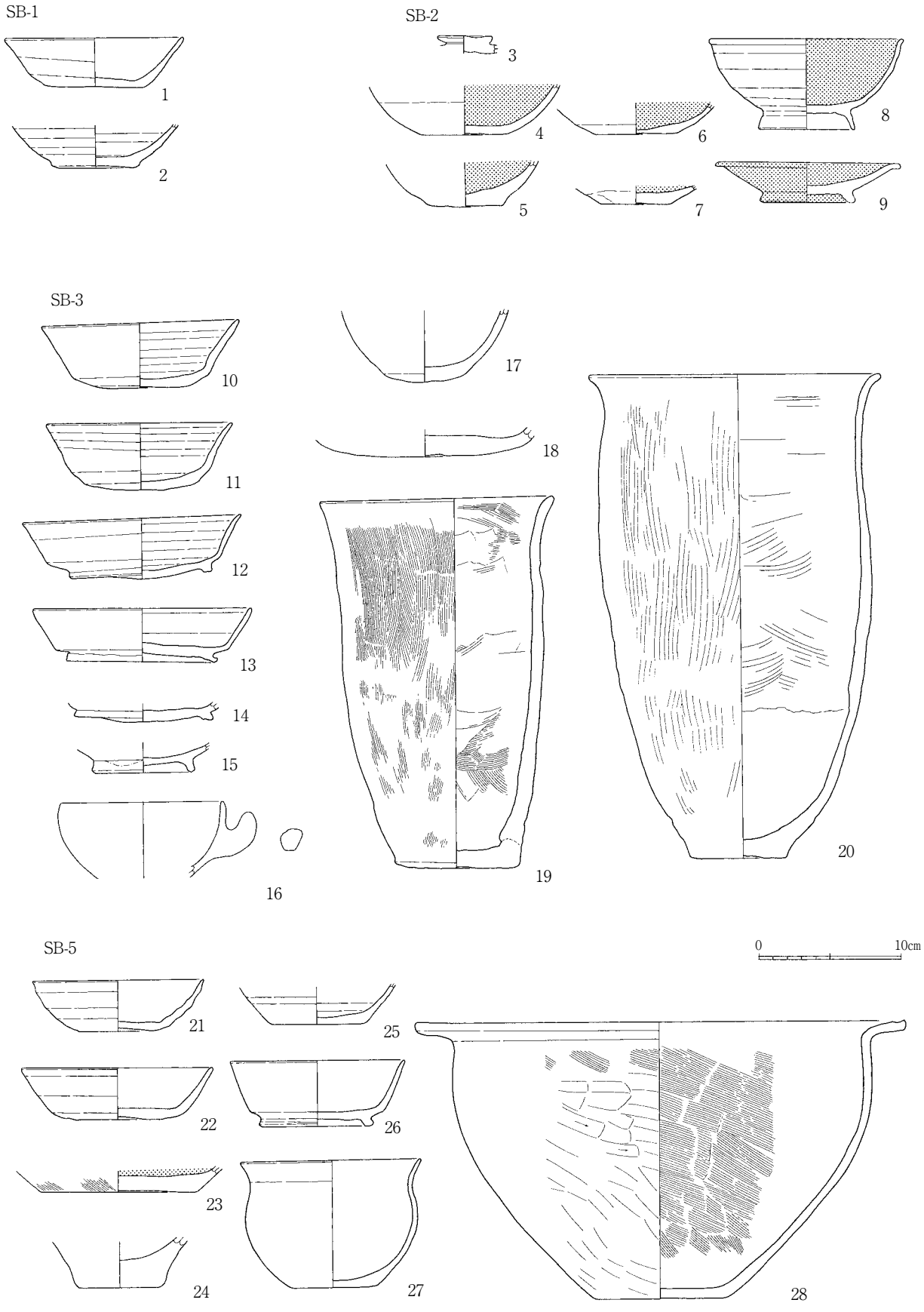


図33　SRTH 地点　遺物実測図①（１：４）

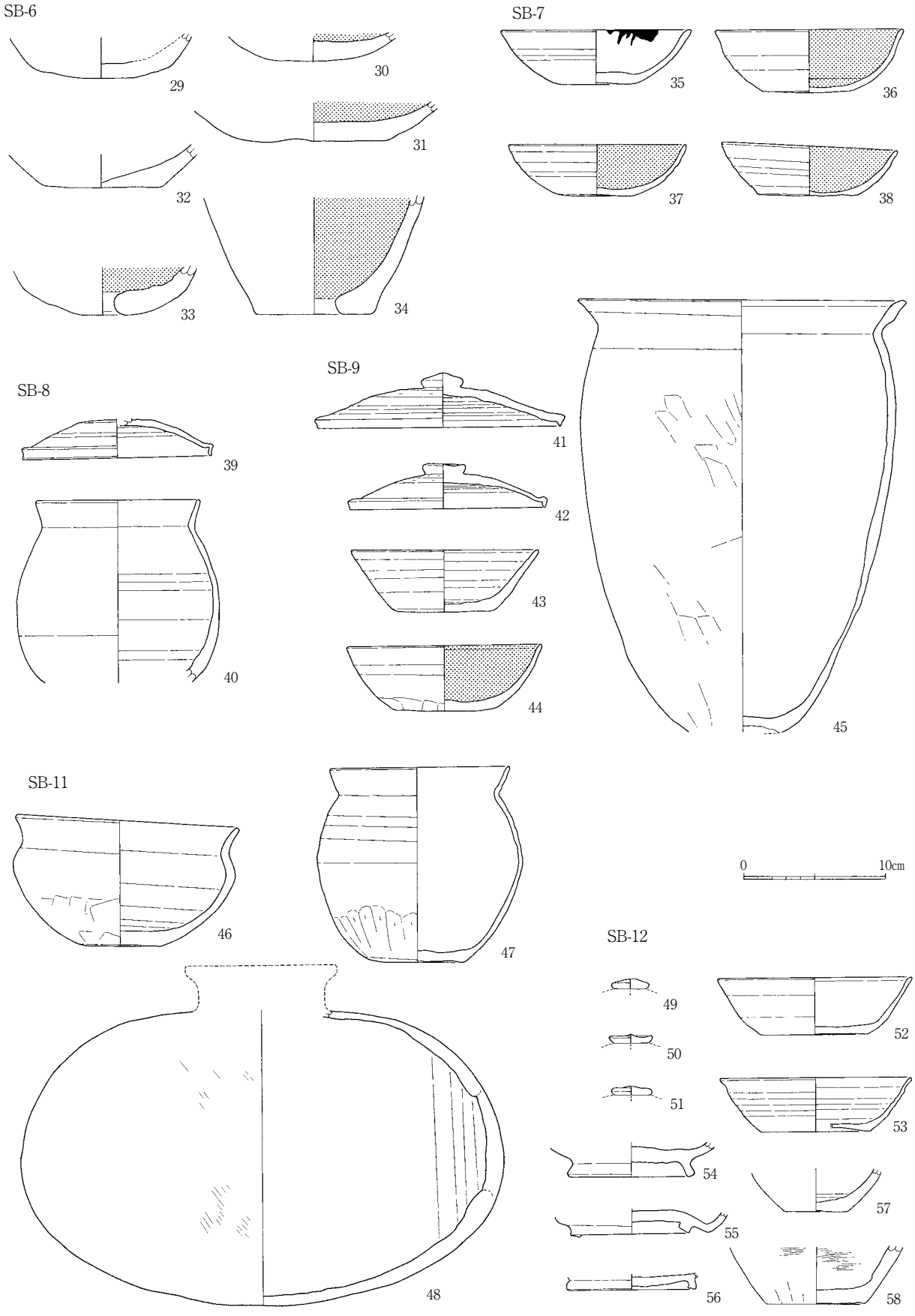


図34　SRTH 地点　遺物実測図②（１：４）

SB-10

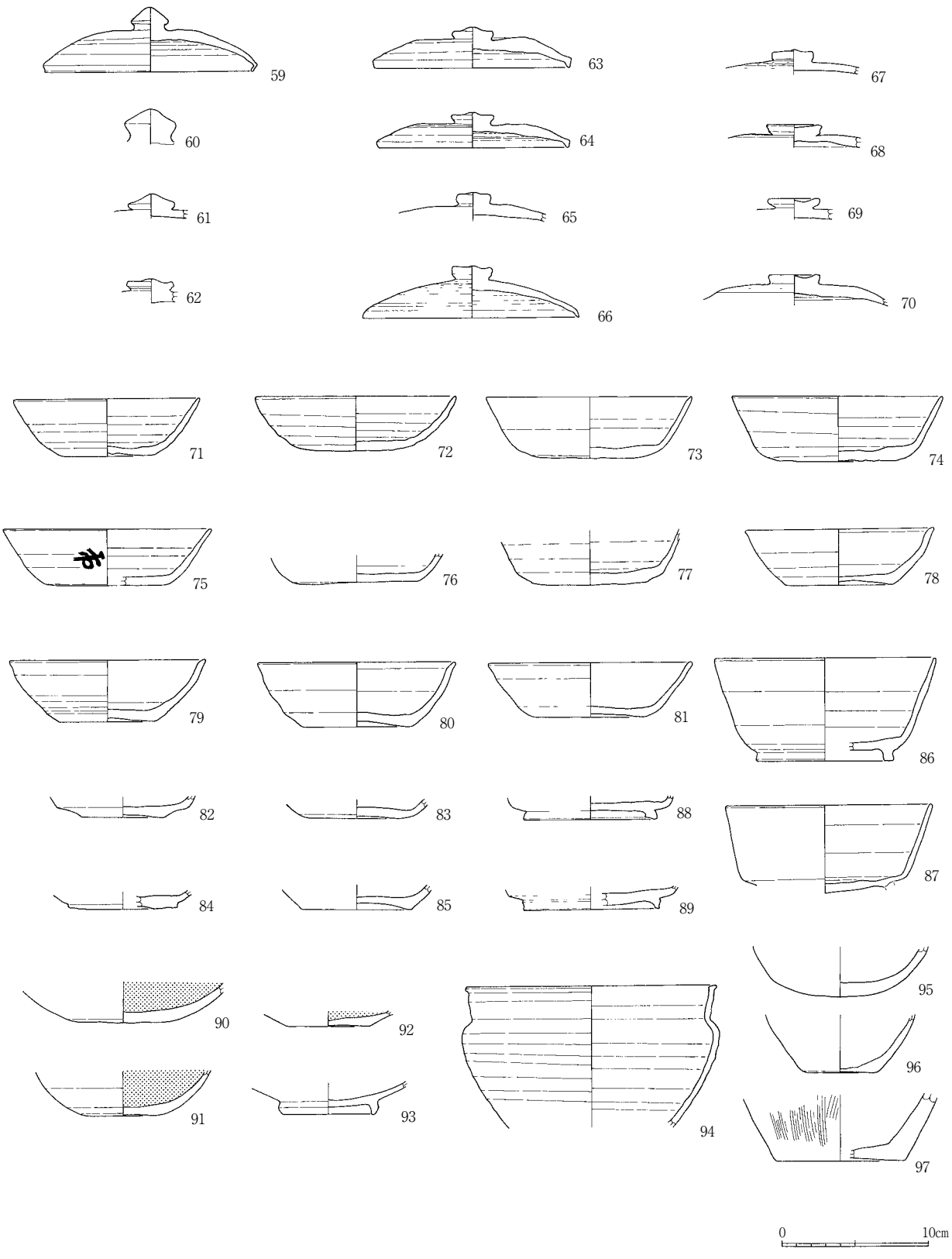


図35　SRTH 地点　遺物実測図③（１：４）

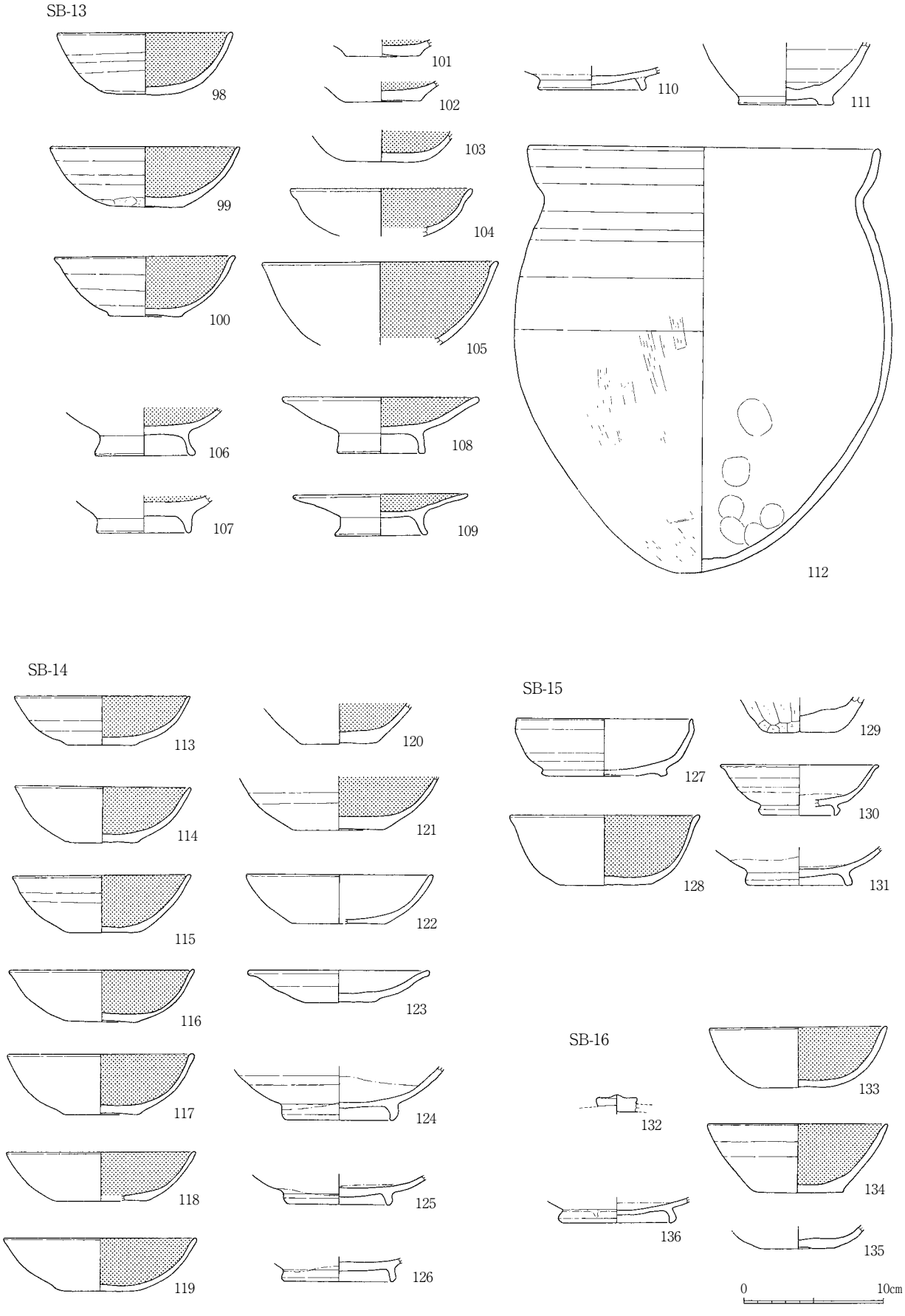


図36　SRTH 地点　遺物実測図④（１：４）

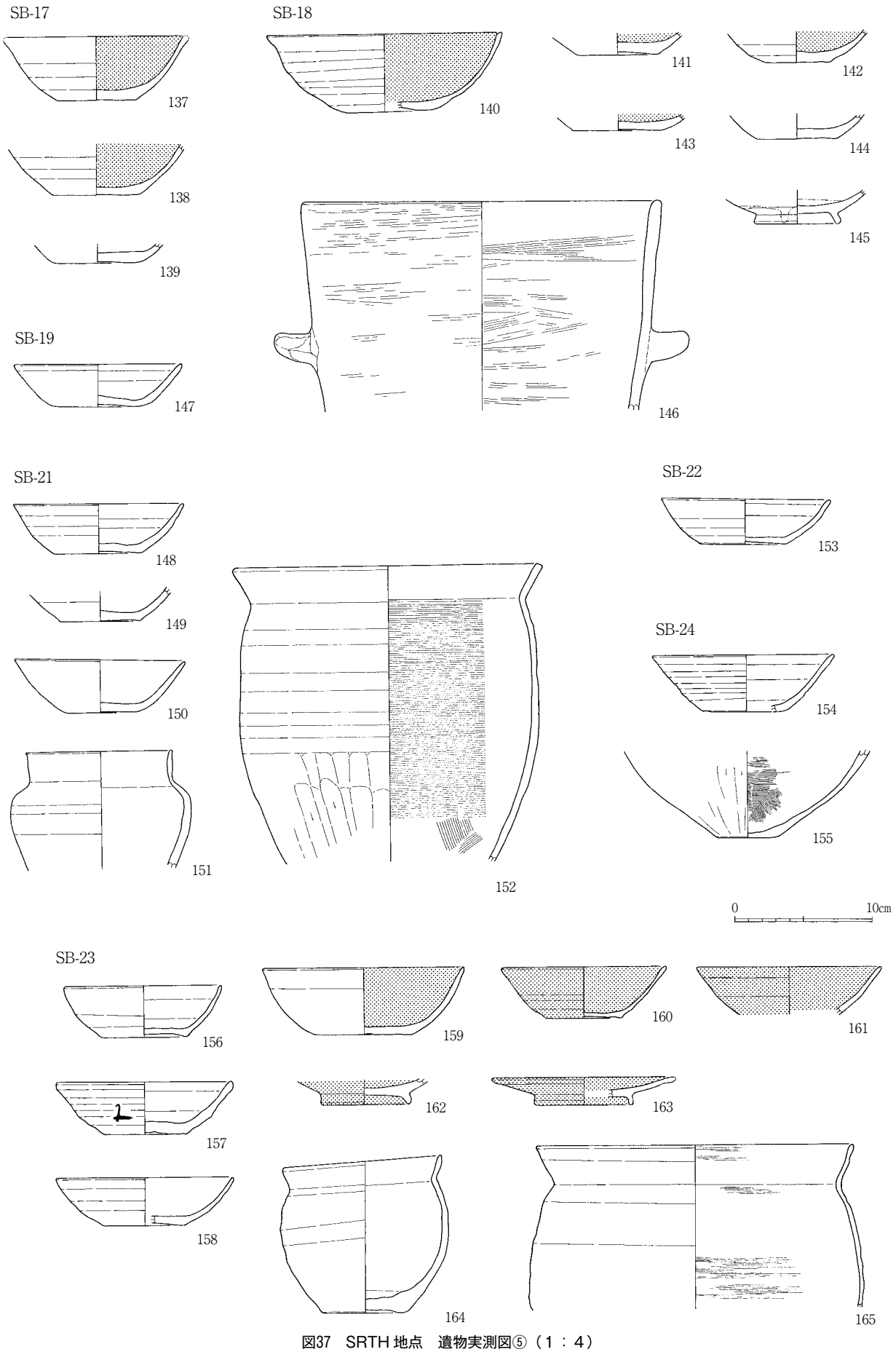


図37　SRTH 地点　遺物実測図⑤（１：４）

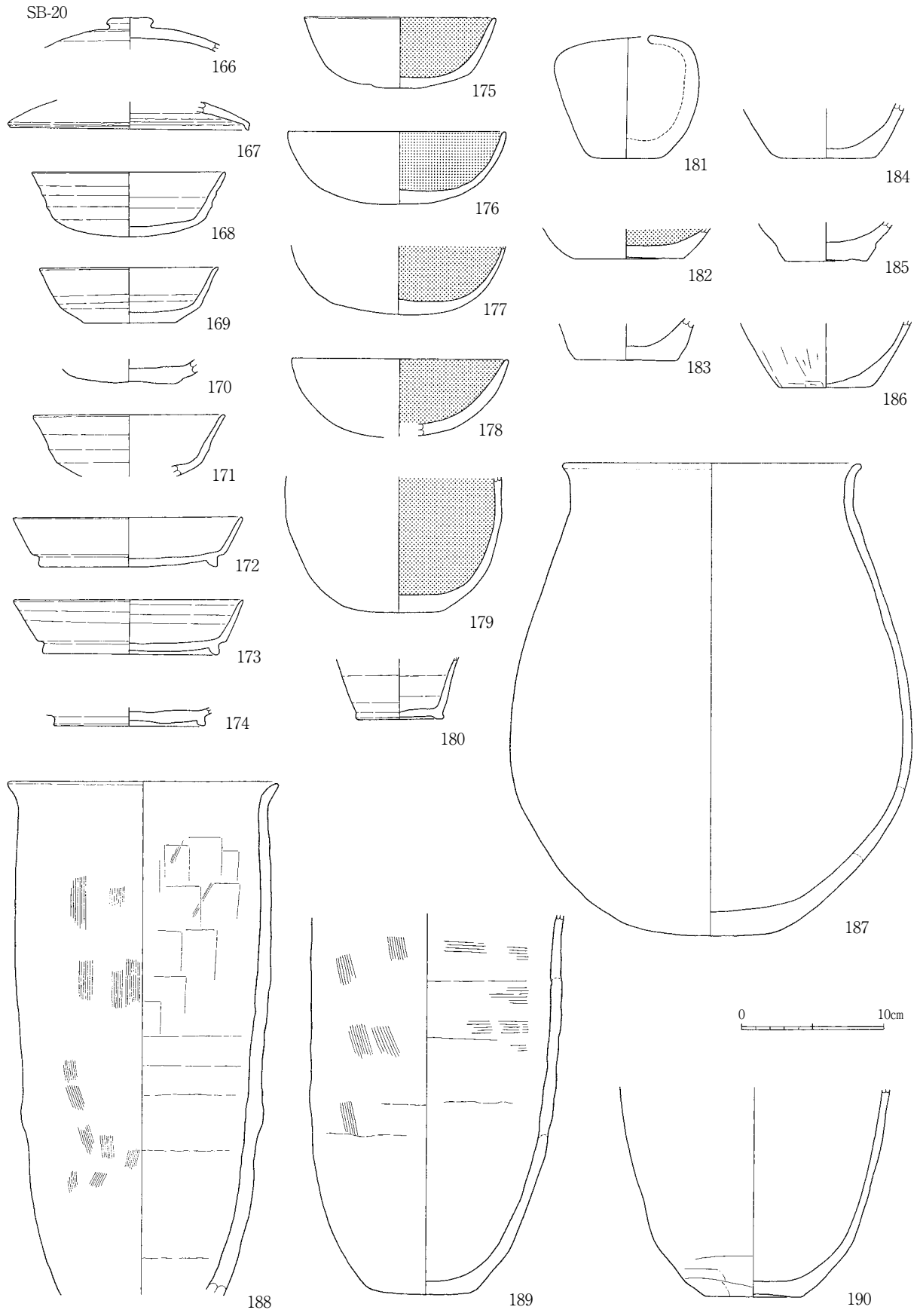


図38　SRTH 地点　遺物実測図⑥（１：４）

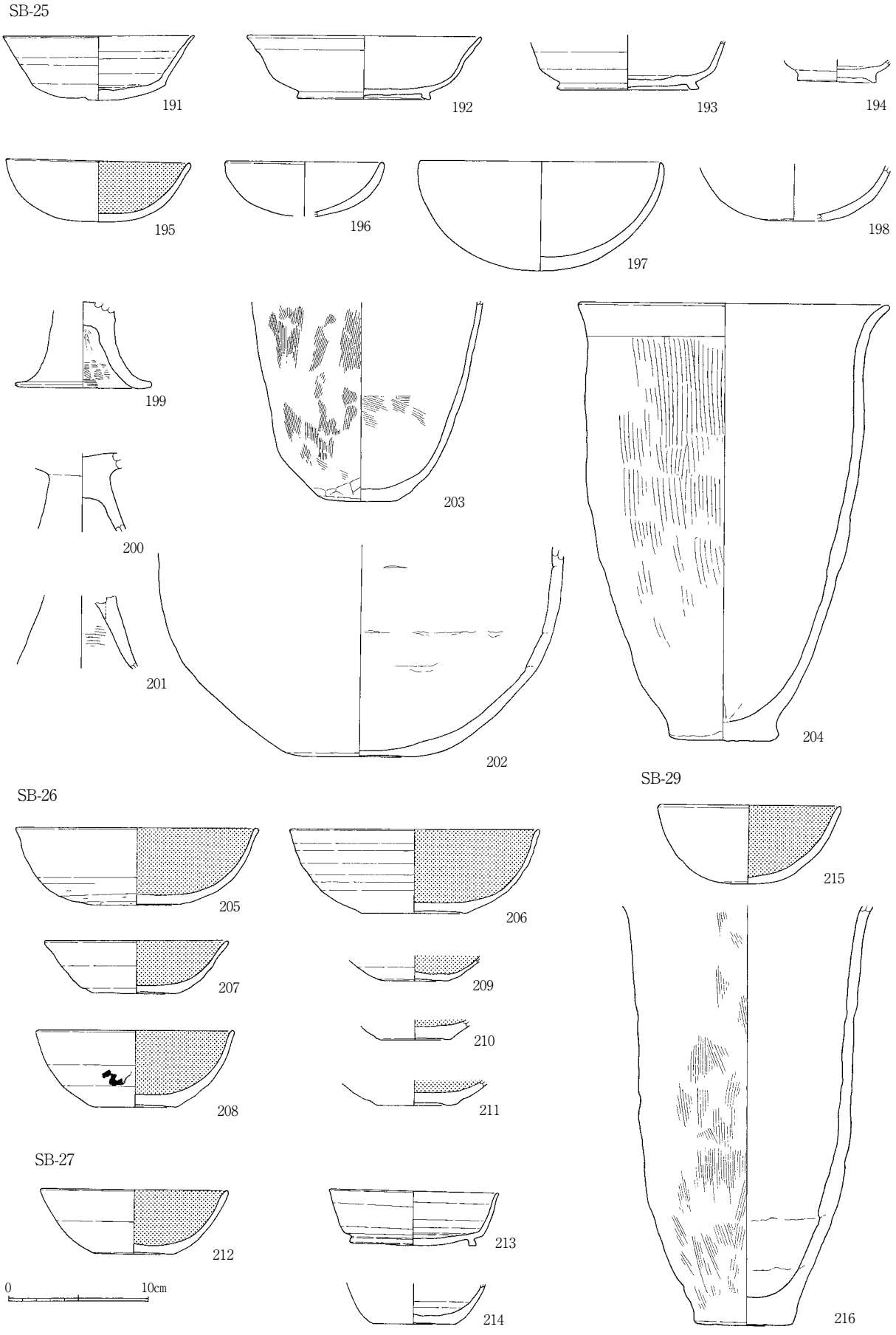


図39　SRTH 地点　遺物実測図⑦（１：４）

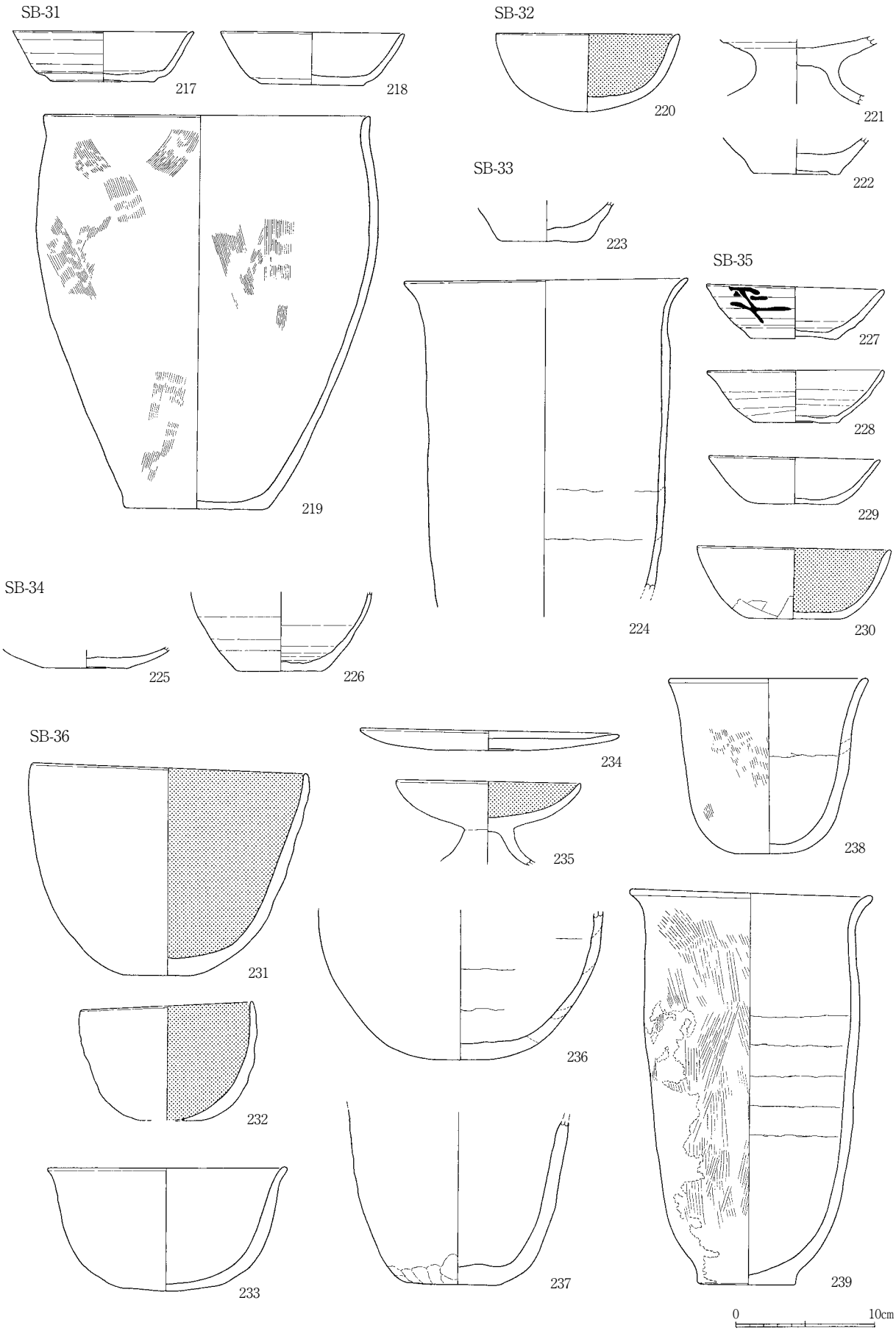


図40　SRTH 地点　遺物実測図⑧（１：４）

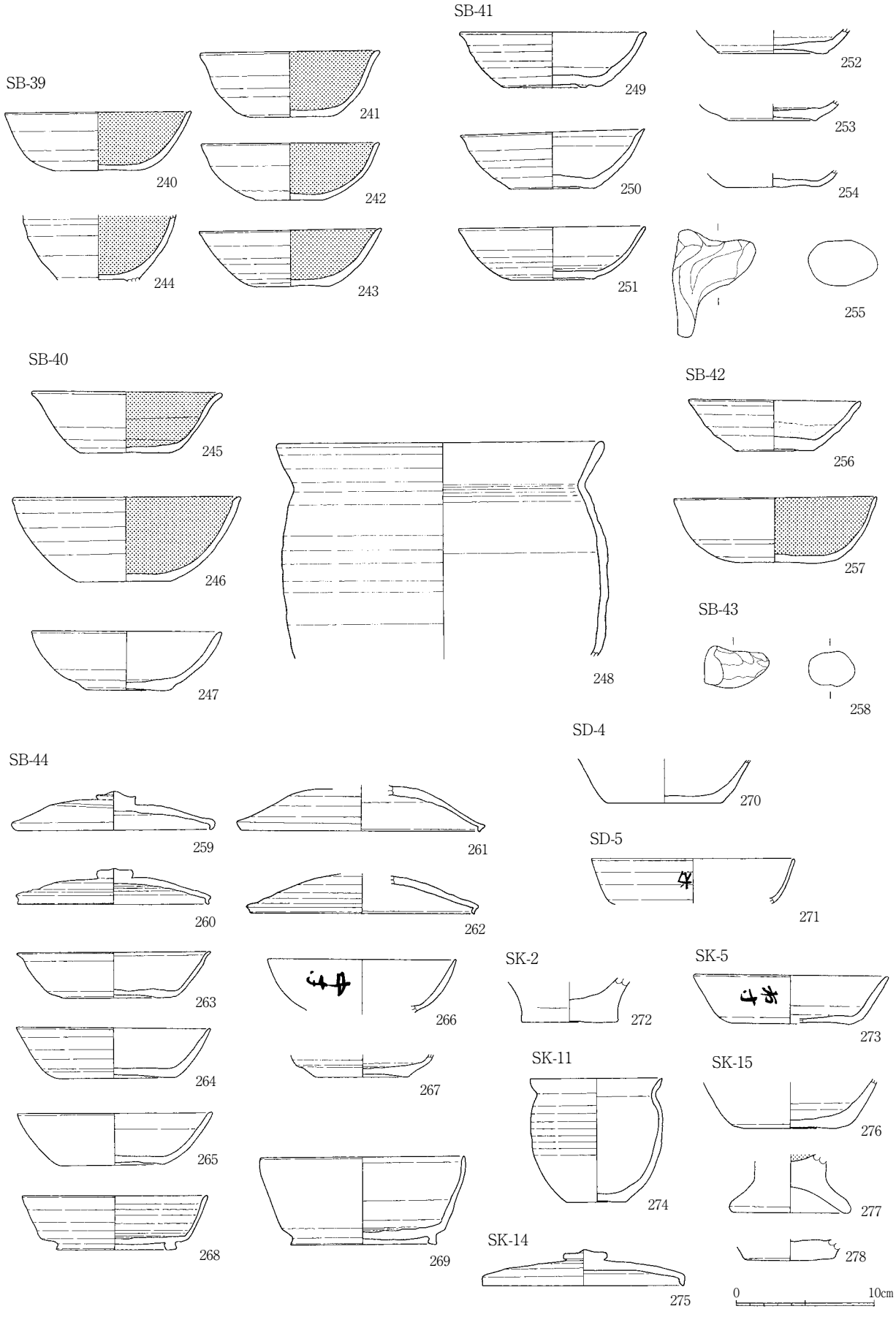


図41　SRTH 地点　遺物実測図⑨（１：４）

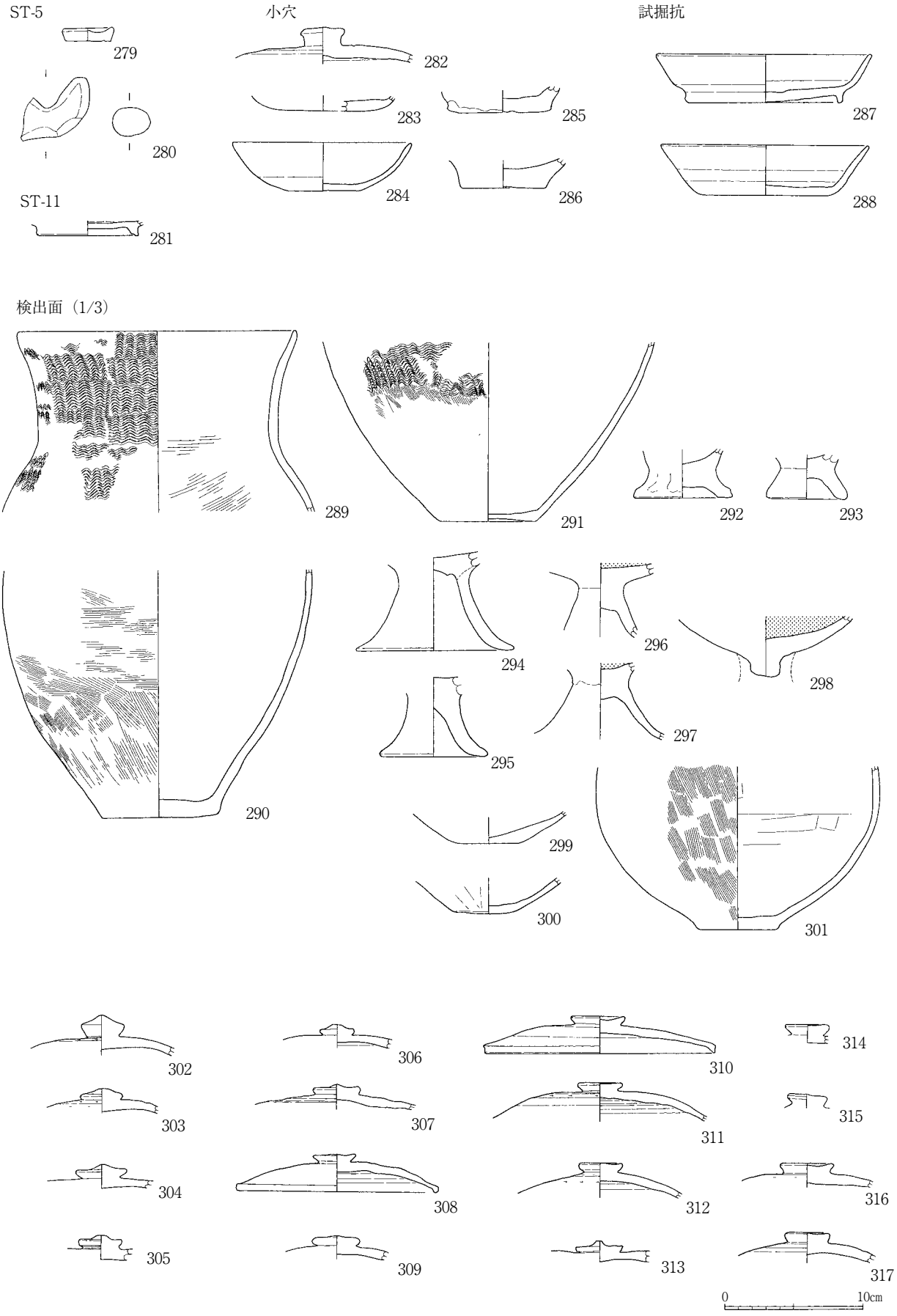


図42　SRTH 地点　遺物実測図⑩（１：４）

検出面（2/3）

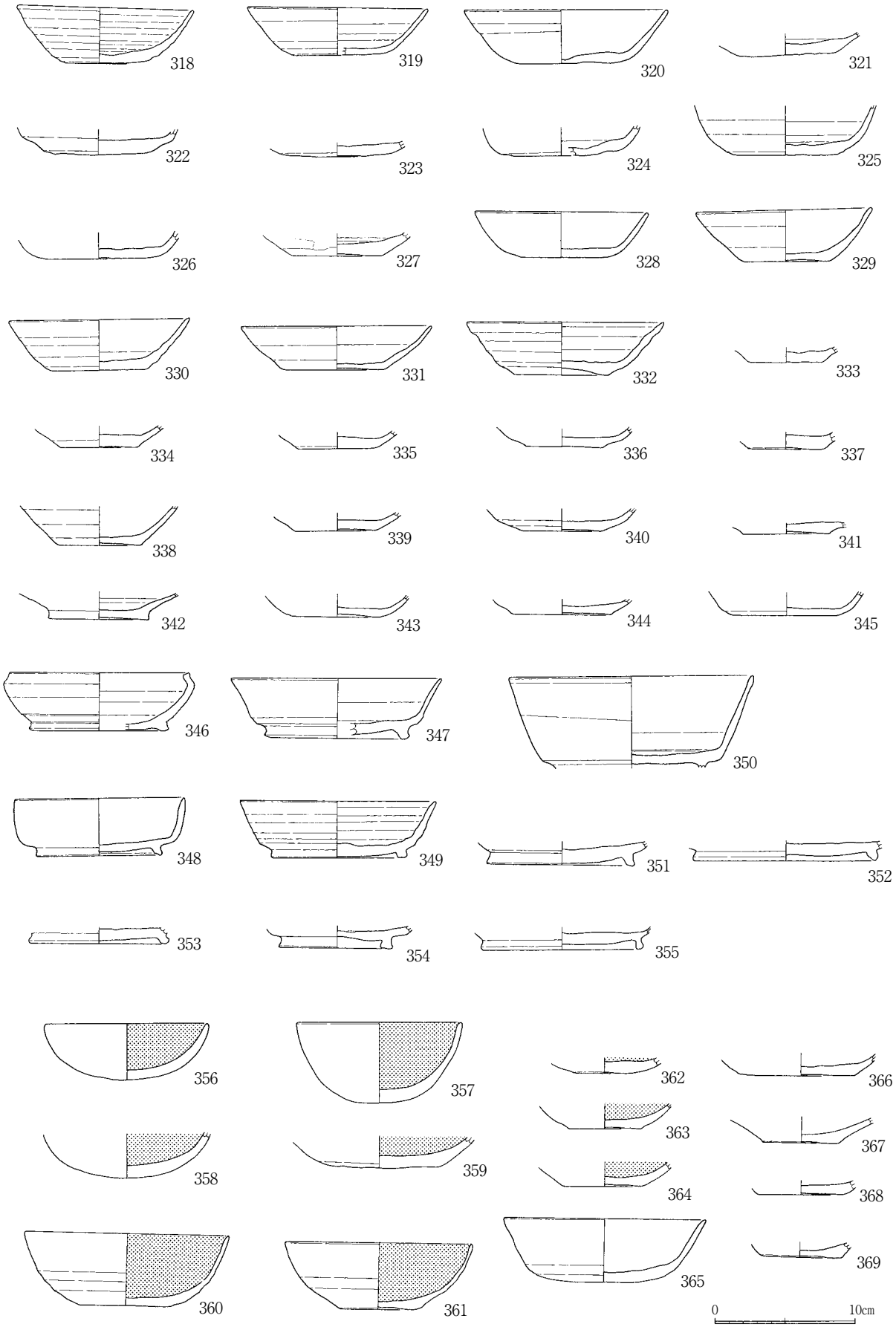


図43　SRTH 地点　遺物実測図⑪（１：４）

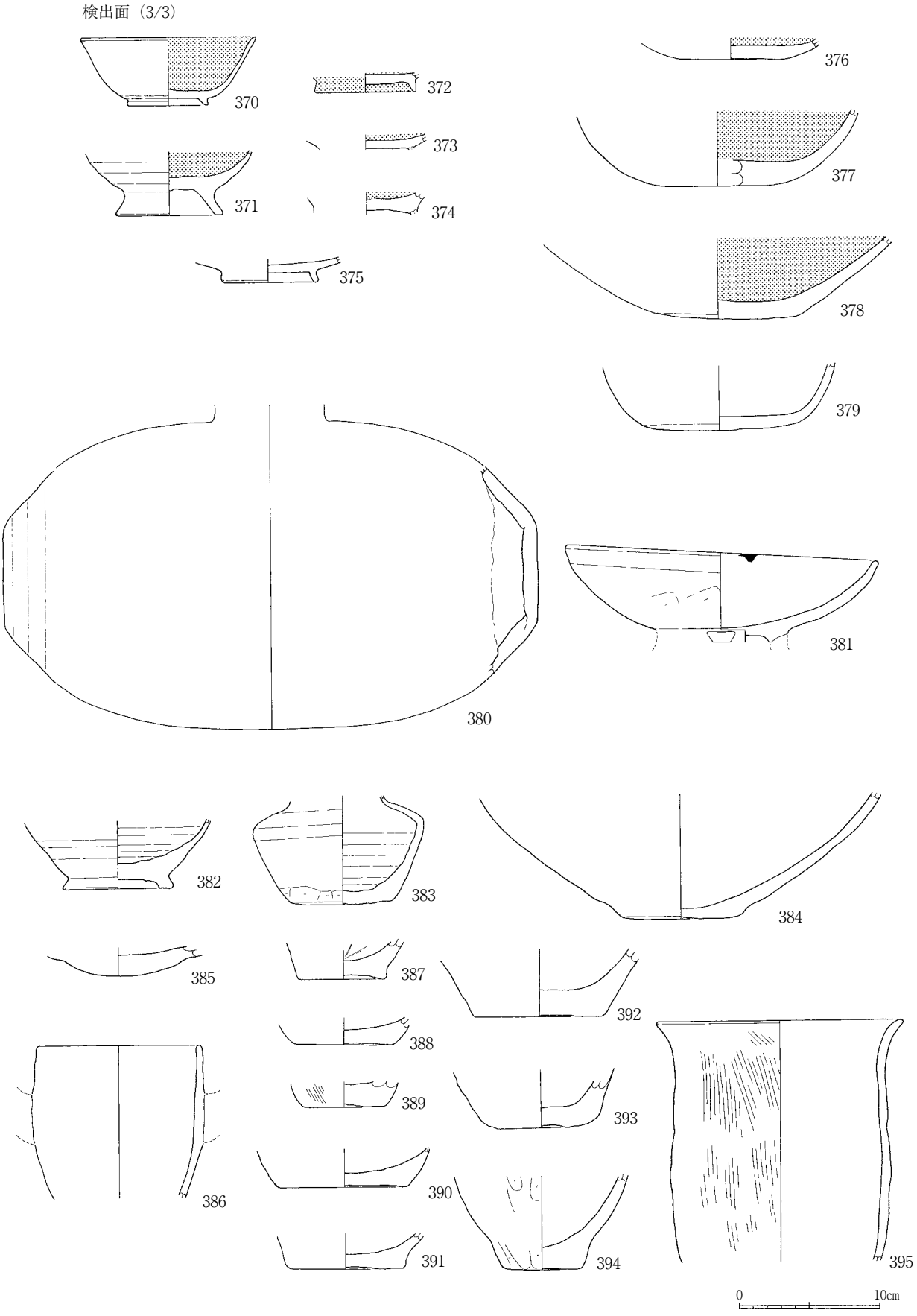


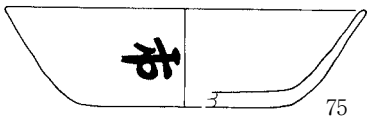
図44　SRTH 地点　遺物実測図⑫（１：４）

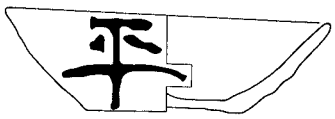
墨書

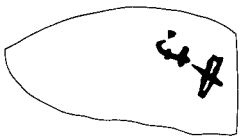
396

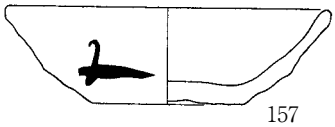
397

398

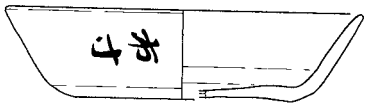

75


227


266


157

271


273

刻書

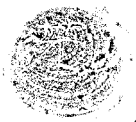
161

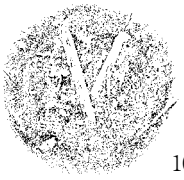
162

163

篦書

5


9


10

54

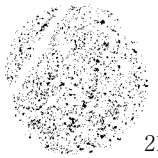
75

127

129

168

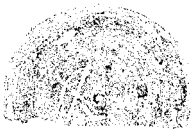
169

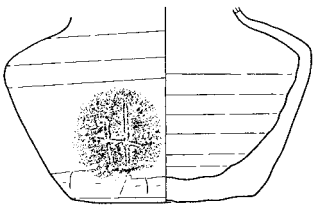

212

226

322

334

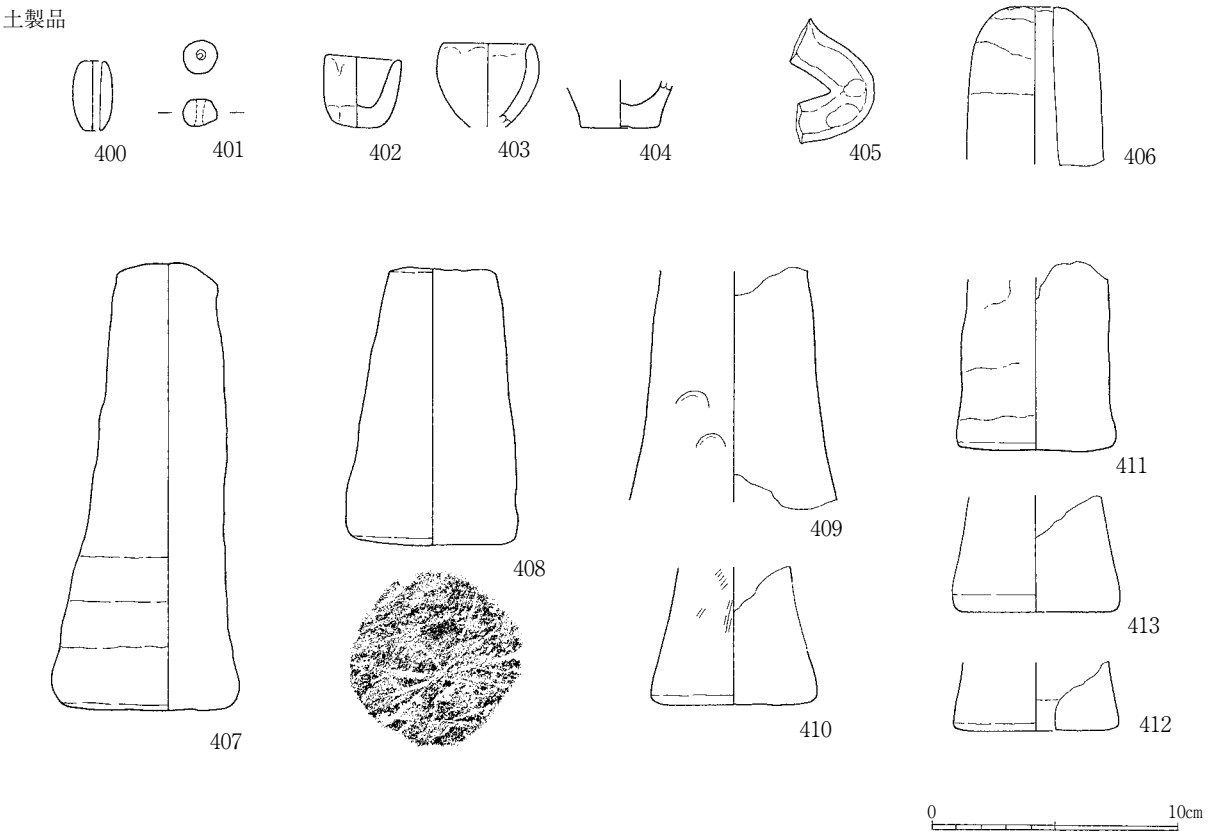

351


383

399

図45　SRTH 地点　遺物実測図⑬（１：３）

土製品



石製品

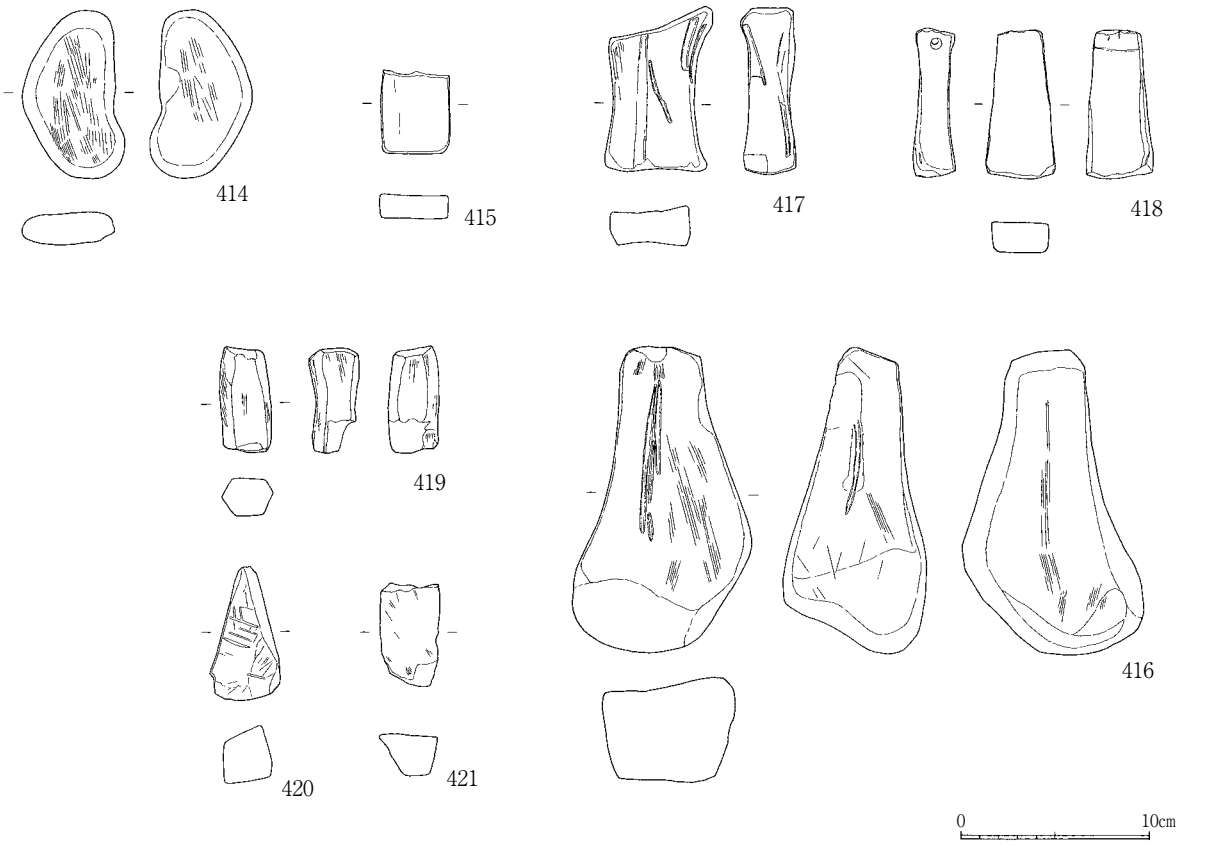


図46　SRTH 地点　遺物実測図⑭（土製品１：３、石製品１：４）

表２　若里市民文化ホール地点（SRTH）遺物一覧表

遺構名	記号	地区	時代（期）	土器			土製品	石製品	金属製品	その他	作為的混入品	遺物注記（整理№）
				重量（g）	実測	特記						
１号住居	SB−１	A−１	平安（Ⅱ）	660	2							SB1−1・2
２号住居	SB−２	A−２	平安（Ⅱ）	11,170	7	篦書	土玉		鉄片			SB2−1～7
３号住居	SB−３	A−２	奈良	11,990	11	篦書	支脚・不明品					SB3−1～7
４号住居	SB−４	A−２	奈良	170	0							SB4
５号住居	SB−５	A−２	平安（Ⅰ）	13,940	8	灯明？	土玉					SB5−1～6
６号住居	SB−６	A−２	古墳（後）	6,820	6		支脚・把手	ミガキ石				SB6
７号住居	SB−７	B	平安（Ⅱ）	1,900	4	灯明皿						SB7−1～3
８号住居	SB−８	B	平安（Ⅰ）	1,370	2							SB8−1・2
９号住居	SB−９	B	平安（Ⅰ）	7,150	5							SB9−1・№1～4
10号住居	SB−10	B	奈良	32,633	39	墨書・篦書	不明品	軽石５	鉄片	漆？		SB10−1～10・P1～4
11号住居	SB−11	B	平安（Ⅰ）	4,350	3			砥石				SB11−1～3・№1～4
12号住居	SB−12	B	平安（Ⅰ）	6,850	10	篦書			鉄滓			SB12−1～4
13号住居	SB−13	B	平安（Ⅲ）	15,510	15				鉄片	骨片・炭化物		SB13−1～4
14号住居	SB−14	B	平安（Ⅲ）	7,840	14	転用硯	ミニチュア		鉄片			SB14−1～4・№1～3
15号住居	SB−15	B	平安？	4,370	5	篦書						SB15−1・№1
16号住居	SB−16	B	平安（Ⅲ）	3,400	5	転用硯・灯明皿						SB16−1・№1～3
17号住居	SB−17	B	平安（Ⅲ）	2,610	3				鉄滓	骨片		SB17−1～3・P1～3
18号住居	SB−18	B	平安（Ⅲ）	10,230	7			黒曜石砕片				SB18−1～3・№1～3
19号住居	SB−19	B	平安（Ⅲ）	420	1							SB19−1・2
20号住居	SB−20	B	奈良	38,363	25	篦書	支脚			粘土塊		SB20−1～15・P1～9
21号住居	SB−21	B	平安（Ⅱ）	6,920	5	灯明皿			鉄片・鉄滓			SB21−1～5
22号住居	SB−22	B	平安（Ⅱ）	120	1							SB22−№1
23号住居	SB−23	B	平安（Ⅱ）	6,055	10	墨書・刻書						SB23−1～5・P1・2
24号住居	SB−24	B	平安（Ⅲ）	2,010	2							SB24−1～3
25号住居	SB−25	B	奈良	16,560	14		ミニチュア	砥石		骨片		SB25−1～6・№1・2
26号住居	SB−26	B	平安（Ⅱ）	2,210	7	灯明皿						SB26
27号住居	SB−27	B	平安（Ⅰ）	1,480	1	篦書						SB27
28号住居	SB−28	D	奈良	2,610	2							SB28−1～5
29号住居	SB−29	D	奈良	945	2					骨片		SB29−1～5
30号住居	SB−30	D	古墳（後）	6,904	0							SB30−1～5
31号住居	SB−31	E−１	平安（Ⅰ）	1,830	3							SB31−1～3
32号住居	SB−32	E−２	奈良	3,740	3					馬歯		SB32−1・2
33号住居	SB−33	E−２	奈良	2,190	2							SB33−1・2
34号住居	SB−34	E−４	平安（Ⅲ）	1,880	2	篦書			鉄片			SB34
35号住居	SB−35	E−４	平安（Ⅱ）	2,520	4	墨書・灯明皿		砥石				SB35−1・2
36号住居	SB−36	E−３	古墳（後）	10,530	9			敲石				SB36−1～5・№1・2
37号住居	SB−37	E−３	平安（Ⅱ）	300	0							SB37
38号住居	SB−38	E−３	平安（Ⅰ）	1,360	0				鉄片			SB38−1～3
39号住居	SB−39	E−３	平安（Ⅲ）	3,340	5							SB39−1・2・№1・2
40号住居	SB−40	E−３	平安（Ⅱ）	2,970	4		支脚					SB40−1・2・№1・2
41号住居	SB−41	E−３	平安（Ⅱ）	3,960	7			砥石				SB41−1～4・№1
42号住居	SB−42	E−３	平安（Ⅱ）	3,060	2	転用硯	羽口・不明品					SB42−1～3・№1
43号住居	SB−43	E−３	平安（Ⅱ）	2,520	1				鉄片			SB43−1・2
44号住居	SB−44	E−３	平安（Ⅰ）	9,070	11	墨書		砥石・敲石	鉄片			SB44−1～4
１号溝	SD−１	A−２		20	0							SD1
２号溝	SD−２	B		3	0							SD2
３号溝	SD−３	B		70	0							SD3
４号溝	SD−４	B	奈良	85	1							SD4
５号溝	SD−５	B	奈良	80	1	墨書						SD5
６号溝	SD−６	B		360	0							SD6
７号溝	SD−７	B		30	0							SD7
８号溝	SD−８	B		20	0							SD8
９号溝	SD−９	B	奈良	80	0							SD9
10号溝	SD−10	D		420	0							SD10
11号溝	SD−11	D		25	0							SD11
12号溝	SD−12	E−３		90	0							SD12

遺構名	記号	地区	時代（期）	土器			土製品	石製品	金属製品	その他	作為的混入品	遺物注記（整理№）
				重量（g）	実測	特記						
13号溝	SD-13	E-3	奈良	980	0					骨片		SD13
14号溝	SD-14	E-3		140	0							SD14
15号溝	SD-15	E-3	奈良	420	0							SD15
16号溝	SD-16	E-3	奈良	300	0							SD16
1号土坑	SK-1	A-1		840	0						石製品	SK1
2･3号土坑	SK-2･3	A-2		190	1					炭化物		SK2
4号土坑	SK-4	B		120	0							SK4
5号土坑	SK-5	B	奈良	233	1	墨書						SK5
6号土坑	SK-6	B	奈良	160	0	墨書（盗難）						SK6
7号土坑	SK-7	B	奈良	830	0					骨片		SK7
8号土坑	SK-8	B	奈良	300	0							SK8
9号土坑	SK-9	B		10	0							SK9
10号土坑	SK-10	B		3	0							SK10
11号土坑	SK-11	B	平安	1,417	1							SK11
12号土坑	SK-12	B	奈良	640	0							SK12
13号土坑	SK-13	B	奈良	80	0							SK13
14号土坑	SK-14	B	奈良	580	1							SK14
15A号土坑	SK-15A	B	奈良	630	2					骨片		SK15A
15B号土坑	SK-15B	D	奈良	230	1							SK15B
16号土坑	SK-16	D		60	0							SK16
17号土坑	SK-17	D	奈良	670	0							SK17
18号土坑	SK-18	D		10	0							SK18
19号土坑	SK-19	D		20	0							SK19
20号土坑	SK-20	D		50	0							SK20
21号土坑	SK-21	D	奈良	1,310	0							SK21
22号土坑	SK-22	D	平安	955	0							SK22
23号土坑	SK-23	E-4	奈良	260	0							SK23
24号土坑	SK-24	E-3	奈良	540	0							SK24
25号土坑	SK-25	E-3	奈良	160	0							SK25
26号土坑	SK-26	E-3	平安	100	0							SK26
0号建物	ST-0	A-2	平安？	0	0							
1号建物	ST-1	B	奈良	313	0							ST1-1・P1～9
2号建物	ST-2	B		80	0							ST2-P1
3号建物	ST-3	B		145	0							ST3-P2～10
4号建物	ST-4	B		43	0							ST4-P1～8
5号建物	ST-5	B	奈良	131	2							ST5-P2～12
6号建物	ST-6	B		20	0							ST6-P3
7号建物	ST-7	E-1		0	0							
8号建物	ST-8	D		12	0							ST8-P1～6
9号建物	ST-9	D		10	0							ST9-P2・3
10号建物	ST-10	D		1,362	0					骨片		ST10-P1～5
11号建物	ST-11	E-3	奈良	700	1							ST11
12号建物	ST-12	E-3		20	0							ST12
13号建物	ST-13	E-3	奈良	240	0							ST13
試掘坑A区下層	T	A-1･2	縄文～弥生？	70	0						石器･剥片･砥石	T-A1下・A2下
試掘坑A区上層	T	A-1･2	弥生～平安	940	0							T-A1・2
試掘坑B区	T	B	弥生～平安	990	2							T-B1
小穴A区	Pi	A-1･2 C	縄文～弥生？	381	1						石器･剥片･種子堅果･炭化物	Pi-A1・A2・C
小穴B･E-3区	Pi	B E-3	弥生～平安	6,135	4							Pi-1～46・E3
検出面A･C区下層	検	A-1･2 C	縄文～弥生？	338	0						石器･砥石	検A1・A1下 検A2-3・検C
検出面A-2区	検	A-2	弥生～平安	5,940	2		支脚			骨片		検A2-1・2・4
検出面B･D・E区	検	B･D E-1~3	弥生～平安	99,691	105	篦書･灯明？	羽口	砥石･剥片	鉸具･鉄滓	骨片		検B1・2 検E・E2・E3
合計				407,912	395							

表３　若里市民文化ホール地点　（SRTH）　土器観察表

図版	番号	出土遺構		遺物注記（整理No.）	抽出No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法（cm）			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
図33	1	SB-1	カマド付近	SB1-2	1	平安	須恵器	坏	全形	1/2	12.5	7.0	3.5	糸切	○
	2	SB-1	北壁	SB1-1	1	平安	須恵器	坏	底部	2/3		6.0		糸切	
	3	SB-2	覆土下層	SB2-2	4	平安	須恵器	蓋	つまみ	2/3				つまみ径3.9	
	4	SB-2	覆土下層	SB2-2	3	平安	土師器	坏	底部	2/3		6.0		糸切　内黒	
	5	SB-2	覆土下層	SB2-2	2	平安	土師器	坏	底部	1/1		5.5		糸切　内黒　篦書	
	6	SB-2	覆土下層	SB2-2	1	平安	土師器	坏	底部	1/2		5.9		糸切　内黒	
	7	SB-2	覆土ほか	SB2-1	1	平安	土師器	坏	底部	2/3		5.0		ケズリ　内黒	
	8	SB-2	床面	SB2-3	1	平安	土師器	高台坏	全形	1/1	13.6	6.7	6.3	内黒	
	9	SB-2	覆土下層	SB2-2	5	平安	土師器	皿	全形	1/1	13.0	6.8	2.8	内外黒　篦書	
	10	SB-3	床面直上	SB3-3A	1	奈良	須恵器	坏	全形	2/3	13.9	6.9	4.5	篦切　篦書	○
	11	SB-3	覆土	SB3-2D	1	奈良	須恵器	坏	全形	2/3	13.1	8.1	4.7	篦切→ナデ	○
	12	SB-3	覆土	SB3-2J	2	奈良	須恵器	高台坏	全形	2/3	15.4	10.0	4.2	回転ケズリ	○
	13	SB-3	覆土	SB3-2J	1	奈良	須恵器	高台坏	全形	1/2	15.4	10.6	3.7	回転ケズリ	○
	14	SB-3	覆土下層	SB3-1	2	奈良	須恵器	高台坏	底部	1/1		9.8		回転ケズリ	
	15	SB-3	覆土下層	SB3-1	1	平安	灰釉	椀	底部	1/2		7.2		糸切　刷毛塗り？	
	16	SB-3	覆土	SB3-2C	1	奈良	土師器	把手付き坏	把手	1/1	11.4			ミガキ	
	17	SB-3	覆土	SB3-2K	2	奈良	土師器	鉢	底部	2/3		5.8		ケズリ？	
	18	SB-3	覆土	SB3-2K	1	奈良	土師器	鉢	底部	2/3				ミガキ	
	19	SB-3	カマド内	SB3-7H	1	奈良	土師器	甕	全形	2/3	16.4	8.8	26.0	ハケメ	○
	20	SB-3	床面直上	SB3-3M	1	奈良	土師器	甕	全形	2/3	20.3	6.7	34.1	ハケメ　木葉痕？	○
	21	SB-5	覆土下層	SB5-2	1	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	12.0	5.8	3.6	篦切→ナデ	
	22	SB-5	覆土	SB5-1	1	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	13.4	6.1	3.7	糸切→ケズリ	○
	23	SB-5	覆土	SB5-1	2	奈良	須恵器	坏	底部	1/2		6.6		糸切	
	24	SB-5	貯蔵穴	SB5-5	3	奈良	須恵器	高台坏	全形	2/3	12.3	8.0	4.6		○
	25	SB-5	土層ベルト	SB5-3	1	奈良	土師器	鉢？	底部	2/3		10.8		ハケメ　内黒？	
	26	SB-5	覆土下層	SB5-2	2	奈良	土師器	甕	底部	1/2		5.9		木葉痕	
	27	SB-5	貯蔵穴	SB5-5	2	奈良	土師器	小甕	全形	1/2	12.7	6.3	8.9	ケズリ→ナデ	○
	28	SB-5	貯蔵穴	SB5-5	1	奈良	土師器	鍋	全形	2/3	34.5	9.2	19.3	ハケメ→ケズリ	○
図34	29	SB-6	覆土	SB6	4	古墳後期	土師器	鉢	底部	1/1		8.2		ミガキ	
	30	SB-6	覆土	SB6	2	古墳後期	土師器	鉢	底部	1/1				ケズリ？　内黒	
	31	SB-6	覆土	SB6	1	古墳後期	土師器	鉢	底部	1/1		11.9		ミガキ　内黒	
	32	SB-6	覆土	SB6	3	古墳後期	土師器	鉢	底部	1/2		6.3		ミガキ	
	33	SB-6	覆土	SB6	5	古墳後期	土師器	甑	底部	3/2				ケズリ　内黒	
	34	SB-6	覆土	SB6	6	古墳後期	土師器	甑	底部	1/2		8.5		ミガキ　内黒	
	35	SB-7	覆土	SB7-1	1	平安	須恵器	坏	全形	2/3	13.4	5.5	3.8	糸切　灯明皿	○
	36	SB-7	カマド付近	SB7-2	3	平安	土師器	坏	全形	1/2	13.4	6.4	4.4	ケズリ　内黒	
	37	SB-7	カマド付近	SB7-2	2	平安	土師器	坏	全形	2/3	12.6	5.4	3.6	ケズリ　内黒	
	38	SB-7	カマド付近	SB7-2	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	12.4	7.1	3.5	ケズリ　内黒	○
	39	SB-8	覆土	SB8-1	1	平安	須恵器	蓋	全形	1/2			13.4	回転ケズリ	
	40	SB-8	カマド内	SB8-2	1	平安	土師器	小甕	口～胴	1/2	11.6				
	41	SB-9	カマド内	SB9-No.2	1	平安	須恵器	蓋	全形	1/1	2.9	17.0	2.8	回転ケズリ	○
	42	SB-9	カマド内	SB9-No.1	2	平安	須恵器	蓋	全形	2/3	3.0	13.7	3.1	回転ケズリ	○
	43	SB-9	床面	SB9-No.4	1	平安	須恵器	坏	全形	1/1	13.2	7.3	4.4	糸切	○
	44	SB-9	カマド横	SB9-No.3	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	13.8	7.2	4.6	ケズリ　内黒	○
	45	SB-9	カマド内	SB9-No.1	1	平安	土師器	甕	全形	2/3	23.0		30.6	ケズリ	○
	46	SB-11	カマド横ピット	SB11-No.1	1	平安	須恵器	鉢	全形	2/3	15.7	5.8	8.9	ケズリ	○
	47	SB-11	カマド横ピット	SB11-No.3	1	平安	土師器	甕	全形	2/3	12.6	7.0	13.7	ケズリ	○
	48	SB-11	カマド横ピット	SB11-No.2	1	平安	須恵器	横瓶	胴部	1/2				タタキ	
	49	SB-12	覆土	SB12-1	6	平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径2.6	
	50	SB-12	覆土	SB12-1	7	平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.0	
	51	SB-12	覆土	SB12-1	5	平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径2.9	
	52	SB-12	覆土	SB12-1	3	平安	須恵器	坏	全形	1/2	13.8	7.6	4.0	糸切	
	53	SB-12	覆土	SB12-1	4	平安	須恵器	坏	全形	1/2	13.6	7.8	3.8	糸切	
	54	SB-12	覆土	SB12-1	1	平安	須恵器	高台坏	底部	1/1		8.9		回転ケズリ　篦書	
	55	SB-12	覆土	SB12-1	2	平安	須恵器	高台坏	底部	1/1		8.3		糸切　歪み	
	56	SB-12	床下	SB12-4	1	平安	須恵器	高台坏	底部	1/1		9.2		回転ケズリ	
	57	SB-12	覆土	SB12-1	8	平安	土師器	甕	底部	1/1		4.6		糸切	
	58	SB-12	覆土	SB12-1	9	平安	土師器	甕	底部	1/2		7.1		ケズリ	
	59	SB-10	カマド横ピット	SB10-9	1	奈良	須恵器	蓋	全形	1/1	14.2		4.4	つまみ径2.5	○
	60	SB-10	覆土上層	SB10-2	14	奈良	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.5	
	61	SB-10	覆土上層	SB10-2	15	奈良	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.1	
	62	SB-10	覆土下層	SB10-4	2	奈良	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.2	
	63	SB-10	覆土下層	SB10-4	5	奈良	須恵器	蓋	全形	2/3	13.4		2.8	つまみ径2.8	○
	64	SB-10	覆土上層	SB10-2	11	奈良	須恵器	蓋	全形	1/2	13.0		2.4	つまみ径2.9	

図版	番号	出土遺構		遺物注記（整理No.）	抽出No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法（cm）			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
	65	SB-10	覆土下層	SB10-4	3	奈良	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径2.4	
	66	SB-10	覆土上層	SB10-2	13	奈良	須恵器	蓋	全形	1/1	14.8		3.5	つまみ径2.8	
	67	SB-10	床面	SB10-5	3	奈良	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径2.8	
	68	SB-10	覆土下層	SB10-4	4	奈良	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.7	
	69	SB-10	床面	SB10-5	2	奈良	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.5	
	70	SB-10	覆土上層	SB10-2	12	奈良	須恵器	蓋	つまみ	2/3				つまみ径3.5	
	71	SB-10	覆土下層	SB10-4	8	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	12.8	6.6	3.9	篦切→ケズリ	
	72	SB-10	床面	SB10-5	1	奈良	須恵器	坏	全形	2/3	13.7	8.5	3.7	篦切→ケズリ	○
	73	SB-10	床下	SB10-10	1	奈良	須恵器	坏	全形	1/1	14.1	8.1	4.2	篦切→ケズリ　火襷	
	74	SB-10	覆土中層	SB10-3	1	奈良	須恵器	坏	全形	1/1	14.5	10.1	4.4	篦切　内面に有機物	○
	75	SB-10	覆土上層	SB10-2	16	奈良	須恵器	坏	全形	1/4	14.2	8.4	3.9	篦切？　墨書「市」	
	76	SB-10	覆土上層	SB10-2	4	奈良	須恵器	坏	底部	2/3		8.7		篦切	
	77	SB-10	覆土上層	SB10-2	19	奈良	須恵器	坏	底部	1/4		10.2		ケズリ　篦書	
	78	SB-10	カマド横ピット	SB10-9	2	奈良	須恵器	坏	全形	2/3	13.0	7.3	3.8	糸切	○
	79	SB-10	カマド付近	SB10-7	1	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	13.4	6.8	4.2	糸切	
	80	SB-10	覆土下層	SB10-4	7	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	13.6	7.6	4.4	糸切	
図35	81	SB-10	覆土下層	SB10-4	6	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	14.0	7.8	3.7	糸切	
	82	SB-10	覆土上層	SB10-2	5	奈良	須恵器	坏	底部	1/2		5.8		糸切	
	83	SB-10	覆土下層	SB10-4	1	奈良	須恵器	坏	底部	1/2		6.5		糸切　火襷	
	84	SB-10	覆土上層	SB10-2	6	奈良	須恵器	坏	底部	1/2		7.4		糸切	
	85	SB-10	覆土上層	SB10-2	7	奈良	須恵器	坏	底部	1/2		7.6		糸切	
	86	SB-10	覆土下層	SB10-4	9	奈良	須恵器	高台坏	全形	1/3	15.2	9.4	7.0		
	87	SB-10	カマド内	SB10-8	1	奈良	須恵器	高台坏	全形	2/3	14.2			回転ケズリ	
	88	SB-10	覆土上層	SB10-2	9	奈良	須恵器	高台坏	底部	1/1		9.2		ナデ	
	89	SB-10	覆土上層	SB10-2	8	奈良	須恵器	高台坏	底部	1/2		9.4		ナデ	
	90	SB-10	覆土下層	SB10-4	10	奈良	土師器	坏	底部	1/2		7.8		ケズリ　内黒	
	91	SB-10	覆土上層	SB10-2	3	奈良	土師器	坏	底部	2/3		6.2		ケズリ　内黒	
	92	SB-10	覆土下層	SB10-4	11	奈良	土師器	坏	底部	1/2		5.6		糸切？　内黒	
	93	SB-10	覆土上層	SB10-2	10	平安	灰釉	椀	底部	1/2		6.4		ナデ	
	94	SB-10	カマド付近	SB10-7	2	奈良	須恵器	鉢	口～胴	1/2	17.2				
	95	SB-10	床面	SB10-5	4	奈良	土師器	鉢	底部	1/1		4.4			
	96	SB-10	覆土上層	SB10-2	2	奈良	土師器	甕	底部	1/1		5.2			
	97	SB-10	覆土上層	SB10-2	1	奈良	土師器	甕	底部	1/2		8.8		ハケメ	
	98	SB-13	覆土下層	SB13-2	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	12.4	6.0	4.4	ケズリ　内黒	○
	99	SB-13	カマド内	SB13-4	1	平安	土師器	坏	全形	1/2	13.6	5.2	4.3	ケズリ　内黒	○
	100	SB-13	覆土	SB13-1	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	12.8	5.2	4.3	糸切　内黒	○
	101	SB-13	カマド内	SB13-4	2	平安	土師器	坏	底部	1/2		5.4		糸切　内黒	
	102	SB-13	覆土下層	SB13-2	3	平安	土師器	坏	底部	2/3		5.8		糸切　内黒	
	103	SB-13	覆土下層	SB13-2	2	平安	土師器	坏	底部	2/3		6.0		糸切　内黒	
	104	SB-13	覆土下層	SB13-2	6	平安	土師器	坏	口縁部	1/2	12.8			内黒	
	105	SB-13	覆土下層	SB13-2	7	平安	土師器	坏	口縁部	1/2	16.6			内黒	
	106	SB-13	覆土下層	SB13-2	5	平安	土師器	高台坏	底部	1/1		7.0		内黒	
	107	SB-13	覆土	SB13-1	2	平安	土師器	高台坏	底部	1/1		6.6		内黒	
	108	SB-13	覆土下層	SB13-2	4	平安	土師器	盤	全形	1/1	14.0	6.2	4.0	内黒	
	109	SB-13	カマド内	SB13-4	3	平安	土師器	盤	全形	2/3	12.3	6.4	3.0	内黒	○
	110	SB-13	覆土	SB13-1	3	平安	灰釉	皿	底部	2/3		7.5		回転ケズリ	
	111	SB-13	覆土下層	SB13-2	8	平安	須恵器	壺	底部	2/3		6.6			
	112	SB-13	覆土下層	SB13-2	9	平安	土師器	甕	全形	1/2	24.8		30.7	ケズリ	
図36	113	SB-14	覆土	SB14-1	2	平安	土師器	坏	全形	1/1	12.4	5.0	3.5	糸切　内黒	○
	114	SB-14	カマド内	SB14-4	3	平安	土師器	坏	全形	1/2	12.4	5.3	4.0	糸切　内黒	○
	115	SB-14	カマド内	SB14-No.1	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	12.6	5.6	4.1	糸切　内黒	○
	116	SB-14	カマド横	SB14-3	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	13.0	5.0	3.7	糸切　内黒	○
	117	SB-14	覆土	SB14-1	4	平安	土師器	坏	全形	1/1	13.2	5.6	4.3	糸切　内黒	
	118	SB-14	カマド内	SB14-4	4	平安	土師器	坏	全形	1/2	13.4	6.8	3.4	糸切　内黒	
	119	SB-14	覆土	SB14-1	1	平安	土師器	坏	全形	1/2	13.6	5.9	3.8	糸切　内黒	○
	120	SB-14	カマド内	SB14-4	5	平安	土師器	坏	底部	1/1		5.6		糸切　内黒	
	121	SB-14	覆土	SB14-1	3	平安	土師器	坏	底部	1/1		6.6		糸切　内黒	
	122	SB-14	カマド内	SB14-4	2	平安	土師器	坏	全形	1/2	13.2	6.8	3.4	糸切	
	123	SB-14	カマド内	SB14-4	1	平安	土師器	皿	全形	1/2	12.6	5.0	2.3	糸切	○
	124	SB-14	カマド内	SB14-No.3	1	平安	灰釉	椀	底部	1/1		7.5		ナデ　刷毛塗り	
	125	SB-14	カマド内	SB14-No.2	1	平安	灰釉	椀	底部	1/1		7.2		ナデ　刷毛塗り	
	126	SB-14	覆土	SB14-1	5	平安	灰釉	椀	底部	1/1		7.7		転用硯（朱墨）	○
	127	SB-15	覆土	SB15-1	2	平安	須恵器	高台坏	全形	1/2	12.4	9.0	4.1	篦書	
	128	SB-15	覆土	SB15-1	1	平安	土師器	坏	全形	1/2	13.3	6.8	5.0	糸切	
	129	SB-15	床面	SB15-No.1	1	平安	土師器	甕	底部	1/1		5.6		篦書	

図版	番号	出土遺構		遺物注記（整理No.）	抽出No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法（cm）			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
	130	SB-15	覆土	SB15-1	4	平安	灰釉	小椀	全形	1/2	11.1	5.4	3.6		
	131	SB-15	覆土	SB15-1	3	平安	灰釉	椀	底部	1/1		7.6		ナデ	
	132	SB-16	覆土	SB16-1	3	平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.0	
	133	SB-16	床面	SB16-No.1	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	12.6	5.3	4.3	糸切　内黒　灯明皿？	○
	134	SB-16	覆土	SB16-1	1	平安	土師器	坏	全形	1/2	12.7	6.5	5.0	糸切　内黒	○
	135	SB-16	覆土	SB16-1	2	平安	土師器	坏	底部	1/1		5.2		糸切　内黒？	
	136	SB-16	床面	SB16-No.3	1	平安	灰釉	椀	底部	1/1		7.8		転用硯	○
	137	SB-17	覆土上層	SB17-2	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	13.4	5.8	4.6	糸切　内黒	
	138	SB-17	覆土上層	SB17-2	2	平安	土師器	坏	底部	2/3		6.2		糸切　内黒	
	139	SB-17	検出面	SB17-1	1	平安	土師器	坏	底部	1/1		6.2		糸切	
	140	SB-18	カマド内	SB18-No.3	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	16.9	7.0	5.6	糸切→ケズリ　内黒	○
	141	SB-18	検出面	SB18-1	1	平安	土師器	坏	底部	1/1		5.0		糸切　内黒	
	142	SB-18	覆土	SB18-2	2	平安	土師器	坏	底部	2/3		6.0		糸切　内黒	
	143	SB-18	床下	SB18-3	1	平安	土師器	坏	底部	1/1		6.8		糸切　内黒	
	144	SB-18	床下	SB18-3	2	平安	土師器	坏	底部	1/2		6.0		糸切　内黒？	
	145	SB-18	覆土	SB18-2	1	平安	灰釉	椀	底部	1/1		6.0		ナデ	
	146	SB-18	床面	SB18-No.2	1	奈良？	土師器	甑	口縁部	1/4	25.6			ハケメ→ナデ	
	147	SB-19	カマド内	SB19-2	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	12.2	6.4	3.1	糸切　（須恵器的）	
	148	SB-21	覆土	SB21-1	2	平安	須恵器	坏	全形	1/2	12.3	6.3	3.6	糸切	
	149	SB-21	覆土	SB21-1	4	平安	須恵器	坏	底部	1/2		5.9		糸切	
	150	SB-21	覆土	SB21-1	3	平安	須恵器	坏	全形	1/1	12.4	5.6	3.8	糸切　灯明皿	○
図37	151	SB-21	覆土	SB21-1	1	平安	須恵器	短頸壺	口～胴	1/2	10.7			自然釉	
	152	SB-21	覆土下層	SB21-2	1	平安	土師器	甕	口～胴	1/2	22.6			ケズリ　カキメ	
	153	SB-22	覆土	SB22-No.1	1	平安	須恵器	坏	全形	2/3	12.2	6.3	3.3	糸切	○
	154	SB-24	カマド内	SB24-3	1	平安	土師器	坏	全形	1/2	13.2	6.0	4.2	糸切　（須恵器的）	
	155	SB-24	カマド内	SB24-3	2	平安	土師器	甕	底部	1/2		4.5		ケズリ　ハケメ	
	156	SB-23	上層焼土内	SB23-5	2	平安	須恵器	坏	全形	1/2	11.5	6.2	3.7	糸切	
	157	SB-23	床面	SB23-2	1	平安	須恵器	坏	全形	1/2	12.8	6.0	3.8	糸切　墨書	○
	158	SB-23	上層焼土内	SB23-5	3	平安	須恵器	坏	全形	1/2	13.0	6.0	3.5	糸切	
	159	SB-23	覆土	SB23-1	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	14.6	7.1	4.9	糸切　内黒	
	160	SB-23	上層焼土内	SB23-5	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	12.0	5.6	3.7	糸切　内外黒	
	161	SB-23	上層焼土内	SB23-5	6	平安	土師器	坏	全形	1/2	13.4			内外黒　刻書	
	162	SB-23	上層焼土内	SB23-5	4	平安	土師器	高台坏	底部	1/1		6.6		内外黒　刻書	
	163	SB-23	上層焼土内	SB23-5	5	平安	土師器	皿	全形	1/2	13.4	7.2	2.0	内外黒　刻書	
	164	SB-23	カマド横ピット	SB23-3	1	平安	土師器	甕	全形	2/3	11.6	6.3	10.9	糸切	○
	165	SB-23	カマド横ピット	SB23-3	2	平安	土師器	甕	口～胴	1/2	23.2			カキメ	
	166	SB-20	覆土中層	SB20-4	4	奈良	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径2.8	
	167	SB-20	覆土下層	SB20-6	2	奈良	須恵器	蓋	口縁部	1/2	17.0				
	168	SB-20	柱穴内	SB20-P2	1	奈良	須恵器	坏	全形	1/1	13.6		4.5	篦切→ナデ　篦書	○
	169	SB-20	床面	SB20-7	1	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	12.5	6.5	3.9	篦切→ナデ　篦書	○
	170	SB-20	覆土上層	SB20-2	3	奈良	須恵器	坏	底部	1/1		7.3		篦切→ナデ	
	171	SB-20	覆土下層	SB20-6	4	奈良	須恵器	坏	口縁部	1/2	13.5				
	172	SB-20	覆土上層	SB20-2	5	奈良	須恵器	高台坏	全形	1/2	16.2	12.5	3.5	回転ケズリ	
	173	SB-20	覆土上層	SB20-2	4	奈良	須恵器	高台坏	全形	2/3	16.2	12.4	3.8	回転ケズリ	○
	174	SB-20	床面	SB20-7	2	奈良	須恵器	高台坏	底部	1/1		10.6		回転ケズリ	
	175	SB-20	覆土中層	SB20-4	1	奈良	土師器	坏	全形	2/3	13.5		5.0	内黒	○
	176	SB-20	カマド内	SB20-14	1	奈良	土師器	坏	全形	1/2	15.3		5.1	内黒	○
	177	SB-20	西壁際	SB20-10	1	奈良	土師器	坏	底部	1/1				内黒	
図38	178	SB-20	床面	SB20-7	3	奈良	土師器	坏	全形	1/2	15.2			内黒	
	179	SB-20	南壁際	SB20-9	1	奈良	土師器	鉢	胴～底	1/1		6.5		内黒	
	180	SB-20	覆土下層	SB20-6	1	奈良	須恵器	壺	底部	1/1		6.2			
	181	SB-20	カマド横	SB20-12	1	奈良	土師器	無頚壺	全形	1/1	3.0	5.3	8.6	ミガキ	○
	182	SB-20	覆土下層	SB20-6	3	奈良	土師器	甕？	底部	1/1		7.7		内黒	
	183	SB-20	覆土上層	SB20-2	2	奈良	土師器	甕	底部	1/1		7.2			
	184	SB-20	床面	SB20-7	5	奈良	土師器	甕	底部	1/2		7.3		木葉痕	
	185	SB-20	覆土中層	SB20-4	2	奈良	土師器	甕	底部	1/2		5.7			
	186	SB-20	床面	SB20-7	4	奈良	土師器	甕	底部	1/1		6.6		ケズリ	
	187	SB-20	床面	SB20-8	1	奈良	土師器	壷	全形	1/2	21.0	8.9	33.2	ミガキ	○
	188	SB-20	覆土上層	SB20-2	1	奈良	土師器	甕	口～胴	1/2	18.8			ハケメ→ナデ	
	189	SB-20	カマド横ピット	SB20-13	1	奈良	土師器	甕	胴～底	2/3		7.5		ハケメ→ナデ	
	190	SB-20	煙道内	SB20-15	1	奈良	土師器	甕	胴～底	1/2		6.7		ハケメ→ナデ　木葉痕	
	191	SB-25	覆土下層	SB25-3	5	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	13.8	9.6	4.6	篦切→ナデ	
	192	SB-25	覆土中層	SB25-2	1	奈良	須恵器	高台坏	全形	1/2	16.8	9.6	4.5	回転ケズリ	
	193	SB-25	覆土下層	SB25-3	4	奈良	須恵器	高台坏	底部	1/2		10.2		回転ケズリ	
	194	SB-25	覆土上層	SB25-1	3	奈良	須恵器	高台坏	底部	1/2		5.6			

図版	番号	出土遺構		遺物注記（整理No.）	抽出No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法（cm）			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
図39	195	SB-25	床面	SB25-No.1	1	奈良	土師器	坏	全形	1/1	13.2	4.5	4.4	内黒	○
	196	SB-25	覆土下層	SB25-3	3	奈良	土師器	坏	全形	2/3	11.5		3.9		
	197	SB-25	覆土下層	SB25-3	2	奈良	土師器	坏	全形	2/3	17.4		7.8		○
	198	SB-25	床面	SB25-No.2	1	奈良	土師器	坏	底部	2/3		5.7			
	199	SB-25	カマド内	SB25-6	1	奈良	土師器	高坏	脚1部	2/3		9.7		ハケメ	
	200	SB-25	覆土中層	SB25-2	3	奈良	土師器	高坏	脚1部	1/2					
	201	SB-25	覆土上層	SB25-1	2	奈良	土師器	高坏	脚1部	1/2				ハケメ→ナデ	
	202	SB-25	覆土上層	SB25-1	1	奈良	土師器	壷	胴～底	2/3		10.9		ミガキ	
	203	SB-25	覆土中層	SB25-2	2	奈良	土師器	甕	胴～底	1/1		5.7		ハケメ→ナデ・ケズリ	
	204	SB-25	覆土下層	SB25-3	1	奈良	土師器	甕	全形	1/2	22.2	7.8	31.5	ハケメ→ナデ　木葉痕	○
	205	SB-26	カマド付近	SB26	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	17.4	6.3	5.5	回転ケズリ　内黒	○
	206	SB-26	カマド付近	SB26	3	平安	土師器	坏	全形	2/3	18.0	7.6	6.0	糸切→ケズリ　内黒	
	207	SB-26	カマド付近	SB26	4	平安	土師器	坏	全形	2/3	13.2	6.3	3.8	糸切　内黒	
	208	SB-26	カマド付近	SB26	2	平安	土師器	坏	全形	2/3	14.2	6.0	5.5	糸切　内黒　灯明皿	
	209	SB-26	カマド付近	SB26	5	平安	土師器	坏	底部	1/1		4.9		糸切　内黒	
	210	SB-26	カマド付近	SB26	6	平安	土師器	坏	底部	2/3		5.3		糸切　内黒	
	211	SB-26	カマド付近	SB26	7	平安	土師器	坏	底部	2/3		5.8		糸切　内黒	
	212	SB-27	覆土	SB27	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	13.4	6.0	4.6	糸切　内黒　篦書	
	213	SB-28	覆土中層	SB28-2	1	奈良	須恵器	高台坏	全形	2/3	12.1	9.0	3.9	回転ケズリ	○
	214	SB-28	覆土下層	SB28-3	1	奈良	土師器	甕	底部	1/1		6.0			
	215	SB-29	覆土下層	SB29-3	2	奈良	土師器	坏	全形	1/1	13.2	4.4	5.6	内黒	
	216	SB-29	覆土下層	SB29-3	1	奈良	土師器	甕	胴～底	1/1		7.0		ハケメ→ナデ　木葉痕	
図40	217	SB-31	カマド内・周辺	SB31-3	2	平安	須恵器	坏	全形	1/1	13.0	7.4	3.6	糸切	
	218	SB-31	カマド内・周辺	SB31-3	1	平安	須恵器	坏	全形	1/2	13.2	7.3	3.7	糸切	○
	219	SB-31	覆土	SB31-1	1	平安	土師器	甕	全形	1/2	23.3	9.7	28.5	ハケメ	
	220	SB-32	覆土下層	SB32-2	1	奈良	土師器	坏	全形	1/1	13.2		5.6	内黒	○
	221	SB-32	覆土下層	SB32-2	2	奈良	須恵器	盤	脚部	1/4					
	222	SB-32	覆土	SB32-1	1	奈良	土師器	甕	底部	1/1		6.2			
	223	SB-33	覆土	SB33-1	1	奈良	土師器	甕	底部	2/3		5.7		ケズリ→ナデ	
	224	SB-33	カマド横	SB33-2	1	奈良	土師器	甕	口～胴	1/2	20.3				
	225	SB-34	覆土	SB34	2	平安	土師器	坏	底部	2/3		6.1		糸切	
	226	SB-34	覆土	SB34	1	平安	土師器	甕	底部	1/2		6.2		糸切	
	227	SB-35	覆土	SB35-1	2	平安	須恵器	坏	全形	2/3	12.8	6.2	3.8	糸切　墨書「平」	○
	228	SB-35	覆土	SB35-1	1	平安	須恵器	坏	全形	2/3	12.6	6.1	3.7	糸切	○
	229	SB-35	覆土	SB35-1	4	平安	須恵器	坏	底部	1/2	12.4	6.2	3.3	糸切　灯明皿	
	230	SB-35	覆土	SB35-1	3	平安	土師器	坏	全形	2/3	14.0	6.5	5.1	糸切→ケズリ　内黒	○
	231	SB-36	カマド東側	SB36-4	1	古墳後期	土師器	鉢	全形	2/3	19.5	5.0	15.0	内黒	○
	232	SB-36	カマド東側	SB36-4	2	古墳後期	土師器	鉢	全形	2/3	12.4	5.0	8.2	内黒	○
	233	SB-36	カマド周辺	SB36-3	1	古墳後期	土師器	鉢	全形	1/2	17.4	8.0	8.8		
	234	SB-36	床面	SB36-No.2	1	古墳後期	土師器	盤	全形	1/1	14.2	12.6	5.0	赤彩？	○
	235	SB-36	覆土上層	SB36-1	1	古墳後期	土師器	高坏	杯～脚	1/1	13.4			内黒	○
	236	SB-36	カマド内	SB36-5	2	古墳後期	土師器	壷	胴～底	2/3				ミガキ	
	237	SB-36	カマド内	SB36-5	1	古墳後期	土師器	甕	胴～底	1/1		8.0		ケズリ→ナデ	
	238	SB-36	覆土下層	SB36-2	1	古墳後期	土師器	甕	全形	2/3	18.8	7.0	1.5	ハケメ	
	239	SB-36	床面	SB36-No.1	1	古墳後期	土師器	甕	全形	1/1	17.8	7.0	28.3	ハケメ	○
図41	240	SB-39	床面	SB39-No.2	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	13.6	6.3	4.2	糸切→ケズリ　内黒	○
	241	SB-39	床面直上	SB39-2	2	平安	土師器	坏	全形	1/2	12.9	5.8	4.7	糸切　内黒	○
	242	SB-39	床面直上	SB39-2	3	平安	土師器	坏	全形	1/1	12.9	5.0	4.1	糸切　内黒	
	243	SB-39	床面	SB39-No.1	1	平安	土師器	坏	全形	1/2	13.2	4.6	4.2	糸切　内黒	○
	244	SB-39	床面直上	SB39-2	1	平安	土師器	高台坏	底部	1/2				内黒	
	245	SB-40	床面	SB40-No.2	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	13.8	6.6	4.4	糸切　内黒	○
	246	SB-40	床面	SB40-No.1	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	16.6	6.9	6.1	糸切　内黒	○
	247	SB-40	カマド内	SB40-2	2	平安	土師器	坏	全形	1/1	13.8	5.9	4.3	糸切	
	248	SB-40	カマド内	SB40-2	1	平安	土師器	甕	口～胴	1/2	23.6			カキメ	
	249	SB-41	床面直上	SB41-No.1	1	平安	須恵器	坏	全形	2/3	13.4	7.0	4.0	糸切	○
	250	SB-41	覆土上層	SB41-2	2	平安	須恵器	坏	全形	2/3	13.4	6.2	4.1	糸切	○
	251	SB-41	覆土上層	SB41-2	1	平安	須恵器	坏	全形	1/1	13.6	5.8	3.8	糸切	
	252	SB-41	覆土上層	SB41-1	3	平安	須恵器	坏	底部	1/2		7.8		糸切	
	253	SB-41	覆土上層	SB41-1	2	平安	須恵器	坏	底部	1/1		6.4		糸切　火襷	
	254	SB-41	覆土上層	SB41-1	1	平安	土師器	坏	底部	1/1		7.0		糸切	
	255	SB-41	ピット内	SB41-4	1	奈良？	土師器	（甑）	把手	1/1					
	256	SB-42	床面	SB42-No.1	1	平安	須恵器	坏	全形	2/3	12.6	5.6	3.6	糸切　転用硯（朱墨）	○
	257	SB-42	煙道内	SB42-3	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	14.8	6.0	4.7	糸切　内黒	○
	258	SB-43	覆土上層	SB43-1	1	奈良？	土師器	（甑）	把手	1/1					
	259	SB-44	覆土	SB44-4	1	平安	須恵器	蓋	全形	1/2	14.3		2.8	つまみ径2.8	○

図版	番号	出土遺構		遺物注記（整理No.）	抽出No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法（cm）			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
	260	SB-44	覆土	SB44-1	6	平安	須恵器	蓋	全形	2/3	13.8		2.6	つまみ径2.7	○
	261	SB-44	覆土	SB44-4	2	平安	須恵器	蓋	全形	1/2	17.4				○
	262	SB-44	覆土	SB44-1	7	平安	須恵器	蓋	全形	2/3	16.2				○
	263	SB-44	覆土	SB44-1	1	平安	須恵器	坏	全形	2/3	14.0	7.6	3.3	糸切　火襷	○
	264	SB-44	覆土	SB44-1	2	平安	須恵器	坏	全形	1/2	14.0	8.5	3.6	糸切　火襷	○
	265	SB-44	東南隅ピット	SB44-2	1	平安	須恵器	坏	全形	2/3	14.2	7.4	3.7	糸切	○
	266	SB-44	覆土	SB44-1	8	平安	須恵器	坏	口縁部	1/6	13.6			墨書「中寸」？	
	267	SB-44	覆土	SB44-1	3	平安	須恵器	坏	底部	1/1			6.6	糸切　火襷	
	268	SB-44	覆土	SB44-1	5	平安	須恵器	高台坏	全形	1/1	13.4	8.7	3.9	回転ケズリ　火襷	
	269	SB-44	覆土	SB44-1	4	平安	須恵器	高台坏	全形	1/1	14.7	10.5	6.3	回転ケズリ	
	270	SD-4	覆土	SD4	1	奈良	須恵器	坏	底部	1/2		8.3		篦切→ナデ	
	271	SD-5	覆土	SD5	1	奈良	須恵器	坏	口縁部	1/6	14.6			墨書	
	272	SK-2	覆土	SK2	1	奈良	土師器	甕	底部	1/3		7.0		木葉痕	
	273	SK-5	覆土	SK5	1	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	14.2	8.5	3.5	篦切　墨書「市寸」	○
	274	SK-11	覆土	SK11	1	平安	土師器	甕	全形	2/3	9.6	4.2	8.9		○
	275	SK-14	覆土	SK14	1	奈良	須恵器	蓋	全形	1/1	3.1	2.6	14.7	回転ケズリ	○
	276	SK-15A	覆土	SK15A	1	平安	須恵器	坏	底部	2/3		8.6		篦切	
	277	SK-15A	覆土	SK15A	2	奈良	土師器	高坏	脚部	1/2		8.8		内黒	
	278	SK-15B	覆土	SK15B	1	奈良	土師器	甕	底部	1/1		6.7			
	279	ST-5	柱穴内	ST5-P2	1	奈良	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.8	
	280	ST-5	柱穴内	ST5-P3	1	奈良	土師器	（甑）	把手	1/1					
	281	ST-11	柱穴内	ST11	1	奈良	須恵器	高台坏	底部	2/3		7.2			
	282	pit-17	B-1区	pi-17	1	奈良	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.2	
	283	pit-22	B-1区	pi-22	1	奈良	須恵器	坏	底部	1/2		8.6		篦切→ナデ　刻書？	
	284	pit	A-2区下層	pi-A2下	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	13.0	5.2	3.5	糸切　内黒？	
	285	pit-21	B-1区	pi-21	1	奈良	土師器	甕	底部	2/3		7.5			
	286	pit	E-3区	pi-E3-2	1	奈良	土師器	甕	底部	2/3		6.1		木葉痕	
	287	下層トレンチ		T-B1	1	奈良	須恵器	高台坏	全形	1/1	15.6	11.4	3.5	回転ケズリ	
	288	下層トレンチ		T-B1	2	奈良	土師器	坏	全形	1/2	15.1	9.3	3.6	篦切？（須恵器的）	
	289	検出面	B-2北一括出土	検 B2-N2	2	弥生	弥生	甕	口～胴	1/2	20.2			櫛描波状文　ミガキ	
	290	検出面	B-2北一括出土	検 B2-N2	1	弥生	弥生	甕	胴～底	1/1		8.4		ハケメ→ミガキ	
	291	検出面	B-2北一括出土	検 B2-N3	1	弥生	弥生	甕	胴～底	1/1		7.0		櫛描波状文　ミガキ	
	292	検出面	B-1区	検 B1-8	6	古墳奈良	土師器	高坏？	脚部	2/3		7.2			
	293	検出面	B-1区	検 B1-7	12	古墳奈良	土師器	高坏？	脚部	2/3		5.8			
	294	検出面	B-2区	検 B2-3	1	古墳奈良	土師器	高坏	脚部	1/2		11.4		ミガキ	
	295	検出面	B-2区	検 B2-7	7	古墳奈良	土師器	高坏	脚部	1/2		7.8		ミガキ？	
	296	検出面	B-1区	検 B1-8	7	古墳奈良	土師器	高坏	杯～脚	1/2				内黒	
	297	検出面	B-1区	検 B1-8	8	古墳奈良	土師器	高坏	杯～脚	1/2				内黒	
図42	298	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	12	古墳奈良	土師器	高坏	坏部	1/1				内黒	
	299	検出面	B-2北一括出土	検 B2-N1	1	古墳前期	土師器	甕	底部	2/3		4.4			
	300	検出面	B-2北一括出土	検 B2-N5	1	古墳前期	土師器	甕	底部	1/1		4.6		ケズリ	
	301	検出面	B-2北一括出土	検 B2-N1	2	古墳前期	土師器	甕	胴～底	2/3		5.4		ハケメ　ナデ	
	302	検出面	B-1区	検 B1-8	18	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.1	
	303	検出面	B-1区	検 B1-8	16	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.1	
	304	検出面	B-1区	検 B1-8	17	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.7	
	305	検出面	B-1区	検 B1-8	15	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.2	
	306	検出面	B-2区	検 B2-7	3	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径2.4	
	307	検出面	B-1区	検 B1-7	7	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.4	
	308	検出面	B-1区	検 B1-3	1	奈良平安	須恵器	蓋	全形	1/2	14.4		3.7	つまみ径3.1	○
	309	検出面	B-2区	検 B2-2	1	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.4	
	310	検出面	B-2区	検 B2-7	1	奈良平安	須恵器	蓋	全形	1/1	16.6		2.7	つまみ径3.9	
	311	検出面	B-2区	検 B2-5	4	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.2	
	312	検出面	B-2区	検 B2-5	5	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.2	
	313	検出面	B-2区	検 B2-7	2	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.4	
	314	検出面	B-1区	検 B1-4	5	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.2	
	315	検出面	E-7区	検 E3	5	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径2.9	
	316	検出面	B-1区	検 B1-8	14	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.8	
	317	検出面	A-2区上層	検 A2-2	2	奈良平安	須恵器	蓋	つまみ	1/1				つまみ径3.2	
	318	不明	E-1～4区	不明	2	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	12.8	6.3	3.9	篦切？→ナデ	○
	319	検出面	B-1区	検 B1-8	27	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	12.9	6.6	3.4	篦切→ナデ	○
	320	検出面	B-1区	検 B1-3	2	奈良	須恵器	坏	全形	1/2	14.4	7.4	3.9	篦切	○
	321	検出面	B-1区	検 B1-8	24	奈良	須恵器	坏	底部	1/1		7.0		篦切→ナデ	
	322	検出面	B-1区	検 B1-7	1	奈良	須恵器	坏	底部	1/1		7.8		篦切→ナデ　篦書	
	323	検出面	B-2区	検 B2-7	5	奈良	須恵器	坏	底部	2/3		8.4		篦切→ナデ	
	324	検出面	B-1区	検 B1-8	25	奈良	須恵器	坏	底部	2/3		8.6		篦切→ナデ	

図版	番号	出土遺構		遺物注記（整理No.）	抽出No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法（cm）			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
	325	検出面	B-2区	検 B2-5	7	奈良	須恵器	坏	底部	1/2		7.6		篦切	
	326	検出面	B-1区	検 B1-7	2	奈良	須恵器	坏	底部	1/2		10.0		篦切→ナデ	
	327	検出面	B-1区	検 B1-8	26	奈良	須恵器	坏	底部	2/3		6.4		ケズリ	
	328	検出面	B-1区	検 B1-4	2	平安	須恵器	坏	全形	2/3	12.3	6.2	3.3	糸切　火襷	
	329	検出面	B-2区	検 B2-1	3	平安	須恵器	坏	全形	1/1	12.6	6.4	3.7	糸切	○
	330	検出面	E-5区	検 E3	3	平安	須恵器	坏	全形	1/1	13.0	7.0	3.6	糸切	
	331	検出面	B-2区	検 B2-1	2	平安	須恵器	坏	全形	2/3	13.6	7.3	3.1	糸切	
	332	検出面	B-2区	検 B2-7	4	平安	須恵器	坏	全形	2/3	14.1	6.9	3.8	糸切	
	333	検出面	B-1区	検 B1-8	28	平安	須恵器	坏	底部	1/2		5.4		糸切	
	334	検出面	B-1区	検 B1-8	29	平安	須恵器	坏	底部	1/2		5.6		糸切　篦書？	
	335	検出面	E-6区	検 E3	4	平安	須恵器	坏	底部	2/3		5.6		糸切	
	336	検出面	B-1区	検 B1-4	4	平安	須恵器	坏	底部	1/2		5.6		糸切	
	337	検出面	D 区	検 D-2	3	平安	須恵器	坏	底部	1/1		5.6		糸切	
	338	検出面	B-2区	検 B2-1	5	平安	須恵器	坏	底部	1/1		5.9		糸切	
	339	検出面	B-2区	検 B2-5	1	平安	須恵器	坏	底部	2/3		5.9		糸切	
	340	検出面	B-1区	検 B1-7	6	平安	須恵器	坏	底部	1/2		6.0		糸切	
	341	検出面	B-1区	検 B1-4	1	平安	須恵器	坏	底部	1/1		6.1		糸切　火襷	
	342	検出面	B-2区	検 B2-1	4	平安	須恵器	坏	底部	1/2		6.2		糸切	
	343	検出面	B-1区	検 B1-7	5	平安	須恵器	坏	底部	1/2		6.4		糸切　火襷	
	344	検出面	B-1区	検 B1-7	4	平安	須恵器	坏	底部	1/1		7.0		糸切	
	345	検出面	B-1区	検 B1-4	3	平安	須恵器	坏	底部	1/2		7.5		糸切　火襷	
	346	検出面	B-1区	検 B1-8	23	奈良平安	須恵器	高台坏	全形	1/2	12.9	10.0	4.1	合子形	
図43	347	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	6	奈良平安	須恵器	高台坏	全形	1/2	15.1	10.4	4.3	回転ケズリ	
	348	検出面	A-2区上層	検 A2-2	1	奈良平安	須恵器	高台坏	全形	1/2	12.2	9.0	4.1	回転ケズリ	
	349	不明	E-1～4区	不明	1	奈良平安	須恵器	高台坏	全形	1/2	14.0	9.8	4.0	回転ケズリ	○
	350	検出面	B-1区	検 B1-8	19	奈良平安	須恵器	高台坏	全形	2/3	17.4			回転ケズリ	○
	351	検出面	B-1区	検 B1-8	21	奈良平安	須恵器	高台坏	底部	1/2		10.5		回転ケズリ　篦書	
	352	検出面	B-2区	検 B2-5	6	奈良平安	須恵器	高台坏	底部	2/3		13.2		ナデ	
	353	検出面	B-1区	検 B1-8	22	奈良平安	須恵器	高台坏	底部	2/3		10.0		ナデ	
	354	検出面	B-1区	検 B1-8	20	奈良平安	須恵器	高台坏	底部	2/3		8.1		回転ケズリ	
	355	検出面	B-1区	検 B1-7	3	奈良平安	須恵器	高台坏	底部	2/3		11.6		回転ケズリ	
	356	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	3	奈良	土師器	坏	全形	2/3	11.7		4.0	内黒	
	357	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	4	奈良	土師器	坏	全形	2/3	11.8		5.7	内黒	
	358	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	5	奈良	土師器	坏	底部	1/1				内黒	
	359	検出面	B-1区	検 B1-7	8	奈良	土師器	坏	底部	1/2		8.8		内黒	
	360	検出面	E-3区	検 E3	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	14.6	5.1	6.8	糸切　内黒	
	361	検出面	B-2区	検 B2-1	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	13.4	5.8	4.7	糸切　内黒	
	362	検出面	D 区	検 D-2	2	平安	土師器	坏	底部	2/3		4.6		糸切　内黒	
	363	検出面	B-1区	検 B1-8	11	平安	土師器	坏	底部	1/1		5.2		糸切　内黒	
	364	検出面	B-1区	検 B1-8	12	平安	土師器	坏	底部	1/1		5.8		糸切　内黒	
	365	不明	E-1～4区	不明	3	奈良	須恵器	坏	全形	2/3	14.4	8.0	4.5	篦切→ナデ	○
	366	検出面	B-1区	検 B1-8	10	奈良	土師器	坏	底部	1/1		8.2		篦切→ナデ	
	367	検出面	B-2区	検 B2-5	2	平安	土師器	坏	底部	1/1		5.6		糸切	
	368	検出面	D 区	検 D-3	1	平安	土師器	坏	底部	2/3		5.9		内黒？	
	369	検出面	D 区	検 D-2	1	平安	土師器	坏	底部	1/2		6.2			
	370	検出面	E-4区	検 E3	2	平安	土師器	高台坏	全形	1/2	14.6	6.8	5.1	内黒	
	371	検出面	B-1区	検 B1-8	13	平安	土師器	高台坏	底部	1/2		7.6		内黒	
	372	検出面	B-1区	検 B1-7	9	平安	土師器	高台坏	底部	1/1		7.2		内外黒	
	373	検出面	B-2区	検 B2-5	3	平安	土師器	高台坏	底部	2/3				内黒	
	374	検出面	D 区	検 D-3	2	平安	土師器	高台坏	底部	1/2				内黒	
	375	検出面	B-2区	検 B2-1	6	平安	灰釉	椀	底部	2/3		6.9		ナデ	
	376	検出面	B-1区	検 B1-8	9	奈良	土師器	鉢	底部	2/3		7.7		内黒　木葉痕	
	377	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	1	奈良	土師器	鉢	底部	1/2		7.2		内黒	
	378	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	2	奈良	土師器	鉢	底部	1/1		9.9		内黒	
	379	検出面	B-2区	検 B2-7	8	奈良	土師器	鉢	底部	1/1		11.1			
図44	380	検出面	D 区	検 D-3	3	奈良	須恵器	横瓶	胴端部	2/3					
	381	検出面	B-2区	検 B2-1	7	平安	土師器	盤	口～脚	1/2	22.2			透かし孔　灯明具？	○
	382	検出面	B-2区	検 B2-7	6	奈良平安	須恵器	壺	底部	1/1		7.8		糸切	
	383	検出面	B-2区	検 B2-5	8	奈良平安	須恵器	短頸壺	胴～底	2/3		7.2		篦切→ケズリ　篦書	○
	384	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	10	奈良	土師器	壺	底部	1/2		8.4			
	385	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	11	奈良	土師器	壺	底部	1/1					
	386	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	7	奈良	土師器	甑	口～胴	1/2	11.6				
	387	検出面	B-1区	検 B1-8	5	奈良	土師器	甕	底部	2/3		6.2			
	388	検出面	B-1区	検 B1-7	10	奈良	土師器	甕	底部	1/1		6.9		木葉痕	
	389	検出面	B-1区	検 B1-8	4	奈良	土師器	甕	底部	1/1		6.0			

図版	番号	出土遺構		遺物注記（整理No.）	抽出No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法（cm）			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
	390	検出面	B-1区	検 B1-8	1	奈良	土師器	甕	底部	2/3		9.3		木葉痕	
	391	検出面	B-1区	検 B1-7	11	奈良	土師器	甕	底部	1/1		8.4		木葉痕	
	392	検出面	B-1区	検 B1-8	2	奈良	土師器	甕	底部	1/2		9.1		木葉痕	
	393	検出面	B-1区	検 B1-4	6	奈良	土師器	甕	底部	1/1		6.9			
	394	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	9	奈良	土師器	甕	底部	1/1		5.6		木葉痕	
	395	検出面	B-2東一括出土	検 B2-E	8	奈良	土師器	甕	口～胴	1/2	17.6			ハケメ	
図45	396	SB-10	覆土下層	SB10-4	12		須恵器	杯	口縁部	細片				墨書「市」	
	397	SB-10	覆土上層	SB10-2	17		須恵器	杯	胴部	細片				墨書	
	398	SB-10	覆土上層	SB10-2	18		須恵器	杯	胴部	細片				墨書「山」	
	399	検出面	B-2区	検 B2-1	9	奈良平安	須恵器	壷？	胴部	細片				箆書「水」	

表４　若里市民文化ホール地点（SRTH）その他遺物観察表

図版	番号	時代	種別	名　称	遺存	重量（g）	形　態　等（cm）	写真	出土遺構		遺物注記（整理No.）
									遺構	位置	
図46	400	平安	土製品	土玉	破片	2	嚢形　長2.7　径1.6	○	SB-２	覆土下層	SB2-2
	401	平安	土製品	土玉	略完形	1	丸形　径1.4	○	SB-５	覆土	SB5-1
	402	平安	土製品	ミニチュア土器	破片	11	鉢形	○	SB-14	覆土	SB14-1
	403	平安	土製品	ミニチュア土器	破片	7	鉢形		SB-41	覆土	SB44-1
	404	奈良	土製品	ミニチュア土器	破片	15	甕形	○	SB-25	覆土上層	SB25-1
	405	古墳後期	土製品	把手？	略完形	17	径1.3～1.6粘土紐		SB-６	覆土	SB ６
	406		土製品	羽口	破片	53	径5.2	○	検出面	B-２区	検 B2-7
	407	奈良	土製品	土製支脚	完形	662	長17.8　径3.9～7.2	○	SB-20	カマド	SB20-14
	408	奈良	土製品	土製支脚	完形	470	長10.9　径4.2～7.1	○	SB-３	床面直上	SB3-3B
	409	古墳後期	土製品	土製支脚	破片	294	径～7.1		SB-６	覆土	SB ６
	410	古墳後期	土製品	土製支脚	破片	113	径～6.7		SB-６	覆土	SB ６
	411	奈良	土製品	土製支脚	破片	270	径～6.2		SB-20	床面	SB20-7
	412	平安	土製品	土製支脚	破片	35	径～6.6		SB-40	カマド内	SB40-2
	413		土製品	土製支脚	破片	105	径～6.7		検出面	A-２区	検 A2-4
	414	平安	石製品	砥石	完形	125	珪質頁岩　自然礫　長8.8　幅4.8	○	SB-11	床面中央ピット	SB11-2
	415	奈良	石製品	砥石	破片	42	凝灰岩　幅3.6	○	SB-25	覆土下層	SB25-3
	416	平安	石製品	砥石	略完形	1,043	砂岩　幅9.4～4.3	○	SB-35	床面	SB35-2
	417	平安	石製品	砥石	破片	156	砂岩　幅5.4～4.2	○	SB-41	覆土上層	SB41-1
	418	平安	石製品	砥石	完形	83	凝灰岩　有孔　長7.5　幅3.5～2.5	○	SB-44	覆土	SB44-1
	419		石製品	砥石	略完形	36	凝灰岩　長5.3　幅2.6	○	試掘坑	A-２区上層	T-A ２
	420		石製品	砥石	破片	67	凝灰岩　幅2.8	○	検出面	B-２区	検 B2-1
	421		石製品	砥石	破片	51	凝灰岩　幅3.1	○	検出面	A-１区	検 A １
写真のみ	422	古墳後期	石製品	ミガキ石？	完形	244	石英斑岩？　自然礫　径4.7～6.3	○	SB-６	覆土	SB ６
	423	平安	石製品	敲石	破片	23	砂岩　幅～2.6	○	SB-44	覆土	SB44-1
	424	古墳後期	石製品	敲石	完形	580	硬砂岩　長16.0　幅6.8	○	SB-36	覆土下層	SB36-2

1

10

11

12

13

19

21

18

23

35

38

28

27

41

42

43

44

45

46

47

59

63

74

72

78

98

99

100

109

119

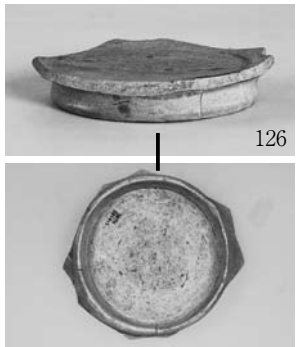
114

113

115

116

123


126

133

134

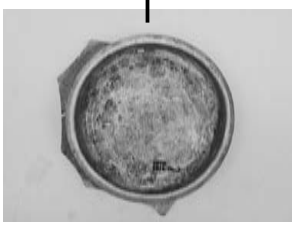
140

136

150

153

157



168

169

173

164

175

176

195

181

187

204

197

205

213

218

220

227

228

230

231

239

232

234

235

240

241

243

245

246

249

250

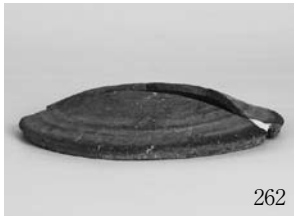
256

259

260

257

261


262

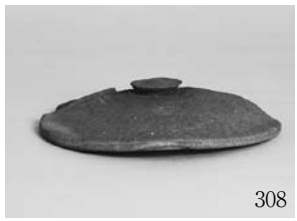
265

263

264

273

275


308

318

319

320

329

349

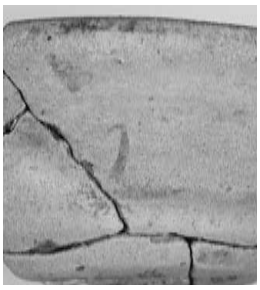
350

365

274

381

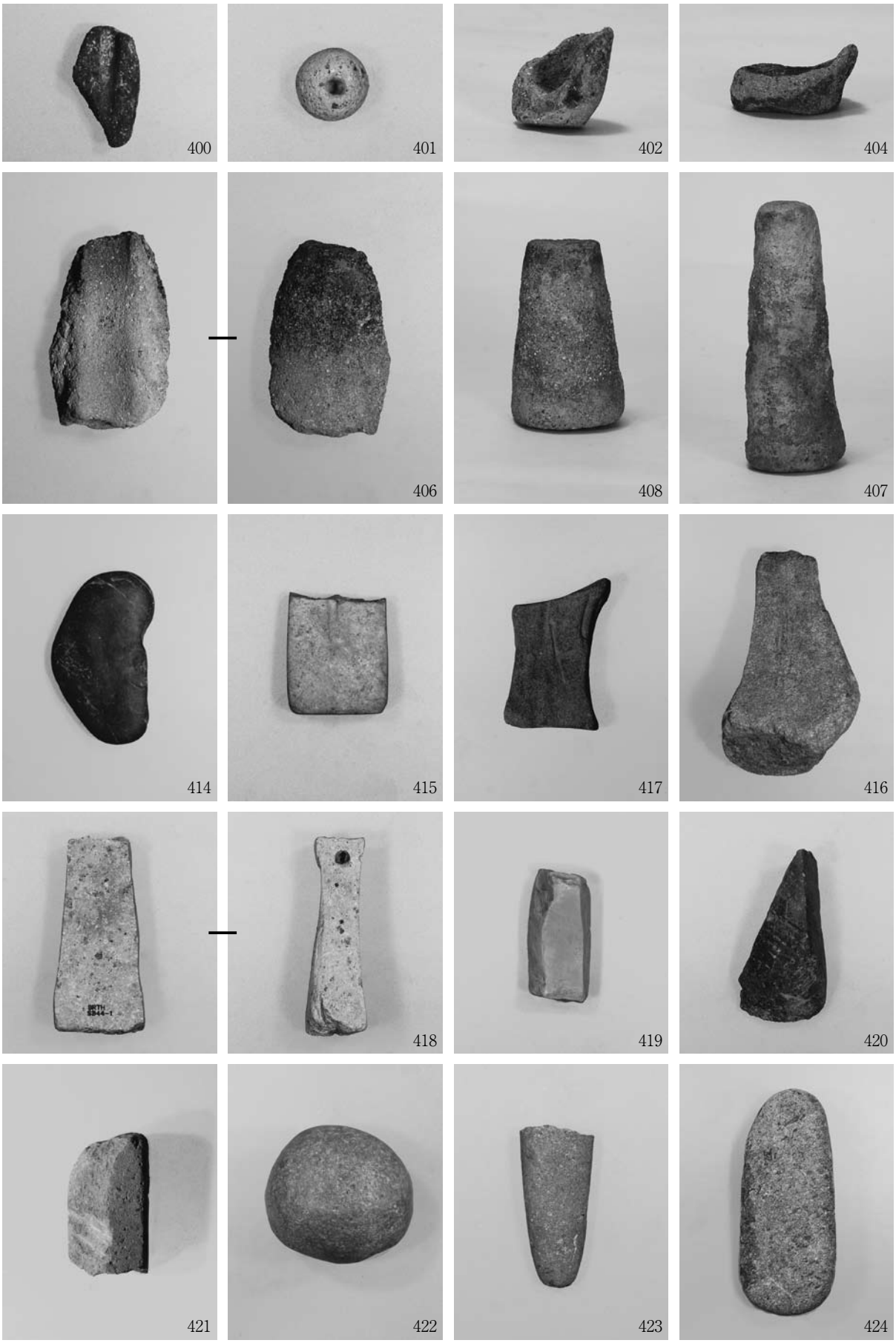
383


157

227

273

10


400
401
402
404
406
408
407
414
415
417
416
418
419
420
421
422
423
424

４　作為的混入遺物（石器）について

株式会社アルカ　角張淳一

Ａ地区下層において散発的に検出された石器類についての分析報告を行うものである。資料体は黒曜石石器９点である。この資料について、元沼津工業専門学校教授望月明彦教授のもとで、黒曜石原産地分析を行った。その後に、低倍率（10倍程度）の顕微鏡写真を撮影し、石器の剥離面の観察とその技術を記述した。

分析項目は、(1) 原産地分析、(2) 器種と剥離面観察の２項目である。

(1) 原産地分析

黒曜石の原産地分析によると、９点の資料は２群３類に分類された。１群は北海道の白滝８号６沢群、２群は長野県内の諏訪・和田峠群で、これらは諏訪星ヶ台群と和田群に細別される。

長野県内において北海道産の黒曜石石器は確認されていないので、きわめて不自然な遺物である。

長野市芹田東沖遺跡出土黒曜石製石器産地推定結果（望月明彦）

判別図法・判別分析からの最終推定結果

研究室 年間通番	分析番号	実測図番号	推定産地
MK10-01882	SHO-1	№1	白滝８号沢群
MK10-01883	SHO-2	№5	諏訪星ヶ台群
MK10-01884	SHO-3	№2	白滝８号沢群
MK10-01885	SHO-4	№4	白滝８号沢群
MK10-01886	SHO-5	№3	白滝８号沢群
MK10-01887	SHO-6	№7	和田鷹山群
MK10-01888	SHO-7	№9	和田小深沢群
MK10-01889	SHO-8	№6	諏訪星ヶ台群
MK10-01890	SHO-9	№8	和田高松沢群

判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

判別図 判別群	判別分析					
	第１候補産地			第２候補産地		
	判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
STHG	STHG	7.37	0.9989	STSC	17.31	0.0011
SWHD	SWHD	8.01	1	WDTN	73.15	0
STHG	STHG	0.69	0.9969	STSC	8.64	0.0031
STHG	STHG	2.12	0.9986	STSC	11.68	0.0014
STHG	STHG	2.26	0.9891	STSC	7.66	0.0109
WDTY	WDTY	7.7	0.9999	WDHY	23	0.0001
WDKB	WDKB	5.37	0.9998	WDTY	23.22	0.0002
SWHD	SWHD	5.34	1	WDTN	88.12	0
WOTM	WOTM	10.43	1	WDTM	38.12	0

(2) 器種と剥離面観察

以下は図に沿って個別に石器の観察を述べるものである。

白滝産の黒曜石製尖頭器（実測図№１、写真図版１）

この尖頭器の風化面は新鮮で、現代における模造品であることが判る資料である。写真では剥離面の開始部を撮影しており、この剥離面はハードハンマーによる直接打撃の通常の剥離面である。遺物でよく知られる尖頭器の製作は鹿角などのソフトハンマーの平坦剥離であるから、この資料の剥離面とは異なる。おそらくこの資料の製作は、右手（利き手）に小形で偏平な小石をもち、左手で資料をもちながら打撃を加える作業で製作されたのであろう。遺物としては非常に不自然な石器である。

白滝産の剥片類（実測図№２，３，４、写真図版２，３）

３点の剥片類の風化面は、№１の尖頭器と同様に新鮮である。№２は二つに折れている剥片で、自然面が残るが信州産の黒曜石の自然面とは異なる面で、ザラザラとした風化面である。№３は剥片で風化面は新鮮である。№２と№３は剥離の開始部が残っているので顕微鏡写真を撮影した。№２の打面は点状打面、№３の打面は不整切子打面で、いずれも打面を調整することはしていない。通常は打面形態が剥片の形態を安定させる重要な属性なので、打面形態は石核の面の中で選択されるか、打面を作出するが、これらの剥片に打面に対する意図は全く

みられない。おそらく、石核の面で、剥片を剥ぐことができる面をランダムに選んで打撃を加えているのだろう。これを裏付けるように剥片の背面に規則性はない。また№３の剥片にはバルブがあるので、尖頭器と同じような動作で剥離作業を行っていると推定される。こうした作業は、ハンマーをもつ手首をかえすように打撃を行う直接打撃で、訓練を受けていない者が通常行う剥離作業である。剥片№４は、右側辺に石核側面、左側辺に押圧剥離面が残っている。この押圧剥離は、小石で縁辺を潰すように行った押圧剥離であり、刃付けの意図は読み取れるが、その技術は先史時代の押圧剥離の技術を知らないことをうかがわせる。おそらく尖頭器のハンマーと同じ小石のハンマーを用いているのだろう。

諏訪星ヶ台産の石鏃と剥片（実測図№５，６、写真図版２）

石鏃と剥片の風化面は、新鮮とはいえず、縄文時代の風化面としてもよいだろう。石鏃の押圧剥離は、鹿角などを用いる縄文時代の押圧剥離そのものであり、白滝産の剥片の押圧剥離とは異なる。剥片の打面は折れているが、直接打撃によるもので、先史時代のものとしても良いだろう。

和田産の尖頭器、剥片（実測図№７，８，９、写真図版3,4）

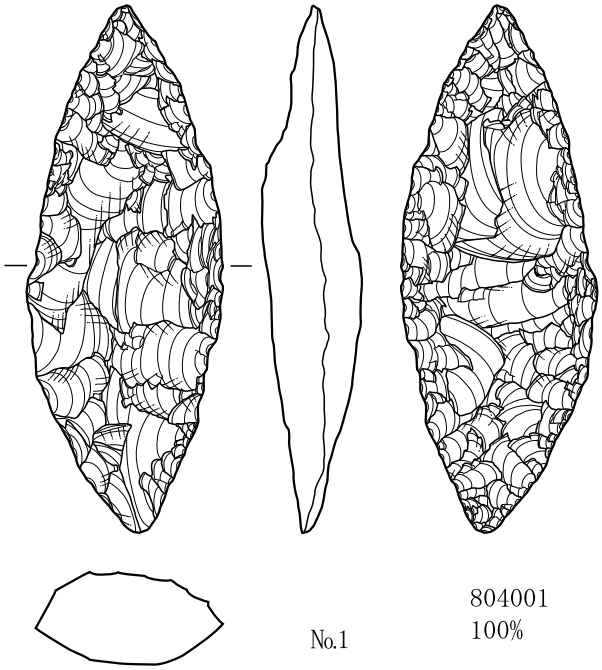
いずれの資料も風化面は新鮮である。尖頭器№７は小形で分厚い剥片の周囲を直接打撃で加工している。ハンマーは白滝産のものと同じ小石のハンマーであろう。写真図版３の１，２，３から、加工の縁辺が潰れているのがわかる。白滝産の尖頭器と異なる点は、両面加工になっていない点であるが、これは素材の剥片が小さかったためであろう。この資料からさらに読み取れることは、尖頭器の加工を正方向（剥片の主要剥離面から打撃を加えて、剥片の背面側に加工がなされる方向）から行っていることが特徴である。両面加工の通常の製作は、反方向（剥片の主要剥離面に加工がなされる方向）から開始し、その加工面を打面として正方向に平坦な加工を施すのが適切な手順である。こうした手順を踏まないと、この尖頭器のように、周縁のみを加工して、その剥離角が直角に近い加工面のみで形成される尖頭器ができあがる。白滝産の尖頭器は、その素材剥片に充分な大きさがあったのだろうし、和田産の尖頭器の素材剥片は小さい剥片であったことがうかがわれる。これは黒曜石の産地別原石の特徴とも一致している。

剥片２点は新鮮な剥離面をもつ剥片である。№８の剥片は平坦打面で縦折を生じている。縦折の状態は写真図版４，５で示した。№９の剥片は大きな球果の入った剥片で、偶発的に剥がれた剥片である。写真図版４の１にその打面を示したが、何度も同じ点を強い力で打撃して、コーンクラックが重なる様子が看取できる。数度の打撃を繰り返して、その衝撃の亀裂の極限で剥がれたものである。剥離のきっかけをつくったコーンが写真図版４の３である。また背面には同じように打撃を繰り返した痕跡が写真４の２に残っている。おそらく石核そのものが小さく、通常の手首をかえす打撃の技術では、剥がれにくかったのであろう。縄文時代の小さな石核には間接打撃が多く用いられることが経験上知られるが、この剥片は直接打撃のみの技術で形成されている。

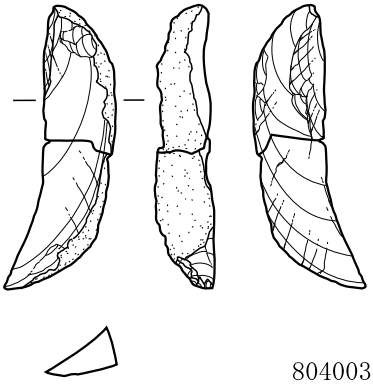
まとめ

資料体９点のうち、白滝産の黒曜石と和田産の資料体は新鮮な剥離面をもち、その技術は稚拙な直接打撃と押圧剥離によるものであった。諏訪星ヶ台産の資料体は、風化面と押圧剥離の状態から縄文時代の遺物とみなしてもよいものである。こうした現象は、次のことを推定させる。ひとつは、北海道白滝産の黒曜石は現在でも購入可能であり、それを利用したこと。和田男女倉遺跡は、現状でも小さな原石は採取できること。さらに星ヶ台産の資料体は、周辺遺跡からの表採遺物の可能性が高いことである。黒曜石の入手経路と資料体の技術から、以上のことを推定するのは矛盾がないと思われる。作為的混入遺物の資料体とは、以上のような石器であった。

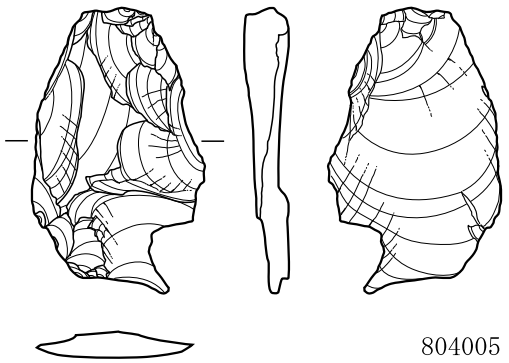
白滝8号沢群



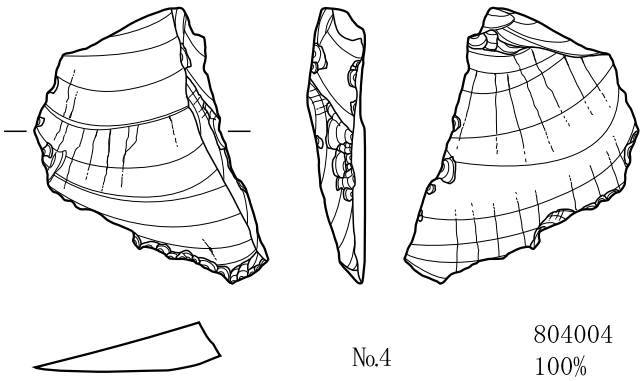
No.1　804001　100%



No.2　804003　100%

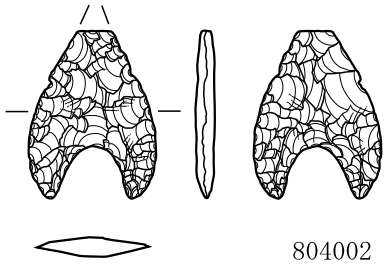


No.3　804005　100%

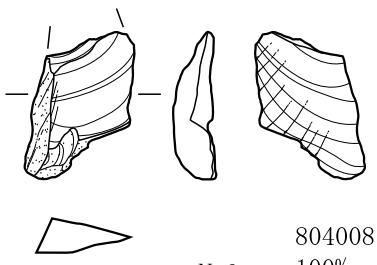


No.4　804004　100%

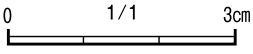
諏訪星ヶ台群



No.5　804002　100%

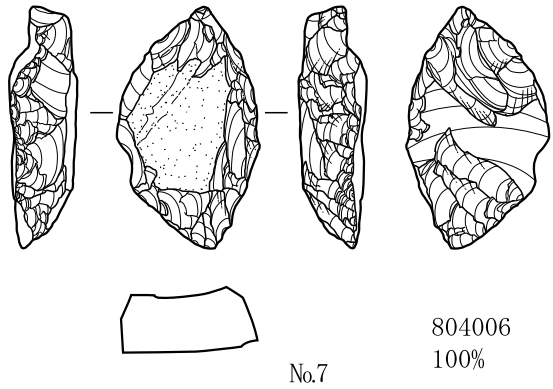


No.6　804008　100%



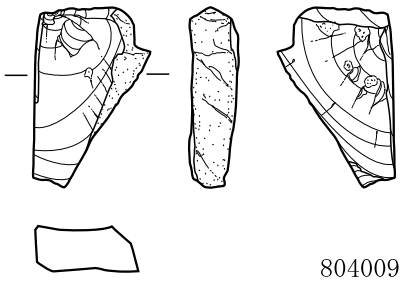
芹田東沖遺跡　石器実測図

和田群



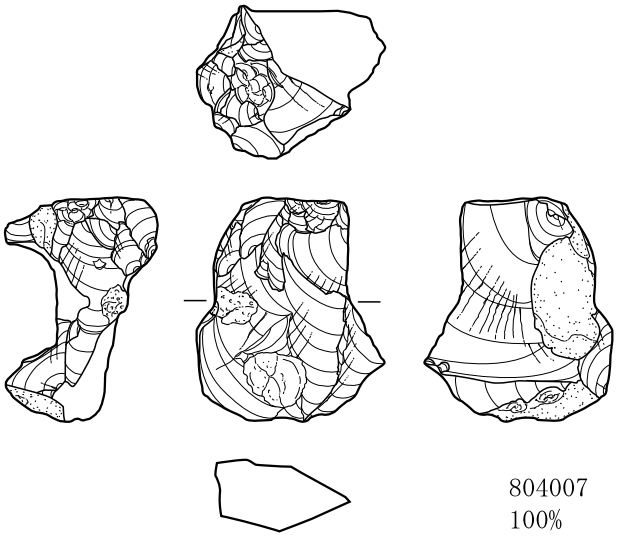
No.7

804006
100%



No.8

804009
100%



No.9

804007
100%

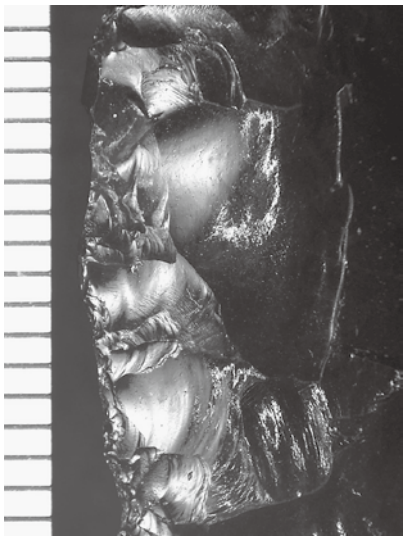
0 1/1 3cm

芹田東沖遺跡　石器実測図

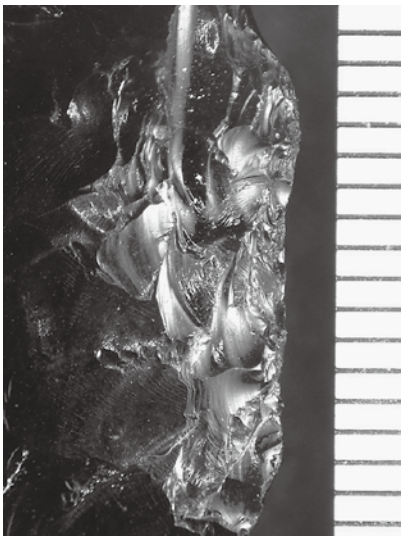
長野市芹田東沖遺跡出土黒曜石製石器計測表

実測図番号	㈱アルカ管理通番	器種	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）	出土遺構		遺物注記（整理No.）
							遺構	位置	
No.1	804001	尖頭器	69.8	26.1	13.4	17.5	小穴A区	A−1区	Pi−A 1
No.2	804003	剥片	37.7	14.9	8	2.5	試掘坑A区下層	A−1区下層	T−A 1下
No.3	804005	剥片	37.9	23.1	6	2.7	小穴A区	A−1区	Pi−A 1
No.4	804004	剥片	36.6	31.2	7.7	4.9	試掘坑A区下層	A−2区下層	T−A 2下−S
No.5	804002	石鏃	22.3	17	2.8	0.9	検出面A区	A−1区	検−A 1
No.6	804008	剥片	19.6	14.7	5.8	1.1	小穴A区	A−2区下層	Pi−A 2下
No.7	804006	尖頭器	32.1	19	9.1	5.6	小穴A区	A−1区	Pi−A 1
No.8	804009	剥片	23.9	15.6	6.7	2.3	小穴A区	A−2区下層	Pi−A 2下
No.9	804007	剥片	29.8	25	20.2	8.5	小穴A区	A−1区	Pi−A 1

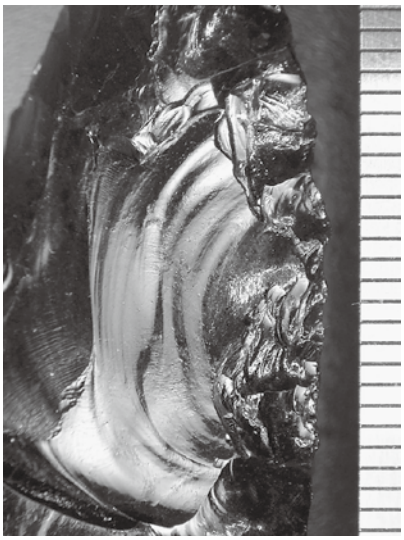
写真1の打面側



1



2



3

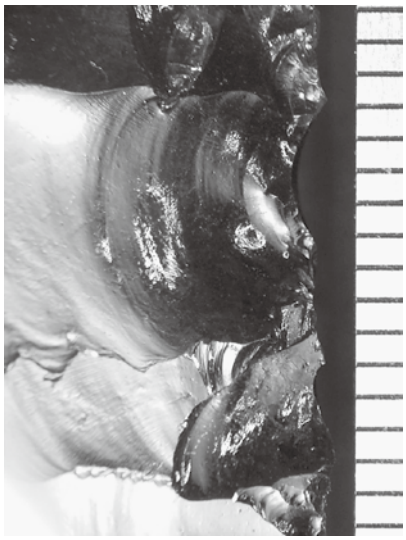
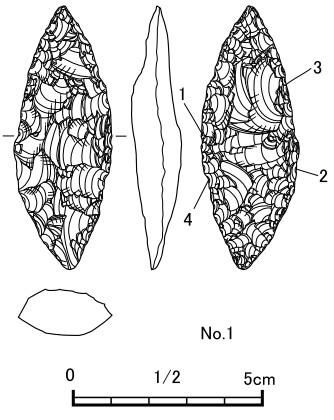
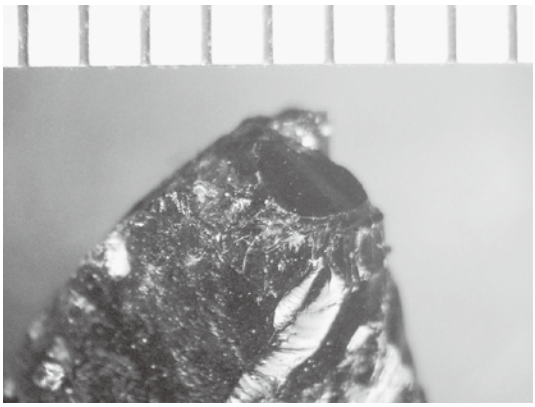


写真4の打面側

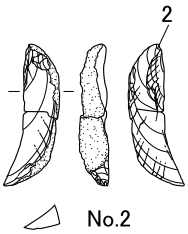
4



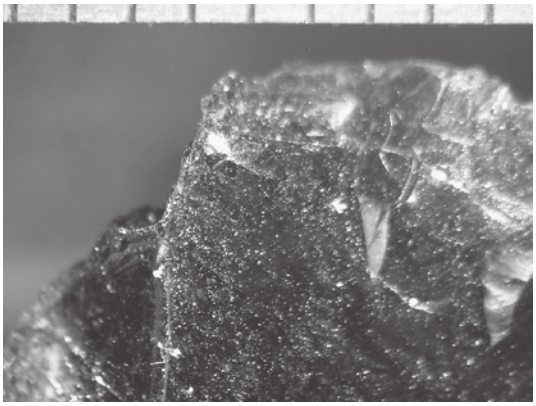
写真図版１



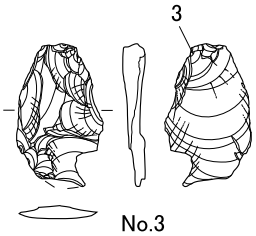
2



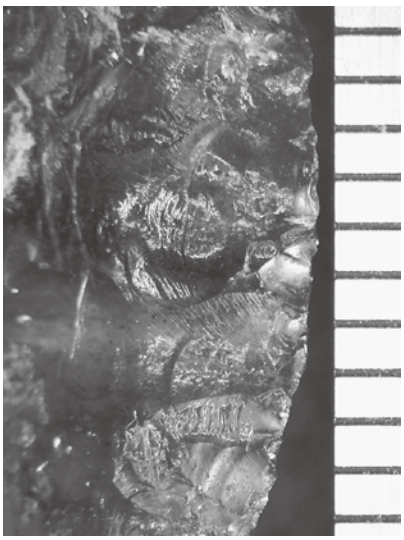
No.2



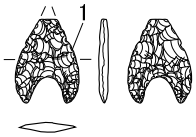
3



No.3



1



No.5

0 1/2 5cm

写真図版２

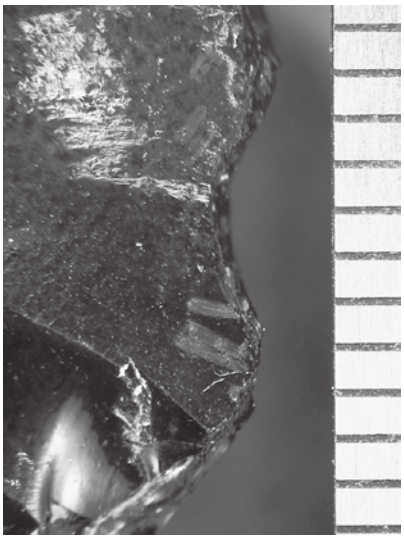
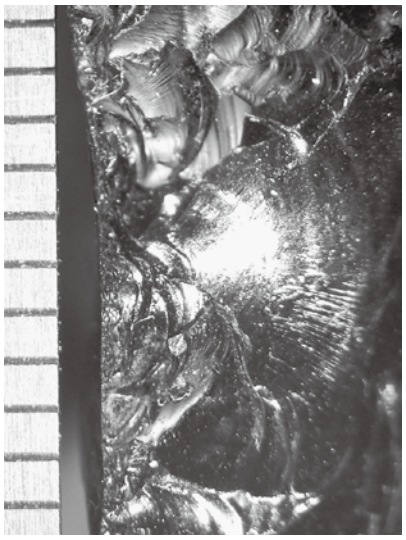


写真1の打面側



1

2

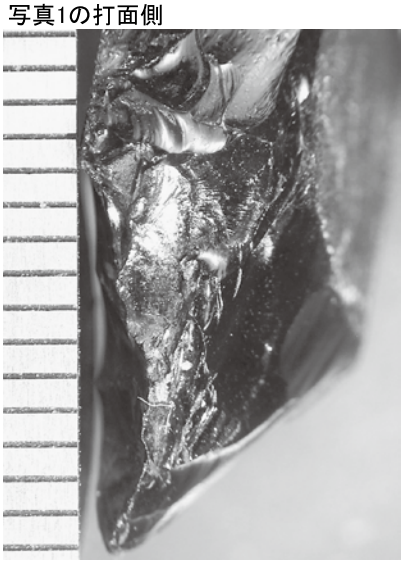
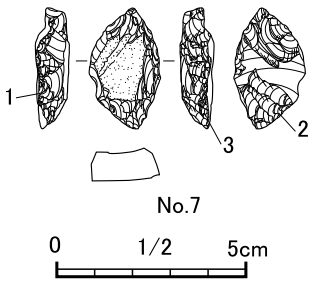
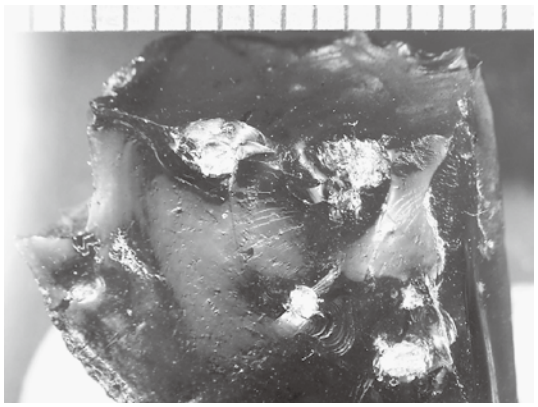


写真2の打面側

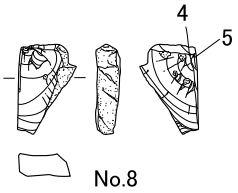
3



写真図版３

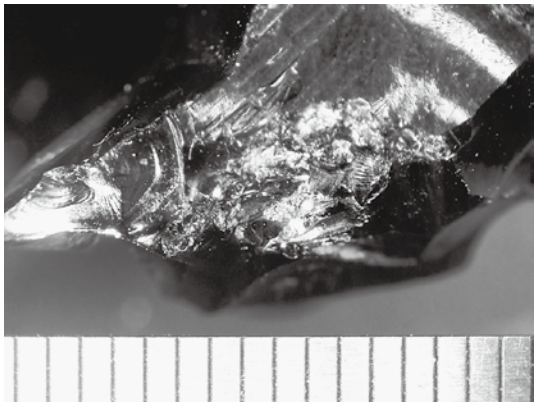


4

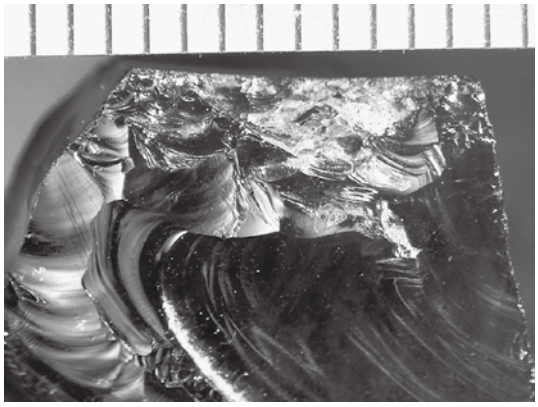


No.8

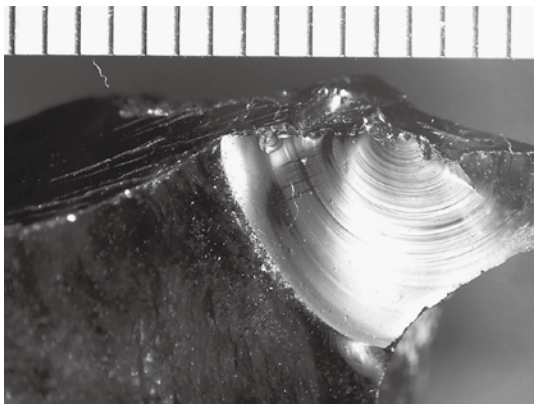
5



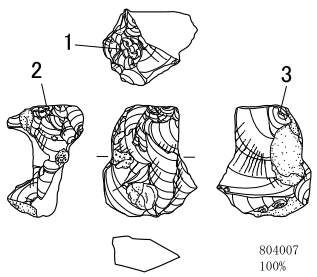
1



2



3



804007
100%

No.9

0 1/2 5cm

写真図版４

Ⅳ　都市計画道路栗田安茂里線地点（KA-20）の調査

1　調査概要

道路改良予定地の一帯は旧来からの水田域に属してきたが、現況は宅地として盛土造成されている。盛土の厚さは50㎝程度であり、埋め立てられた旧水田面以下の土層は、さほど撹乱を受けず当初からの堆積状態をとどめている。その土層序を見ると、旧地表の水田面から地表下40㎝までが均質な灰黄褐色粘土による水田土壌であり、連続的な水田耕作に伴って徐々に堆積が進行したことを示す縞状の鉄分等沈着が観察される。その下に厚さ10㎝内外の遺物包含層となる灰褐色粘土層と、基盤層となるシルト質黄褐色粘土層が続き、住居跡等の遺構は同層以下に掘り込まれることとなる。なお、基盤層であるシルト質黄褐色粘土層の厚さは約40㎝を測り、その下部には黒褐色粘土層及び灰褐色粘土層の堆積が連続する。黒褐色粘土層には未分解植物などの有機質が含まれ、低湿な環境において形成された一連の土壌であることが明らかであり、集落遺跡形成以前に一帯が湿潤な環境下にあったことを知ることができる。また、遺物包含層及び基盤層は、北東に向かって自然地形としての傾斜を強め、調査範囲の東側において裾花川旧河道としての低地域へと急激に落ち込んでいく。この状況から判断して、調査地が居住域となる微高地の縁辺部に立地し、芹田東沖遺跡の東縁を画する位置にあることが理解される。

東区・遺構の平面検出（東から）

東区・遺構の掘り下げ（東から）

この土層堆積の状況と事前の試掘調査結果に基づき、調査対象は現況道路に接続する西端部の60ｍ区間、面積約1,000㎡の範囲に限定された。調査を進めるにあたっては、駐車場等代替地確保の制約から調査区を二分割し、東側部分を東区、西側部分を西区とした。実質の調査面積470㎡の中で確認された遺構は、竪穴住居７軒（番号上は８軒であるが内２軒を同一住居と認定したもの）、溝５本を数え、その他に小穴（ピット）や性格不明遺構が検出された。（図47）

東区・遺構検出状況（東から）

2　遺構

調査において検出確認した遺構は、遺構種別に一連の番号を付し、各遺構の概要（所属時期、形態・施設・規模等検出状況、出土遺物）を一覧表に集約した（表５）。

遺構測量図に関しては、遺構全体図（１：300）及び遺構実測図（１：100）を掲載した。

なお、図及び写真においては、遺構名を次とおり記号で表記している。

竪穴住居：ＳＢ　　溝：ＳＤ　　性格不明：ＳＸ

小穴：Ｐｉｔ

(1) 竪穴住居

検出総数は７軒であり、東区及び西区東半に分布している。なお、東区において検出の３号住居と西区において検出の７号住居は、方位等から同一住居と判断して１軒と数えている。

１号、３号（７号）及び４号住居は互いに重複して位置しているが、その他の住居はそれぞれ単独で検出されている。ただし、全形が確認されたのは５号住居のみであり、その他は部分的な検出にとどまっている。

いずれも平安時代の所産であり、時期別の内訳としては、中段階に属するものが２軒（３・８号住居）、新段階に属するものが５軒（１・２・４～６号住居）となり、市民文化ホール地点と比較してやや新しい様相を示している。中段階住居は主軸方位を南北線にとった方形で、北壁にカマドを布設している。一方の新段階住居は東壁あるいは東南隅にカマドを布設し、小形・不整形（５・６号住居）の傾向が認められる。東壁それも東南隅に近くカマドを布設する例は、市民文化ホール地点においても１軒（16号住居）が確認されているが、平安時代竪穴住居における末期的な様相とみることができる。

(2) 溝

５本が確認される。１・２・４号溝は位置関係や方向性からみて、竪穴住居等の居住施設に関連した何らかの施設である可能性が考えられる。５号溝は５・６号住居が重複して検出範囲が限られて明瞭ではないが、幅員２ｍ程度の溝状遺構と認定した。以上の４本は平安時代の所産と判断される。３号溝は黄褐色のシルト質粘土を覆土とする大形溝で、最大幅は３ｍ、平面確認と試掘坑に

西区・表土除去と遺構の平面検出（東から）

西区・遺構の掘り下げ（東から）

西区・遺構の掘り下げ（東から）

西区・遺構検出状況（東から）

よる部分的確認にとどまり全掘してはいないが、検出面から底面までの深さは40cmを測る。遺物としては古墳時代後期から平安時代にかけての土器破片が散見されるものの少量であり、遺物包含層の上部から掘り込まれている状況から中世以降の水田開発と耕作に付随した水路痕跡と判断して大過ない。覆土が均質であることから、裾花川氾濫堆積による急激な埋没状況も想定される。

この他に員数外の溝３本が検出されている。西区の中央付近に並列して南北に走り、幅員30～60cm、覆土はいずれも黄褐色シルトである。近世の水田耕作に伴う水路の痕跡と判断されたものであり、平面確認のみで掘り下げは行っていない。

(3) 性格不明遺構

不整形の大形掘込で、床面が判然としていないものを性格不明遺構とした。１号遺構は東区２号住居の北側に位置し、平面形は長方形に近く、底面は擂鉢状に落ち窪み、検出面からの深さは最深で30cmを測る。底面近くに炭化物・灰の堆積層が存在するとともに、人為的に埋土された状況を観察することができる。２号遺構は西区５号住居が重複するもので、５号溝の延長部分に該当する可能性も考えられる。

(4) 小穴

西区５号住居と４号溝との間に小穴が集中分布する。配列が不揃いであるが、掘立柱建物等の居住施設の痕跡を示す可能性は否定されない。

(5) 河川流路跡

西区竪穴住居群の西側では、遺物包含層下に黒褐色土層が現われ、西に向かって緩やかに傾斜していく状況が確認された。さらに西側においては、黄褐色、黒褐色及び灰褐色のシルト層が縞状をなして堆積し、同層を被覆している状況が確認された。これらは一連の河川堆積物であると認定され、その堆積状態から判断して、西区の

ＳＢ－１（西から）

ＳＢ－２（南西から）

ＳＢ－２、ＳＸ－１（南から）

ＳＢ－５・６、ＳＤ－５（北から）

西半には谷状の自然地形すなわち河川流路跡が存在していることが明らかとなったものである。調査範囲内では確定はできないが、流路幅は20mを超えるものと想定され、方位は北北西から流下するものと想定される。

なお、この河川流路跡は、平安時代には既に埋没して河川としての機能は失われていたものと考えられるが、土層の傾斜や竪穴住居等の遺構分布などの状況を勘案すれば、平安時代においても低湿な窪地として残されていた可能性は高い。

ＳＢ－２・カマド

ＳＢ－６・カマド

表５　都市計画道路栗田安茂里線地点（KA-20）遺構一覧表

遺構名	記号	地区	時代（期）	遺構		出土土器			その他出土遺物	遺物注記（整理No.）
				形態・施設・規模	備考	重量(g)	実測	特記	土・石・金属製品他	
１号住居	SB-1	東	平安（Ⅲ）	方形（4.2×4.6m）東壁カマド		1,640	3			SB1-1・2
２号住居	SB-2	東	平安（Ⅲ）	方形 東壁カマド	SB-3に重複	3,200	11			SB2-1～3・No.1～3
３号住居	SB-3	東	平安（Ⅱ）	方形（4.5×？m）	同一遺構と認定 SB-1・4が重複	150	0			SB3
７号住居	SB-7	西	平安（Ⅱ）			570	3			SB7-1・2
４号住居	SB-4	西	平安（Ⅲ）	不明	SD-7に重複	1,650	3			SB4
５号住居	SB-5	西	平安（Ⅲ）	方形（3.7×2.8m）東南隅カマド	SD-5、SX-2に重複	3,780	5			SB5-1～3・No.1
６号住居	SB-6	西	平安（Ⅲ）	不明 東南隅カマド	SD-5に重複	1,070	3			SB6-1～3
８号住居	SB-8	西	平安（Ⅰ）	方形（3.6×？m）北壁カマド		3,590	7			SB8-1～3
１号溝	SD-1	東・西	平安	幅0.4～0.8m	SD-4と重複	280	0			SD1-1･2
２号溝	SD-2	東	平安	幅0.3m	SB-1と重複	320	0			SD2
３号溝	SD-3	東	近世？	幅2.6～3.0m	範囲のみ確認	590	2			SD3
４号溝	SD-4	西	平安	幅0.3～0.4m	SD-1と重複	20	0			SD4
５号溝	SD-5	西	平安	幅2.0m	SB-5・6が重複 範囲のみ確認	40	0			SD5
１号不明遺構	SX-1	東	平安	不整形 幅4.4m以上	擂鉢状	1,690	6		鉄片・骨	SX1-1･2･No.1
２号不明遺構	SX-2	西	平安	幅2.0～2.2m	溝状 SD-5延長部分？	680	1			SX2-1･2
小穴	Pit	西	平安			820	1			Pi-1～8
検出面	検	東・西				910	0		砥石	検-1・2
合計						21,000	45			

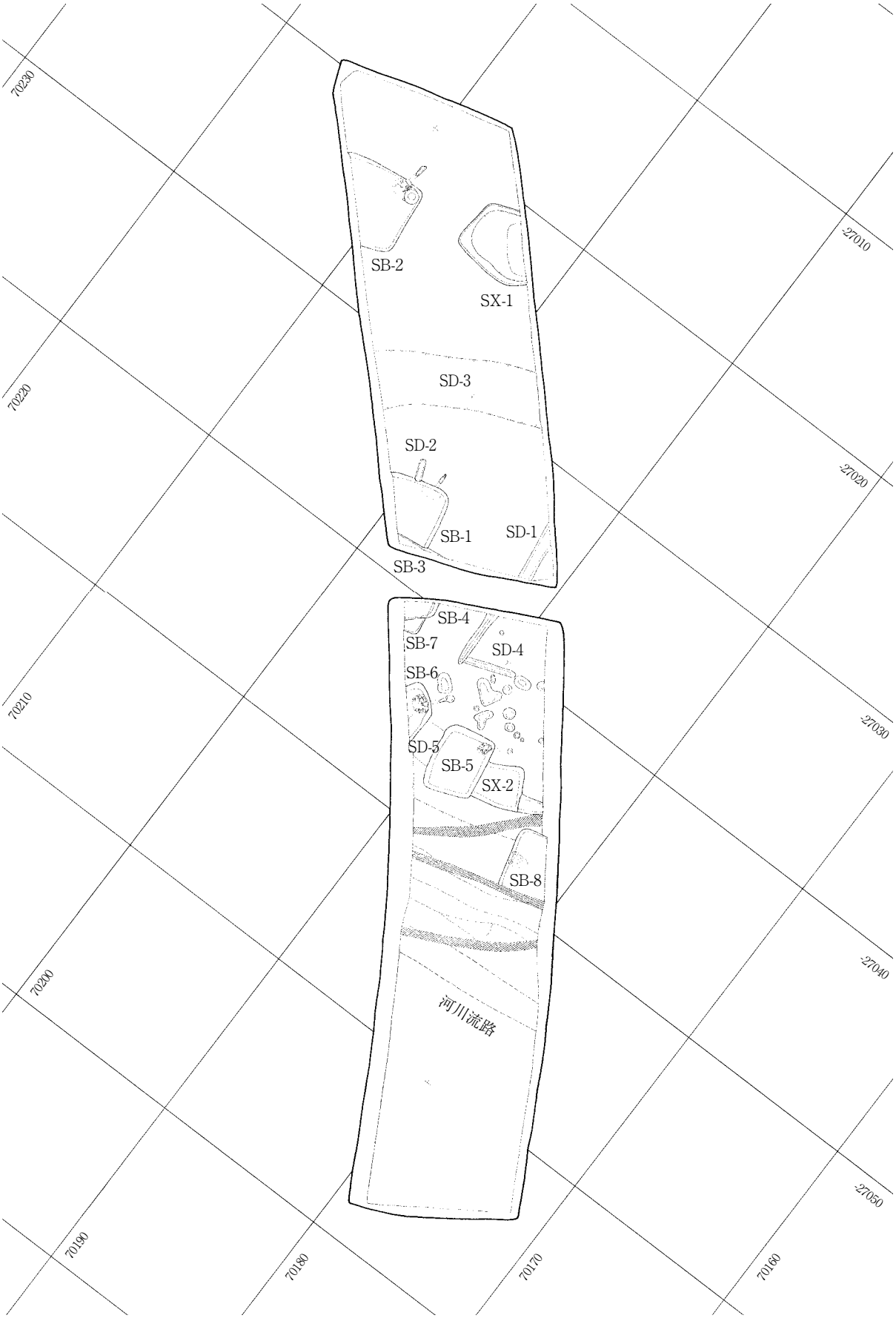


図47　ＫＡ－20地点　遺構全体図（１：300）

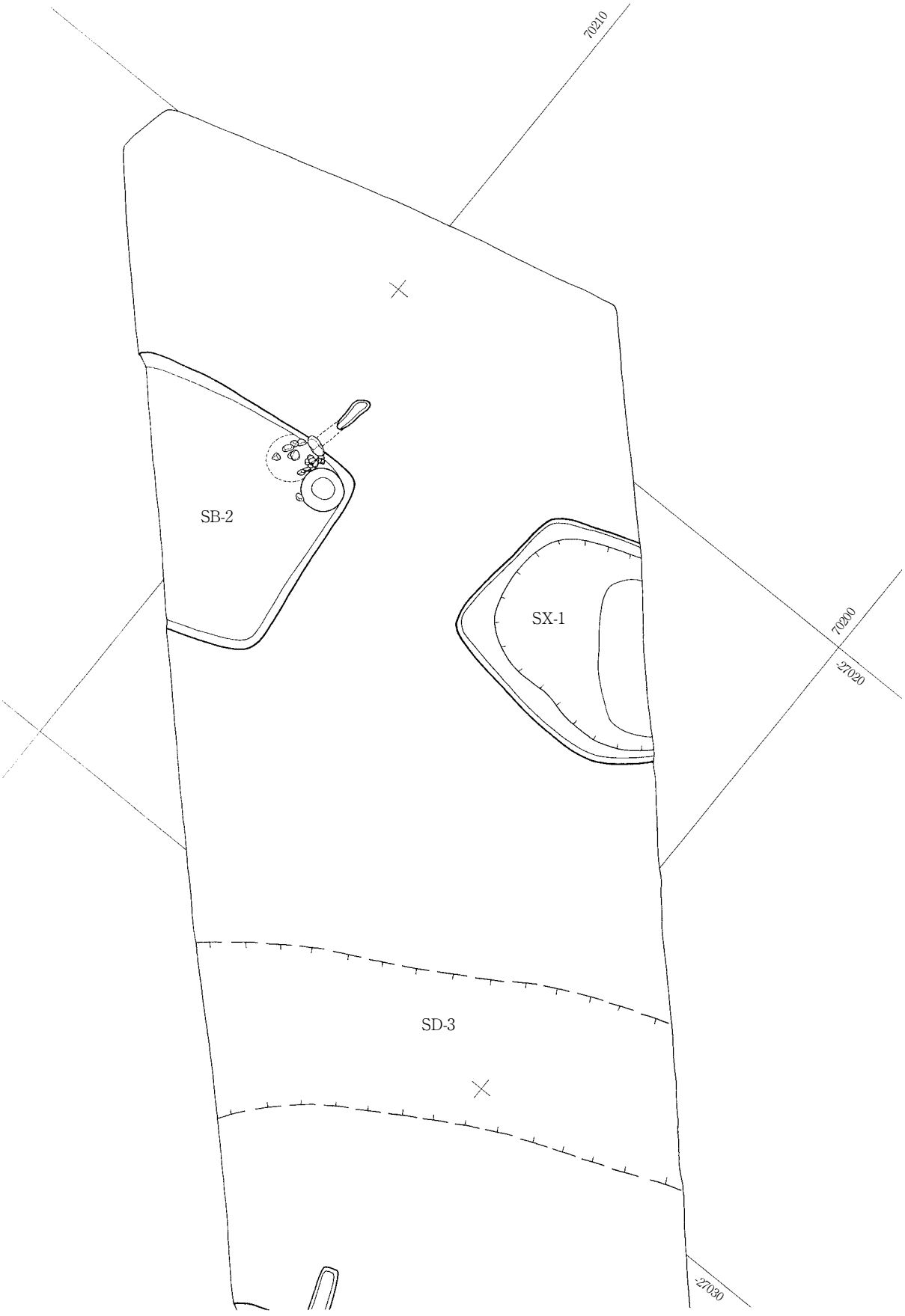


図48　ＫＡ－20地点　遺構実測図①（１：100）

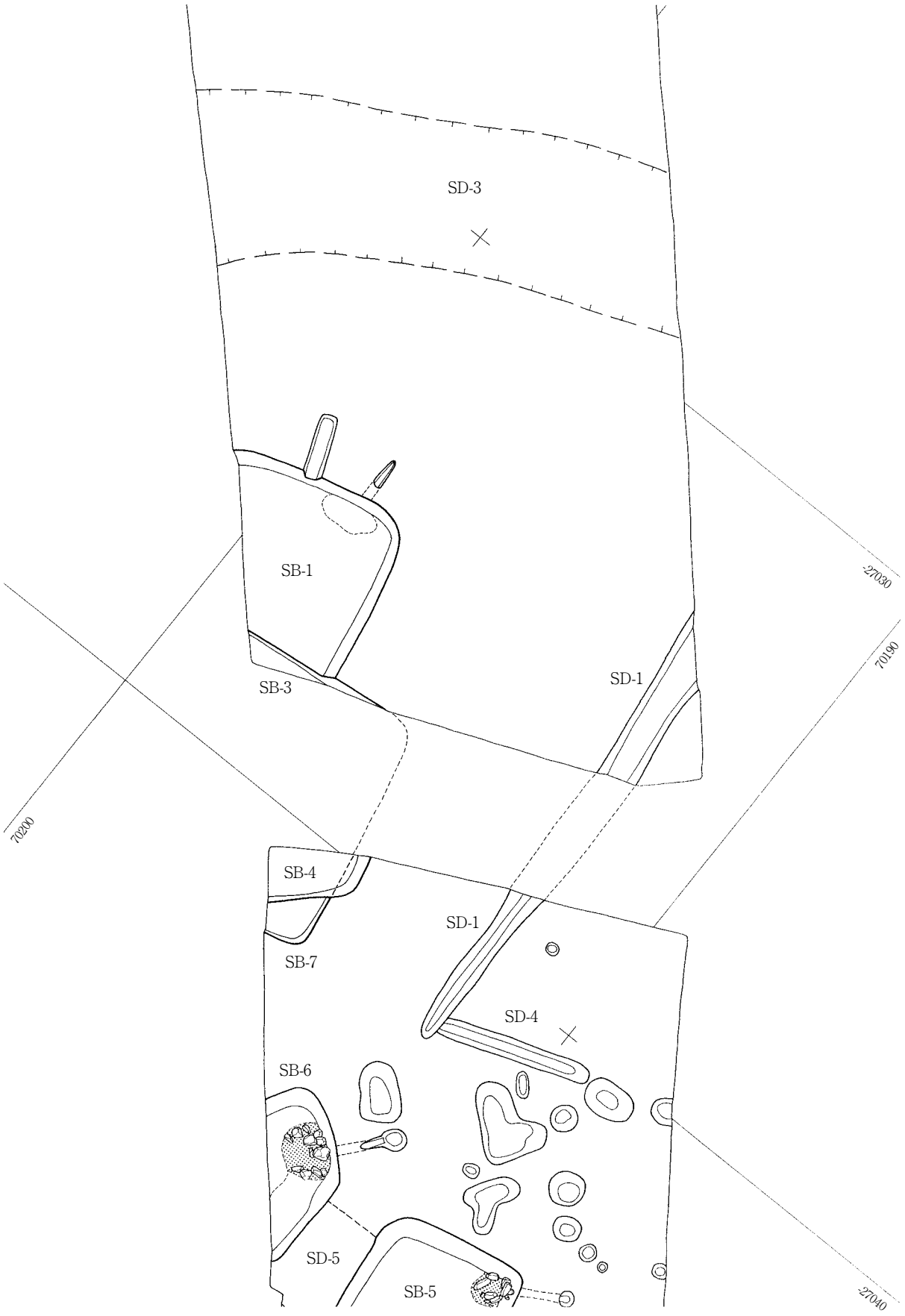


図49　ＫＡ－20地点　遺構実測図②（１：100）

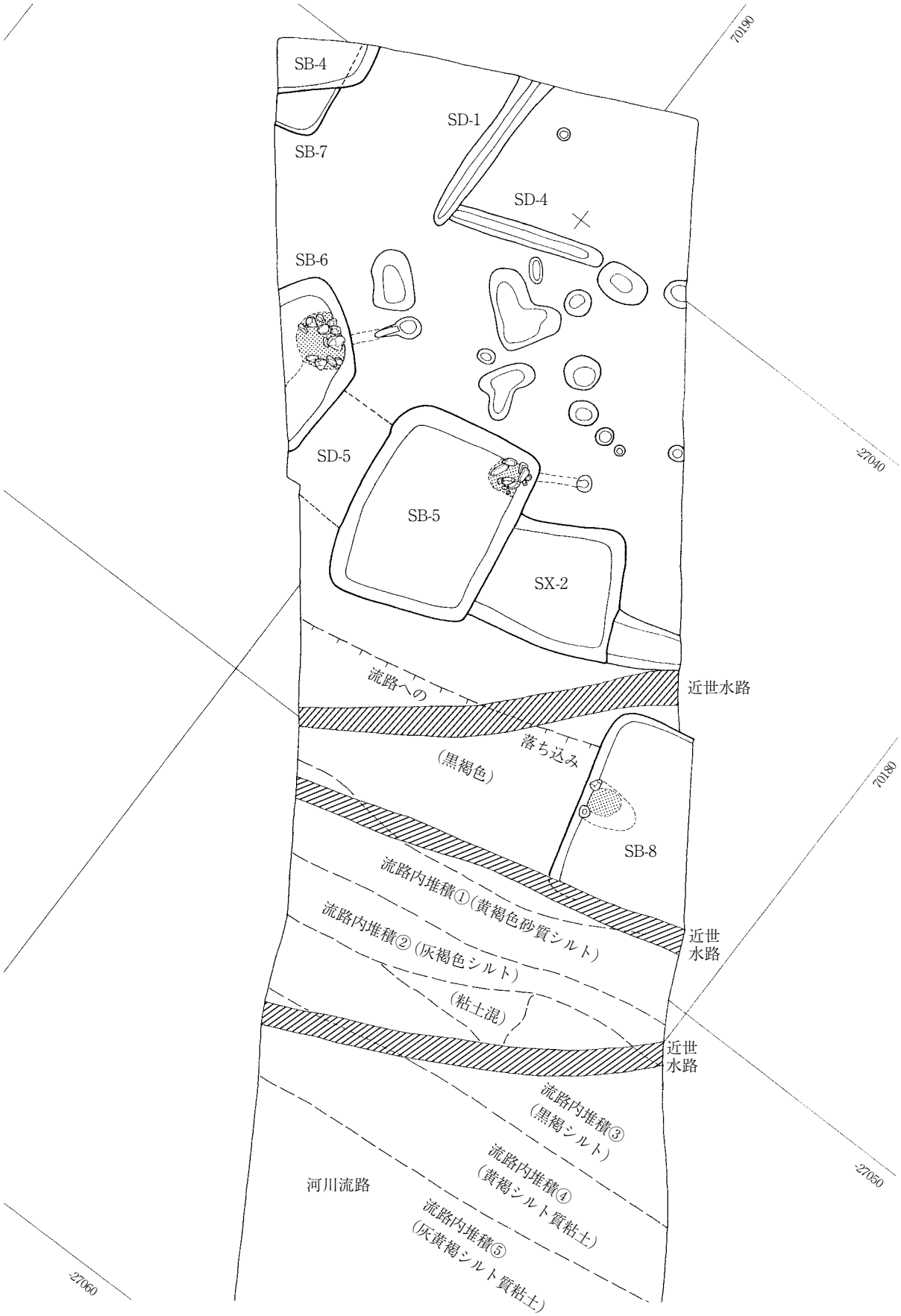


図50　ＫＡ－20地点　遺構実測図③（１：100）

3　遺物

全遺構、遺構外より出土した遺物を整理し、種類ごとに抽出、図化を行い一連の番号を付した。図化したものに関しては観察表にその詳細を記す。以下、種類ごとに詳細を述べる。

(1) 土器

全遺構、遺構外から出土した土器の総重量は約21,000ｇに及ぶ。このうち、実測対象として各部位いずれかの径が概ね２分の１以上遺存する個体を抽出し、44個体を図化した。その上で器種ごとに、形態及び遺存の程度、寸法に応じて分類を行い、詳細を土器観察表にまとめた。なお、表中では、図面上認められる遺存部位を「全形」「口縁部」「底部」のように表記し、これに対する遺存の程度を「1/1」「2/3」「1/2」などとした。

以下、詳細を述べる。

①弥生時代後期後半（図51）

性格不明２号遺構より甕が１点確認された。頸部から口縁は欠損しているが、比較的小形の個体である。頸部には櫛描簾状文を右回りに施文し、静止痕が現存で３ヶ所認められる。胴部上半には波状文を２条、上位から下位方向へ施す。胴部下半はタテヘラミガキ、底部周辺はヘラケズリによって整え、内面はヘラミガキが施される。弥生時代後期後半に比定される。

②平安時代

当地点では該期の遺構とそれに伴う遺物が主体を占めている。形態及び、器種組成からⅠ期（古段階）・Ⅱ期（中段階）・Ⅲ期（新段階）の３つの時期に区分できる。

Ⅰ期　８号住居が相当する。食膳具では須恵器坏・高台坏が主体を占め、土師器の出土は認められない。須恵器坏は縮小化の傾向がうかがえるが、口径が13㎝台とやや大きめである。高台坏は坏部の定型化が進み、小形化した段階と言える。いずれも硬質で灰～灰白色を呈し、焼成状態は良好であり、須恵器生産終了段階には至らないものと思われる。

煮炊具では小甕と砲弾形の甕がカマド内から出土した。抽出した３個体の砲弾甕はいずれも寸法に大きな差はなく、外面をヘラケズリ、内面をカキメ調整する点で共通するが、調整の加え方が各々で異なっている。また、42は口縁端部を面取りし、内面の底部付近には炭化物が付着する。43は外面を頸部までヘラケズリするが、胴部の広い範囲に粘土の付着が認められる（点線範囲）。器種の組成・形態から９世紀前半に比定される。

Ⅱ期　３号（７号）住居が相当する。遺物の出土量が少なく、器種組成は明確ではないが抽出個体では黒色処理の土師器坏、土師器高台坏が認められる。25・26は内面を磨いており、26は「十」字の暗文を施す。27の坏部は腰が張らずに緩やかに立ち上がる形態となり、高台内には回転糸切りの痕跡を残す。９世紀中葉から後半に比定される。

Ⅲ期　相当する遺構は最も多く、１・２・４・５・６号住居が挙げられる。全遺構は抽出個体に須恵器が認められない点で共通している。しかし、Ⅲ期の中でも時期差が認められ、１・４・５号住居は古相に位置付けられる。いずれも黒色処理の土師器坏・高台坏が認められ、土師器坏（19）は口径が11.4㎝であり縮小化がうかがえる。６号住居では土師器坏の寸法における器形分化が進み、23のような大形の個体も確認できる。２号住居は最

も新相に位置付けられる。黒色処理の土師器坏は認められず、土師器坏（４・５）は口径が９㎝台となる。一方で７は器形分化した大形の個体と考えられるが、前述した６号住居出土の23と比較すると小形化が顕著に見られる。高台坏では寸法による大小の器形分化が認められる。10は内面を黒色処理して深碗形になるのに対し、12は腰が張らずにまっすぐ口縁まで伸びるもので、口径は10㎝台と小形になる。また、皿（８・９）は口径が９㎝前後であるが、器高が低くなる点で坏とは区別される。器種組成から１・４・５号住居は10世紀前葉から中葉、６号住居は10世紀後半、２号住居は10世紀末から11世紀初頭に比定される。

なお、性格不明１号遺構からも土師器坏が出土しているが、寸法の小さい個体が多く２号住居出土遺物よりさらに時代が下る可能性がある。

以上、該期に相当する遺構が主体となるが、形態及び器種組成から市民文化ホール地点よりも新相を呈するという結果を得た。

③篦書（図52）

焼成前に篦状工具などで文字や記号を刻んだものを篦書とする。当地点では１点が確認されている。須恵器坏（38）の体部から底部にかけて「十」字が刻まれる。線は非常に細く、先端の尖った釘状工具か、もしくは篦状の工具で刻まれたものと思われる。「十」字は縦方向から横方向の順序で刻まれ、一端は底部に伸びている。窯印としてつけられていた可能性がある。

(2) 石製品（図52）

人為的な加工が行われ、製品として使用していたことが明確なものを選出し、図化した。砥石が１点出土している。

砥石　45は砂岩を使用し、表裏面・両側面に使用痕を残すが、下端部にもＵ字状の溝が認められ使用した可能性がある。表面には線状痕に混じって幅５㎜程のＵ字状の溝が３条みられる。裏面および両側面は平面を使用し、非常に細かい線状痕が残る。

表６　都市計画道路栗田安茂里線地点（KA-20）遺物一覧表

遺構名	記号	地区	時代（期）	土器			土製品	石製品	金属製品	その他	遺物注記（整理No.）
				重量（g）	実測	特記					
１号住居	SB-1	東	平安(Ⅲ)	1,640	3						SB1-1・2
２号住居	SB-2	東	平安(Ⅲ)	3,200	11						SB2-1～3・No.1～3
３号住居	SB-3	東	平安(Ⅱ)	150	0						SB3
４号住居	SB-4	西	平安(Ⅱ)	1,650	3						SB4
５号住居	SB-5	西	平安(Ⅲ)	3,780	5						SB5-1～3・No.1
６号住居	SB-6	西	平安(Ⅲ)	1,070	3						SB6-1～3
７号住居	SB-7	西	平安(Ⅲ)	570	3						SB7-1・2
８号住居	SB-8	西	平安(Ⅰ)	3,590	7						SB8-1～3
１号溝	SD-1	東・西	平安	280	0						SD1-1･2
２号溝	SD-2	東	平安	320	0						SD2
３号溝	SD-3	東	近世？	590	2						SD3
４号溝	SD-4	西	平安	20	0						SD4
５号溝	SD-5	西	平安	40	0						SD5
１号不明遺構	SX-1	東	平安	1,690	6				鉄片	骨片	SX1-1･2・No.1
２号不明遺構	SX-2	西	平安	680	1						SX2-1･2
小穴	Pit	西	平安	820	1						Pi-1～8
検出面	検	東・西		910	0			砥石			検-1・2
合計				21,000	45						

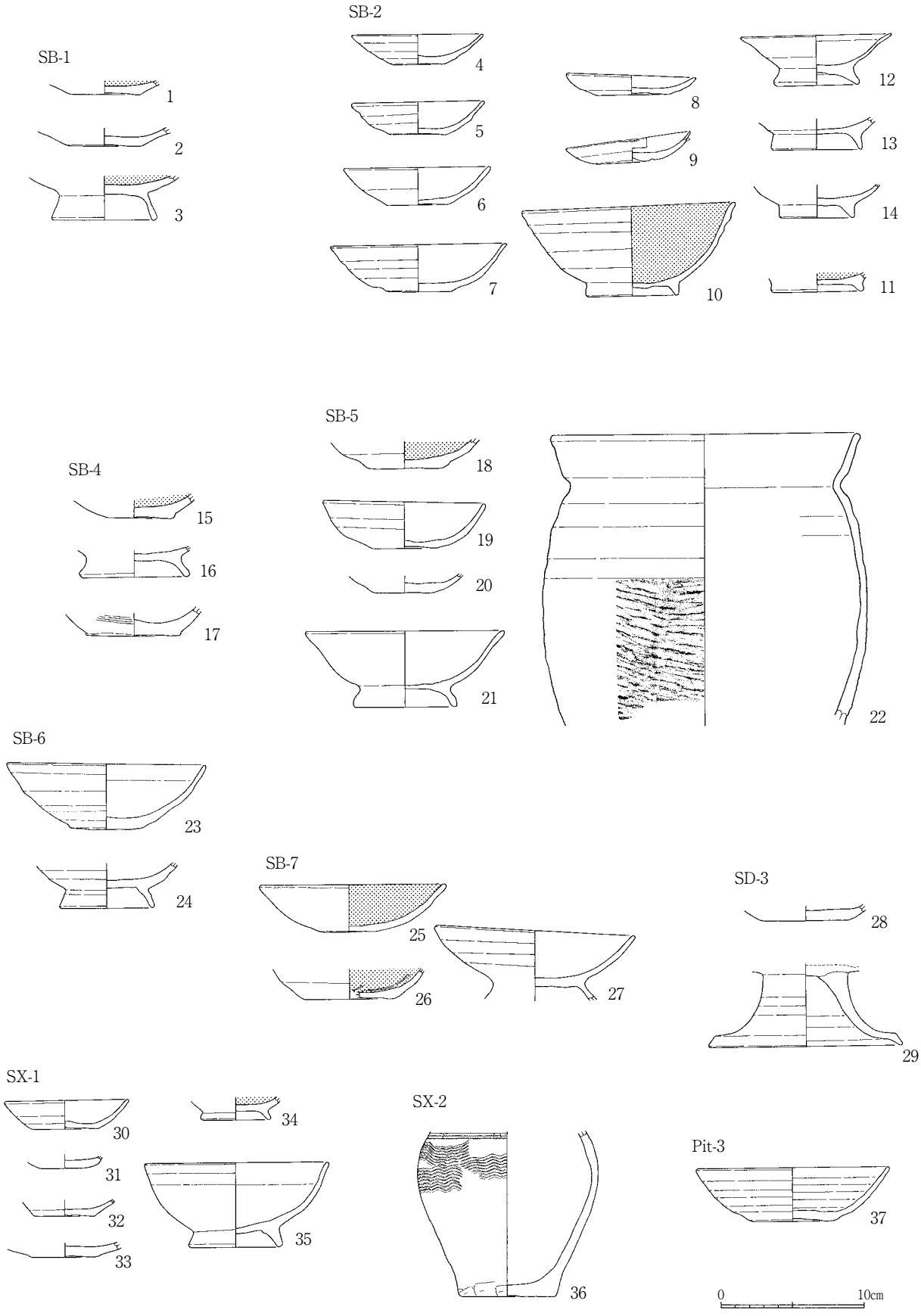
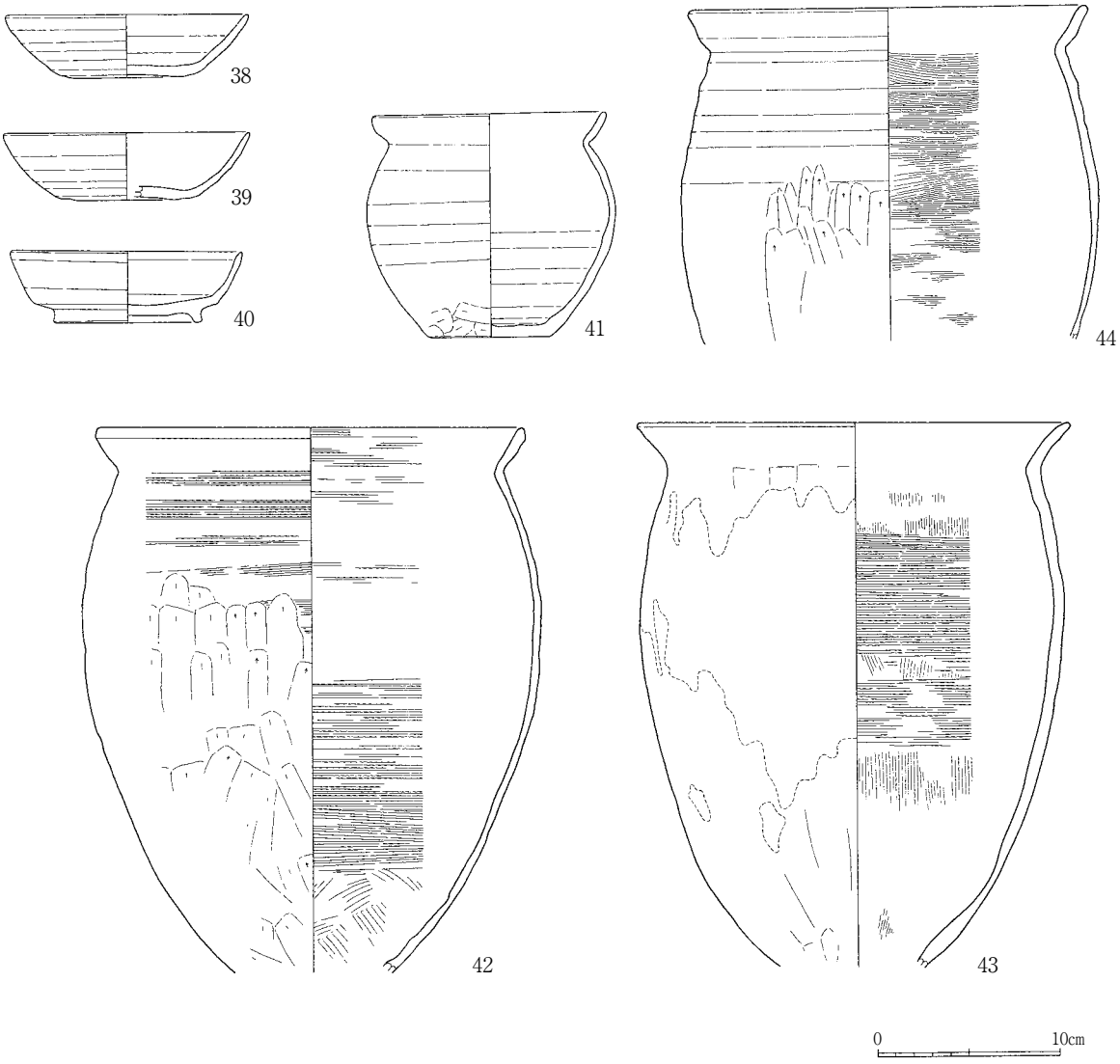
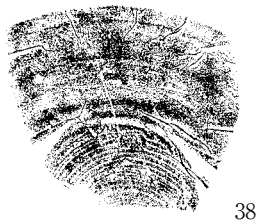


図51　ＫＡ－20地点　遺物実測図①（１：４）

SB-8



篦書



石製品

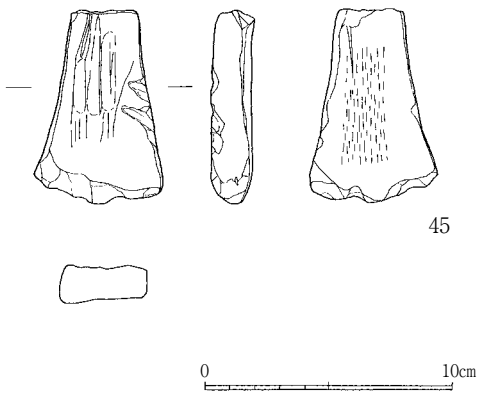


図52　ＫＡ－20地点　遺物実測図②（土器１：４、拓本・石製品１：３）

遺物写真

4

5

6

7

9

19

23

10

30

38

40

35

36

41

43

45

表７　都市計画道路栗田安茂里線地点（KA−２０）　土器観察表

図版	番号	出土遺構		遺物注記（整理No.）	抽出No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法（cm）			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
	1	SB−1	下層	SB1−2	1	平安	土師器	坏	底部	1/1		5.1		糸切　内黒	
	2	SB−1	下層	SB1−2	2	平安	土師器	坏	底部	1/2		5.2		糸切	
	3	SB−1	下層	SB1−2	3	平安	土師器	高台坏	底部	1/1		7.3		内黒	
	4	SB−2	カマド右ピット内	SB2−3	2	平安	土師器	坏	全形	1/2	9.2	4.0	2.1	糸切？	○
	5	SB−2	カマド右ピット	SB2−No.2	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	9.4	4.3	2.3	糸切	○
	6	SB−2	カマド横	SB2−No.1	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	10.3	4.4	2.6	糸切	○
	7	SB−2	カマド右ピット内	SB2−3	1	平安	土師器	坏	全形	1/1	12.3	4.6	3.3	糸切→ナデ	○
	8	SB−2	上層	SB2−1	6	平安	土師器	皿	全形	1/2	9.1	4.8	1.4	糸切	
	9	SB−2	カマド右ピット	SB2−No.3	1	平安	土師器	皿	全形	1/1	8.8	5.1	1.6	糸切	○
	10	SB−2	上層	SB2−1	1	平安	土師器	高台坏	全形	2/3	15.0	6.5	6.3	内黒	○
	11	SB−2	上層	SB2−1	2	平安	土師器	高台坏	底部	1/1		6.5		内黒	
	12	SB−2	上層	SB2−1	5	平安	土師器	高台坏	全形	1/2	10.6	6.0	3.5		
	13	SB−2	上層	SB2−1	4	平安	土師器	高台坏	底部	2/3		6.4			
	14	SB−2	上層	SB2−1	3	平安	土師器	高台坏	底部	1/1		5.3			
	15	SB−4	覆土〜床面	SB4	2	平安	土師器	坏	底部	1/1		4.8		糸切　内黒	
	16	SB−4	覆土〜床面	SB4	3	平安	土師器	高台坏	底部	1/1		7.7			
	17	SB−4	覆土〜床面	SB4	1	平安	土師器	小甕	底部	1/1		6.6		ハケメ　糸切	
	18	SB−5	覆土上層	SB5−1	1	平安	土師器	坏	底部	1/1		5.2		糸切　内黒	
図51	19	SB−5	床面	SB5−No.1	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	11.4	4.5	3.2	糸切	○
	20	SB−5	覆土下層	SB5−2	1	平安	土師器	坏	底部	1/1		4.1		糸切	
	21	SB−5	カマド	SB5−3	1	平安	土師器	高台坏	全形	1/4	14.0	7.2	5.3		
	22	SB−5	カマド	SB5−3	2	平安	土師器	甕	口〜胴	1/4	21.7			タタキ	
	23	SB−6	床面	SB6−3	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	14.0	5.1	4.6	糸切	○
	24	SB−6	覆土下層	SB6−2	1	平安	土師器	高台坏	底部	2/3		6.6			
	25	SB−7	覆土上層	SB7−1	1	平安	土師器	坏	全形	2/3	13.1	4.2	3.3	糸切　内黒	
	26	SB−7	覆土上層	SB7−1	2	平安	土師器	坏	底部	1/2		6.4		糸切　内黒　暗文	
	27	SB−7	覆土下層	SB7−2	1	平安	土師器	高台坏	口縁部	1/2	14.0			高台内糸切り痕	
	28	SD−3	トレンチ内	SD3	1	平安	須恵器	坏	底部	1/2		6.2		糸切	
	29	SD−3	トレンチ内	SD3	2	奈良	須恵器	盤	脚部	1/3		13.6			
	30	SX−1	下層	SX1−2	3	平安	土師器	坏	全形	1/2	8.5	4.6	2.0	糸切	○
	31	SX−1	上層	SX1−1	1	平安	土師器	坏	底部	1/1		3.6		糸切	
	32	SX−1	下層	SX1−2	2	平安	土師器	坏	底部	2/3		4.2		糸切	
	33	SX−1	上層	SX1−1	2	平安	土師器	坏	底部	1/2		4.9		糸切	
	34	SX−1	下層	SX1−2	1	平安	土師器	高台坏	底部	1/1		4.9		内黒　暗文	
	35	SX−1		SX1−No.1	1	平安	土師器	高台坏	全形	2/3	12.6	6.6	5.9		○
	36	SX−2	覆土下層	SX2−2	1	弥生	弥生	甕	胴〜底	2/3		6.8		櫛描簾状文 波状文 ミガキ ケズリ	○
	37	pit−3	覆土	pi−3	1	平安	須恵器	坏	全形	2/3	13.6	5.5	3.7	糸切	
	38	SB−8	覆土	SB8−1	1	平安	須恵器	坏	全形	1/1	13.4	6.6	3.4	糸切　篦書	○
	39	SB−8	覆土	SB8−1	2	平安	須恵器	坏	全形	1/2	13.6	5.6	3.7	糸切	
	40	SB−8	カマド	SB8−2	1	平安	須恵器	高台坏	全形	2/3	12.7	8.1	3.9		○
図52	41	SB−8	カマド	SB8−3	1	平安	土師器	小甕	全形	1/1	12.6	6.8	12.2	ケズリ	○
	42	SB−8	カマド	SB8−2	2	平安	土師器	甕	口〜胴	2/3	23.4			ケズリ　カキメ　ハケメ	
	43	SB−8	カマド	SB8−2	4	平安	土師器	甕	口〜胴	2/3	23.8			ケズリ　ハケメ→カキメ	○
	44	SB−8	カマド	SB8−2	3	平安	土師器	甕	口〜胴	1/2	22.0			ケズリ　ハケメ	

表８　都市計画道路栗田安茂里線地点（KA−20）その他の遺物観察表

図版	番号	時代	種別	名称	遺存	重量（g）	形態等（cm）	写真	出土遺構		遺物注記（整理No.）
									遺構	位置	
図52	45	平安	石製品	砥石	全形	87	砂岩　長7.6　幅2.6〜5.1	○	検出面		検−１

報告書抄録

ふりがな	せりたひがしおきいせき
書名	芹田東沖遺跡
副書名	若里市民文化ホール地点　都市計画道路栗田安茂里線地点
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第129集
編著者名	青木和明　塚原由実　木村夏奈　向山純子　㈱アルカ・角張淳一
編集機関	長野市教育委員会　文化財課　埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地　TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2011（平成23）年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
芹田東沖遺跡（せりたひがしおきいせき）若里市民文化ホール地点	長野県長野市（ながのながの）若里（わかさと）３丁目字東沖（ひがしおき）894他	20201	B－017	36°37′52″	138°11′47″	19930517～19931021	8290㎡	公共施設建設
						19940509～19950203	2310㎡	
						19950522～19950616	990㎡	
芹田東沖遺跡（せりたひがしおきいせき）都市計画道路栗田安茂里線地点	長野県長野市（ながのながの）大字稲葉字上千田沖（いなばかみせんだおき）15-2他	20201	B－017	36°37′56″	138°11′52″	20081106～20081205	470㎡	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芹田東沖遺跡 若里市民文化ホール地点	集落	弥生～平安時代	竪穴住居　44軒 溝　16本 土坑　26基 掘立柱建物　14棟	弥生土器 土師器・須恵器 灰釉陶器 砥石	
芹田東沖遺跡 都市計画道路栗田安茂里線地点	集落	古墳～平安時代	竪穴住居　７軒 溝　５本	土師器・須恵器 灰釉陶器 砥石	

要約

調査地は裾花川扇状地末端の低地域に属し、犀川流路に接した南側には浸食崖が形成されている。一帯に堆積する土壌には、未分解の有機質が混合するなど、低湿な環境下において連続的に形成された粘土が主体であり、通常の集落遺跡と比較してやや特異な立地条件の中で、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての遺構・遺物を検出した。

検出遺構・遺物の中では、奈良時代段階の竪穴住居と掘立柱建物の構成と、「市寸」と墨書された土器の出土が注意される。「市寸」は中世荘園名に連なる地名「市村」を示していると判断されるものであり、同地名が奈良時代にまで遡ることが証明されるとともに、遺跡の成立が律令体制下における信濃国水内郡芹田郷との連関において理解される可能性も示唆されることとなった。

長野市の埋蔵文化財第129集

芹田東沖遺跡

—若里市民文化ホール地点—
—都市計画道路栗田安茂里線地点—

平成23年３月31日　発行

編　集　　長野市教育委員会
発　行　　文化財課　埋蔵文化財センター
印　刷　　鬼灯書籍株式会社